

『イパーチイ年代記』 翻訳と注釈 (11)
— 『ガーリチ・ヴォルイニ年代記』 (1230 ~ 1250 年)

中沢敦夫, 宮野裕, 今村栄一

『イパーチイ年代記』 翻訳と注釈 (11) — 『ガーリチ・ヴォルイニ年代記』 (1230 ~ 1250 年)

中沢敦夫, 宮野裕, 今村栄一

[762] これより後, われらは多くの, 騒乱, 大いなる策略, 無数の戦争について語ろう¹⁾。

6738 [1230] 年

【反ダニール派ガーリチ貴族たちのダニール殺害の謀議が失敗に終わる：1230 年】

ガーリチの神を畏れぬ貴族たちの間に反乱が起こった。〔ガーリチ貴族たちは〕かれ〔ダニール [I111]〕の兄弟の息子アレクサンドル²⁾ (Олександръ)[I121] とともに, かれ〔ダニール〕を殺害し, かれの土地を引き渡すこと³⁾ について謀議した。

かれら〔ダニールとヴァシリコ〕が〔屋敷で〕評議⁴⁾ していたとき, 〔貴族たちはその屋敷に〕火をかけようと図った。憐れみ深い神は, 〔屋敷を〕出るようにとの想をヴァシリコ [I112] の

1) この文言は, 6735(1227)年の冒頭の文言と構文や表現が共通であり, 明らかに同じ編者による挿入であり, やはりここに編集上の切れ目を見出すことができる。(『イパーチイ年代記』(10): 304 頁, 注 423) 参照)

2) 「兄弟の息子」(братучадье) は, ダニール [I111] の父ロマン [I11] から見たアレクサンドル・フセヴォロドヴィチ [I121] に対する親族名称であり, 厳密に言えば誤用である。ダニールにとってアレクサンドルは従兄弟だから братань もしくは стрыч が正しい。親族の位階においてアレクサンドルをダニールより低く見せるために, 年代記記者があえて誤った語を用いたか。

アレクサンドル [I121] は当時ベルズ公で, かれは 6733(1225)年の記事でも, ダニールを誹謗して, ムスチスラフ武運公 [J51] にダニールを討伐させている (『イパーチイ年代記』(10): 294 頁, 注 375) 参照)。この度も, ガーリチの反ダニール派貴族たちは, アレクサンドル [I121] の積年の敵愾心を利用しようとしたのである。

3) 「引き渡す」の原語は全ての写本で преднее と表記されているが, ウクライナ語訳はこれを предание (引き渡し) と読み替えて解釈しており, ロシア語訳, 英訳も同様に解釈した訳文になっている。本翻訳でもこの解釈に倣った。

なお, ダニール殺害後, 謀反貴族たちはかれの土地 (земля) を誰に「引き渡そう」としたかについて原文には記述がなく, 英訳は「ハンガリー人に」と解釈しているが, アレクサンドル [I121] は長年ガーリチの領有を主張していたことから (上注 2 参照), ウクライナ語訳の解釈の「アレクサンドルに」を採りたい。

4) 「評議している」(в думѣ)「かれら」(им) が誰であるか解釈が難しいが, 評議 (дума) の語は通常は肯定的な文脈で用いられることから, ここではダニールとヴァシリコの二人と考えたい。

心に与えた。そして〔ヴァシリコは〕自らの剣を抜くと、試合を装って⁵⁾〔ハンガリー〕王の従者⁶⁾を〔撃ち〕、別の〔従者〕とも試合を装ってその盾を奪い取った。不忠者のモリボゴヴィチ一族⁷⁾ (Молибоговидьчи) はこれを見た。かれらは神を恐れて「われらの謀議は失敗に終わった」と言った。かれらは呪われたスヴァトボルク⁸⁾ [07] のように逃げ出した。別の〔謀議参加〕者たちは、ダニール公 [I111] とヴァシリコ公 [I112] が〔謀議について〕知らないうちに逃走した。

【ガーリチ貴族による別のダニール殺害の謀議が未遂に終わる：1230年】

ヴァシリコ [I112] はヴラジミル [= ヴォルィンスキイ] へと出発した⁹⁾。他方、神を畏れぬフィリップ¹⁰⁾ (Филипъ) は、ダニール公 [I111] をヴィシニャ¹¹⁾ (Вишня) へと呼び出した。かれ〔ダニール〕を殺害する別の謀議が、かれ〔ダニール〕の兄弟の息子アレクサンドル¹²⁾ [I121] とともになされたのだった。

-
- 5) 「試合を装って」の原語 *играя* は、剣技の試合を装った一対一の斬り合いで相手を倒したということだろう [Генсьорський 1961: C. 57]。各国語訳は「ふざけて」「装って」と解釈しているが、戦士たちが行っていた模擬試合（トーナメント）のことを言っているのではないか [Пашуто 1950: C. 159, Прим. 7]。
- 6) 「王の従者」(слуга королев) についてロシア語訳 [БЛД Т. 5: ГВЛ: C. 498]、ウクライナ語訳 [Літопис руський, 1989: C. 387, Прим. 1] はこの「王」をダニール [I111] のこととしているが、本年代記の用語法から見て「ハンガリー王」を指していると考えるのが適当だろう。これまでの経緯から見て、このダニール暗殺の謀議にハンガリー人も関与していた可能性は高い。
- なお、ここで「従者」(слуга) が言及されているのは、この部分の描写の原型としている、『原初年代記』1015年記事のスヴァトボルクのボリスとグレーブ暗殺(下注8参照)のエピソードで、暗殺者が「悪魔の従者」(слуги бѣси) と呼ばれていること [ПСРЛ Т. 2, 1998: Стб. 121] と関連があるだろう。
- 7) 「モリボゴヴィチ一族」(Молибоговидьчи; *Хлб. Молибоговци*) は、反ダニール派のガーリチ貴族の一門。以下の記事(下注19, 113, 305)でも言及されている。
- 8) 「呪われたスヴァトボルク」(оканьны Святополкъ)[07] はウラジミル聖公 [06] の息子。1015年に聖公が没した後、スヴァトボルクは兄弟のボリス [14] とグレーブ [15] を殺害してキエフの公座に就くが、1019年に兄弟のヤロスラフ [13] に追放され、国外で没している。その兄弟殺しから「呪われた」(окаянный) という通称が付けられている。
- 9) ヴァシリコ [I112] のガーリチ滞在は一時的なもので、ダニール [I111] がガーリチの公座を回復したあと、ヴァシリコはヴラジミル・ヴォルィンスキイに拠点を置いていた。
- 10) 「フィリップ」(Филипъ) は親ハンガリー・反ダニール派のガーリチの貴族。1208年の記事にも反イーゴリー一族貴族としてその名が記されている ([イパーチイ年代記 (10):252頁, 注118] 参照)。当時はガーリチ地方の西の国境地帯ヴィシニャ(次注)に派遣されて滞在していたのだろう。
- 11) 「ヴィシニャ」(Вишня) はベレムィシェリに近く、ガーリチからだと北西へ123kmほど離れている。現在のウクライナ、リヴィウ州スドヴァ・ヴィシニャ(Судова Вишня)市に相当する。
- 12) 上注2を参照。この表現の繰り返しである。

かれ〔ダニール〕がブラネヴィチの浅瀬¹³⁾ (Браневичаве рьли) に入ったとき、かれ〔ダニール〕の〔ガーリチに残った〕千人長デミヤンから使者が遣わされてきて、かれ〔ダニール〕にこう言った。「これは悪しき宴席です。なぜなら、神を畏れぬあなたの貴族フィリップ **【763】** とあなたの兄弟の息子〔アレクサンドル [I121]〕が、あなたを殺害しようと謀議したものだからです。これを聞いたなら、後戻りして、自らの父の公座を保持しなさい」。

コンスタンチン¹⁴⁾ (Коснятин) がこれを告げると、かれ〔ダニール [I111]〕はドニエストル川を通過して〔ガーリチへと〕引き返した。他方、神を畏れぬ貴族たちは別の道をとって〔ガーリチへ戻った〕。かれ〔ダニール〕の顔を見たくなかったのである。

【ダニールはアレクサンドル討伐を決意し、ベルズへ向けてヴァシリコを派遣する。ヴァシリコはベルズを奪取する：1230 年末～1231 年前半¹⁵⁾】

〔ダニールは〕ガーリチへ到着すると、〔ヴラジミルの〕自分の弟のヴァシリコ [I112] へ使者を遣って〔言った〕。「そなたはアレクサンドル [I121] 討伐に行け」。アレクサンドル [I121] は〔城市ベルズを〕出てペレムィシェリ¹⁶⁾ の自分の共謀者たちのもとへ向かった。ヴァシリコ [I112] はベルズ (Белз) を奪取した¹⁷⁾。

【ヴァシリコは反ダニール派のガーリチ貴族を制裁するが処刑せず：1231 年】

さらに、かれ〔ヴァシリコ〕は自分の馬役イヴァン¹⁸⁾ を派遣して、不忠者のモリボゴヴィチ

13) 「ブラネヴィチの浅瀬」(Браневичаве рьли) は、ドニエストル川上流支流ピストツァ川 (Бистрица) 河岸の現在のドリシニイ・ルジョク (Долішній Лужок) 付近にあった渡河地点。ヴィシニャ (上注 11) からは南へ約 37km 離れている。なお、コトリヤールは、現在のプリンツイ = ザヒルニ村 (Бринці-Загірні) 周辺 (引用では Браниці 村) に同定しており [Котляр 2005: С. 225] その場合にはヴィシニャから東南東方向へ 65km も離れることになる。

14) 「コンスタンチン (コスニヤチン)」(Коснятин) は、デミヤンからダニール公のもとに派遣された使者の名前。ダニール公の側近の一人だったのだろう。

15) この年代決定は [Грушевский Хронология: С. 347] による。

16) ペレムィシェリはガーリチの地の西、ハンガリーとの国境に隣接しているため、当時はダニールの支配は及んでおらず、ハンガリー人もしくは親ハンガリー派貴族の拠点になっていたと思われる。

17) アレクサンドル [I121] の拠点城市であるベルズをヴァシリコ [I112] が支配下に置いたということ。このときブグ川上流域のチェルヴェン (Червен) も同時に奪取したと考えられる。

18) 「馬役イヴァン」(Иван...седельничий) の「馬役」は、公に仕え馬や馬具の世話をする側近従者のこと。「イヴァン」は、すぐあとにイヴァン・ミハルコヴィチ (Иван Михалкович) と父称で呼ばれていることから、ダニールに仕える地位の高い人物だったと思われる。

一族¹⁹⁾とヴォルドリス²⁰⁾(Вольдрис)を捕らえさせた。イヴァン・ミハルコヴィチ(Михалкович)によってかれらのうち28人が捕らえられた。かれらは〔刑罰として〕殺されることはなく、赦免を受けた。

【ダニールが反対派の貴族による名誉毀損を容赦したエピソード】

ある時、かれ〔ダニール〕が宴席で興じているとき、この神を恐れぬ貴族どもの一人が、杯の酒をかれ〔ダニール〕の顔に注ぎかけたことがあったが、かれ〔ダニール〕はこれに耐えた。いずれ、かれら〔貴族たち〕には神が報いを与えるであろう²¹⁾。

6739〔1231〕年

【ダニールはペレムィシェリへ遠征する。アレクサンドルはハンガリーのスティスラフのもとへ逃げる：1231年(9月)】

ダニール〔1111〕は自ら民会を召集した。〔かれのもとには〕18人の忠実な下級従士が、自分の〔配下の〕千人長デミヤンとともにいた。かれ〔ダニール〕は、かれら〔下級従士たち〕に言った。「そなたたちはわしに忠実であろうとするなら、わしの敵どもを討つべく出撃するがよい²²⁾」。かれらは喚声を上げた。「われらは神とわれらの主人たるあなたに忠実です。神の助けを得て出撃しましょう」。百人長ミクーラ(Микула)はこう言った。「主人よ、蜂を叩き殺さなければ、蜂蜜を食べることはできません²³⁾」。【764】かれ〔ダニール〕は神と至浄にして聖なる聖母、神の大

19) 「モリボゴヴィチ一族」については上注7を参照。

20) 「ヴォルドリス」(Вольдрис もしくは Вольдриса)は各国語訳、諸注・索引によればガーリチ貴族の名と解釈されている。なお、V・バシュートは「ヴォロドリサ」をボロホフの地にあったモリボゴヴィチ一族の所領を指すと解釈しており〔Пашут 1950: С. 144, 212〕、その場合、ヴァシリコはイヴァンをこの地に派遣したことになる。

21) 原文の да Богъ имъ возомъздить は、新約『ローマ人への手紙』12:19の句、「復讐するは我にあり、我これに報いん」(мне отмщение, аз воздам)を借用した表現。

22) この「わしの敵ども」(враги мое)はアレクサンドル〔1121〕を指し、かれのいるペレムィシェリへの遠征を呼びかけている。

23) この諺については、ポーランド史料(ヴィンツェンティ・カドウベクの年代記)が紹介している、ロマン・ムスチスラヴィチ〔111〕の敵手に対する容赦ない姿勢をあらわす、かれが好んだとされる俚諺「蜂の巣を調べるより潰すほうが、ハチミツを得るにより都合が良い」(melle securius uti apum non posse, nisi penitus oppresso, non rarefacto, examine)〔Щавелева 1990: С. 97, 112〕に酷似しており、出典が共通であることは疑いが無い。(〔Карамзин Т. 3, Прим. 106〕も参照)。

天使ミカエルに祈りを捧げると²⁴⁾、少数の戦士たちとともに勇んで出撃して行った。

ミロスラフ²⁵⁾ (Мирослав) は少数の下級従士とともに、かれ〔ダニール〕のところに援軍に駆けつけた。不忠者たち²⁶⁾ もみなかれ〔ダニール〕のもとに向かった。忠実であると思せかけたのである。〔ダニールは〕かれら〔不忠者たち〕と協議をせざるを得なかったが、かれらはかれ〔ダニール〕に対して悪意を持っていた。

ダニール [I111] はペレムィシェリに到来した。アレクサンドル [I121] は耐えきれず逃げ出した。この追走のなかでシェルフ²⁷⁾ (Шельвь) が槍傷を負った。かれは勇敢だったので、大いなる榮譽の中で死んだ。不忠のヴワディスワフ・ユーリエヴィチ²⁸⁾ (Володислав Юрьевич) はかれ〔アレクサンドル [I121]〕と協議をして〔示し合わせていたので〕、サノクまで、ハンガリーの門²⁹⁾ まで〔アレクサンドルを〕追いかけたただけだった。

アレクサンドル [I121] は逃走して、自分の財産をすべて〔ペレムィシェリに〕残したままハンガリーに到着した。かれ〔アレクサンドル〕はステイスラフのところに来て来た。ステイスラフはその時ハンガリーにいたのである³⁰⁾。

24) 聖人の加護を願って出陣の日を聖人の祝祭日にあわせるという当時の軍事儀礼 ([イパーチイ年代記 (5): 265 頁, 注 214] 参照) を考慮するなら、ペレムィシェリ遠征の出陣は、9 月 6 日の大天使ミハイルの奇蹟 (Чудо архистратига Михаила в Хонех) と 9 月 8 日の聖母生誕祭の記念日の頃に行われた可能性が高い [Літопис руський, 1989: С. 388, прим 1]。

25) ダニールの側近貴族ミロスラフ (Милослав) は、おそらくガーリチ近傍の城砦に拠点を持っており、このときはガーリチに援軍に駆けつけたということ。

26) 『ガーリチ・ヴォルィニ年代記』の用語法では「不忠者」(невѣрнии) は、反ダニール・親ハンガリー派のガーリチ貴族たちのことを指している。

27) このダニール公の家臣「シェルフ」(Шельвь) は後の 6757(1249) 年の記事にも公の部下として登場しており、ここで「大いなる名譽のなかで死んだ」のは不思議である。

28) この「ヴワディスワフ・ユーリエヴィチ」は 6737(1229) 年の記事 [Стб. 759] ([イパーチイ年代記 (10): 318 頁, 注 498] 参照) で側近貴族ミロスラフと並んで言及されているダニール派のガーリチ貴族のこと。「不忠」(нѣверный) と修飾されているのは、この時、アレクサンドル [I121] のハンガリーへの逃走を見逃したことによるのだろう。以下の記事でも、ダニール陣営の軍司令官として登場する。

29) 「ハンガリーの門」(Ворота Угорьскыя) はサノク (Санок) (現在のポーランドのサノク (Sanok) 市) 付近からカルパチア山脈を越えて、現在のスロヴァキア経由でハンガリーへ抜ける山越えの峠を指している。『イパーチイ年代記』1150 年の記事に「王〔ハンガリー王ゲーザ二世〕は山脈を越えて、サノクの城市を占領した」[イパーチイ年代記 (4): 346 頁] という記述があることから、サノク近くからカルパチア山脈の山越えのルートがあったことがわかる ([Котляр 2005: С. 226] も参照)。1211 年には、ハンガリー宮中伯ポートも、このルートを使ってペレムィシェリへ進攻した [イパーチイ年代記 (10): 252 頁, 注 120]。

30) ステイスラフは、1230 年にアンドラーシュ王子がガーリチをダニール公に引き渡してハンガリーに戻ったとき王子に同行している。この時から、ガーリチ奪回をハンガリーの王族に唆していた ([Стб. 760] 参照)

【ハンガリー王が遠征軍を組織して城市ヤロスラフを包囲。籠城側は守備隊長ダヴィドの弱気によって降伏する：1232年³¹⁾】

ステイスラフは仕事に取りかかり、アンドラーシュ王のもとにやって来ると、ハンガリー王アンドラーシュに「遠征するよう」促した。アンドラーシュ王は息子のベーラと、別の息子のアンドラーシュとともに「遠征して」、ヤロスラフ (Ярославъ)³²⁾ へ到来した。

貴族のダヴィド・ヴィシャティチ³³⁾ (Давыд Вышатичъ) はダニール公 [I111] から「派遣されてきたのだが」、かれはヤロスラフ (Ярославль) に籠城した。ヴァシーリイ・ガヴリロヴィチ³⁴⁾ (Василий Гавриловичъ) も「籠城した」。ハンガリー人たちはほとんど日没近くまで戦ったが、城市「ヤロスラフ」からの反撃で引き下がった。

夕方に「籠城軍は」協議を行った。「貴族」ダヴィドは動揺していた。なぜならかれ「ダヴィド」の姑が【765】ステイスラフに忠誠を示していたからである。かの女は養育係ネズディル (Нездил) の妻であり³⁵⁾、かれ「ダヴィド」はかの女のことを母親と呼んでいたくらいだったからである。「かの女は」かれ「ダヴィド」に「そなたはこの城市を守り切ることはできない」と言っていた。しかし、ヴァシーリイ「ガヴリロヴィチ」は、かれ「ダヴィド」に言った。「われらは自分たちの公「ダニール [I111]」の名誉を汚すまい。この「敵の」兵士たちはこの城市「ヤロスラフ」を奪い取ることはできない」。この家臣「ヴァシーリイ」は壮健で勇敢だった。しかし、ダヴィドはかれ「ヴァシーリイ」の「言葉を」聞き入れず、城市を引き渡そうと考えていた。

チャーク³⁶⁾ (Чак) がハンガリー人部隊からやって来て、こう言った。「かれら「包囲軍」はあなたたち「の城市」を奪い取ることはできない。なぜなら、「包囲軍は」ひどく撃ち殺され

31) このハンガリー王アンドラーシュ二世による大規模なガーリチ・ヴォルィニ地方への遠征とガーリチ奪取の年代については、1231年とする説もある ([Котляр 2005: С. 227] 参照)。その場合でも、直前のダニールのベレムィシェリ討伐遠征からかなりの時間が経っていることは確かである。

32) 「ヤロスラフ」(Ярославъ) はガーリチ公領サン川 (Сан) 左岸にある城市のことで、現在のポーランド、ヤロスラウ市 (Jaroslaw) に相当する。史料ではヤロスラヴリ (Ярославль) と表記されることもある。ガーリチ公ヤロスラフ・ウラジーミロヴィチ八智公 [A1211] (在位 1152-1187年) の手で建設され、その名が付された城市と考えられる。

33) 「ダヴィド・ヴィシャティチ」(Давыд Вышатичъ) はダニール陣営のガーリチ貴族。ダニールのベレムィシェリ遠征に従軍して、途上の城市ヤロスラフの守備を担っていたのだらう。なお、コトリアルはかれをステイスラフの陣営の貴族と考えている [Котляр 2005: С. 227]。

34) 「ヴァシーリイ・ガヴリロヴィチ」(Василий Гавриловичъ) は前注のダヴィドと同様にダニール陣営のガーリチ貴族。

35) 「ネズディル」(Нездил) については不詳だが、本文の文脈から判断して有力貴族ステイスラフの「養育係」(кормилец) だったと推定することができる。

36) 「チャーク」(Чак) はウクライナ語訳索引では「(城市) ヤロスラフの貴族でダニール側の戦士」としている。そこまで特定する根拠は不明だが、いずれにせよハンガリー軍の状況に通じていた人物でダニール陣営のために有力な情報をもたらした人物 (内通者、転向貴族?) である。

ているのだから」。ヴァシーリイ〔・ガヴリロヴィチ〕は城市〔ヤロスラフ〕を引き渡さないために頑強に戦ったが、かの者〔ダヴィド〕はその胸にひどい恐怖を感じて、自分自身は傷つくこともなく、自分の軍兵をすべて率いて〔城市を〕出て〔城市を引き渡した〕。

【ハンガリー王遠征軍は城市ヤロスラフを奪取し、ガーリチへ到達。ガーリチの貴族たちは王の陣営へと寝返る：1232 年】

こうして、〔ハンガリー〕王はヤロスラフ (Ярославль) を奪取すると、ガーリチへ向けて進軍を始めた。禿山³⁷⁾ (голые горы) のクリミヤタ³⁸⁾ (Климьята) は、ダニール公 [I111] の〔陣営〕から〔ハンガリー〕王のもとへと〔寝返って〕逃げ出した。かれ〔クリミヤタ〕にならって、すべてのガーリチの貴族たちが寝返った³⁹⁾。

【ハンガリー王遠征軍はガーリチからヴラジミルへ進軍する。ヴラジミルの守備隊長ミロ斯拉フは非勢を知って王と和を結び、ベルズとチェルヴェンをアレクサンドルに引き渡す：1232 年】

そこ〔ガーリチ〕から、〔ハンガリー〕王はヴラジミルへ向かって進軍した。かれ〔王〕がヴラジミルに到達すると、かれは驚いてこう言った。「このような城市はドイツの諸国においてもわしは見たことがない」。実際そのようだった。武装兵たちが城壁に立ち、盾と甲冑があたかも太陽のようにきらめいていたのである。

〔このとき〕ミロ斯拉フ (Мирослав) が城内にいた⁴⁰⁾。かれは勇敢なときもあるが、神のみぞ知る、このときは知性が曇っていたので、ダニール公 [I111] とその弟ヴァシリコ [I112] と協議せずに、〔ハンガリー〕王と和を結んでしまった。その約定によって **【766】**ベルズ (Белзь) とチェルヴェン (Червень) をアレクサンドル [I121] に引き渡した⁴¹⁾。

37) 「禿山」(голые горы) はガーリチ公領の城砦で、リヴィウから東南東へ 50km ほど行った、現在のリヴィウ州ホロホリ村 (Гологори) に相当する。ガーリチからだ北へ 70km ほどの距離にある。

38) 「クリミヤタ」(Климьята) はダニールによって「禿山」に拠点 (領地) を持っていた、もしくは代官として派遣されていたガーリチ貴族。

39) これまでのハンガリー王の遠征の記述に、ダニール [I111] についての言及がまったく無いことから見て、このときダニールは、おそらくキエフ方面へ援軍に出かけて、ガーリチ地方にはいなかったのだろう (下注 40 および [Котляр 2002: С. 211][Котляр 2005: С. 227] 参照)。そのため、ガーリチの貴族たちは、抵抗をあきらめてたちまちハンガリー王に降伏し、ガーリチ城を明け渡したということではないか。

40) この頃ヴラジミルはヴァシリコの拠点地だったが (上注 9 参照)、このときは側近の軍司令官ミロ斯拉フがヴラジミル城を守っており、ヴァシリコ [I112] は、おそらくダニール [I111] とともにキエフ方面へ援軍に出ているのではないかと (上注 39 参照)。

41) ベルズ及びチェルヴェンの城市は、従来からのアレクサンドル [I121] の拠点城市だったが、先にヴァシリコ [I112] が奪取した (上注 17 参照)。そのような経緯があったことから、ミロ斯拉フはヴァシリコの許可なくハンガリー陣営のアレクサンドルに返還したということか。

【ハンガリー王は王子アンドラーシュをガーリチの代官に据える：1232年】

〔ハンガリー〕王は、不忠なガーリチ人〔貴族〕たちと協議して、自分の息子アンドラーシュ（Андрѣи）をガーリチ〔の代官〕に据えた。

【ミロスラフはチェルヴェン引き渡しについて弁解する：1232年】

ミロスラフは、「チェルヴェンは約定によって引き渡しはしません」⁴²⁾と抗弁した。かれ〔ミロスラフ〕は二人の兄弟〔ダニール [I11] とヴァシリコ [I12]〕から、「なんのために和を結んだのか、そなたは多数の軍兵を擁していたのに」と叱責を受けたのだった。

【ダニール公の反撃とハンガリー王の遠征からの帰還：1232年】

〔ハンガリー〕王はヴラジミルに布陣していたとき、ダニール公はブージスク⁴³⁾（Бозк）近郊で掠奪を行い、多数の捕虜を捕獲した。王はハンガリーへ戻った。

【ダニールはキエフ公ウラジーミルの要請を受けてキエフに行き、ミハイルとの和解の仲介を行う：1232年頃】

〔キエフ公〕ウラジーミル [J22] はダニール [I11] に向けて使者を遣って、こう言った。「〔チェルニゴフ公〕ミハイル [G41] がわしを討つために遠征をしている⁴⁴⁾。兄弟よ、わしを助けてくれ⁴⁵⁾」。ダニール [I11] は〔キエフに〕やって来ると、ふたり〔ウラジーミル [J22] とミハイル

42) ミロスラフの言い分は、ベルズについては約定によってアレクサンドル [I21] に引き渡したが、チェルヴェンは約定によるものではなく、アレクサンドルが実力で占領したということだろう。

43) ここの地名はイパーチイ写本では「ボスク」（Бозк）すなわち「ブージスク」（Бужск）（〔イパーチイ年代記（10）：259頁、注170〕）だがフレープニコフ系写本では「ベルズ」（Белз）と異同があり、各国語訳も見解が分かれている。コトリヤールは後者の読みを採用しているが〔Котляр 2005: C.228〕、本稿では前者の読みを採った。

なお、このダニール [I11] の反撃は、次の記事にあるキエフ行きの所用を終えて、おそらくホルム又はヴラジミルへ戻ったあと、もしくは帰路に行われたと考えるのが妥当だろう。

44) チェルニゴフ公ミハイル・フセヴォロドヴィチ [G4] は1230年にノヴゴロドの公位を息子に譲ってチェルニゴフに戻り（〔НПЛ: C. 275〕参照）、1231年の始めにミハイルはヴラジミル＝スーズダリ公のヤロスラフ [K4] およびユーレイ [K3] と協定を結んでいる〔ПСРЛ Т. 1（Лаврениевская летопись）: Стб. 456〕。これによって態勢を整えたミハイルは、キエフの公位を狙って1232年頃にキエフ遠征を企てたのではないかと推定される（〔Котляр 2005: C. 227〕参照）。

なお、このダニールとヴァシリコのキエフへの援軍は、アレクサンドル [I21] のハンガリー亡命とハンガリー王のガーリチ＝ヴォルィニ地方への遠征の間（1232年の早い時期）に行われたと考えられ、王の遠征軍がガーリチ＝ヴォルィニ地方に攻め込んだときには、ダニールとヴァシリコはキエフにいて、この地方には不在だったと想定される。

45) キエフ公ウラジーミル [J22] がダニール [I11] にチェルニゴフ公ミハイル [G41] との和議の仲介役を依頼したのは、ダニールの姉妹が1211～1212年にミハイル [G41] に嫁しており〔Домбровский 2015: C. 307〕、ウラジーミル [J22] はこの二人の姻戚関係をあてにしたのではないか。

[G41] に和を結ばせた。

ダニール [I111] はルーシの地⁴⁶⁾から、自分のためにトルチェスク (Торцький) の部分⁴⁷⁾ を取り、自分の小さな義理の兄弟たち (шюрята) にあたるムスチスラフ [J51] の子供たちに与えた⁴⁸⁾。そして、かれらにこう言った。「そなたたちの父 [ムスチスラフ [J51]] の善行ゆえにトルチェスク (Торцький) の城市を受け取り、これを支配せよ」。

【ガーリチのアンドラーシュ王子がボロホフ地方へ遠征する。ダニールが派遣した先遣部隊とスルーチ川で合戦。ダニールがキエフからの遠征を準備すると、ハンガリー軍はガーリチへ帰還する：1232/1233 年冬】

これらの年のあとに、アンドラーシュ王子はダニール [I111] を討つべく軍を進めた。かれ〔王子〕はペロベレジエ⁴⁹⁾ (Белобережье) へ向けて進軍した⁵⁰⁾。キエフのダニール [I111] のもとから斥候部隊としてヴワディスワフ (Володислав)⁵¹⁾ が進軍し、ペロベレジエで〔ハンガリーの〕軍隊と遭遇した。〔両軍は〕スルーチ川 (Солучь) で戦った。〔ヴワディスワフは〕チェルトフ

46) ここでは「ルーシの地」(русская земля) はキエフ公 (ウラジーミル [J22]) の支配地を意味している。

47) トルチェスク (Торцький, Торческ) は、1228 年のムスチスラフ [J51] (次注参照) の死後は、キエフ公ウラジーミル [J22] の支配下に移されていたが、ダニールが和平交渉の仲介を成功させた報酬として、ウラジーミルよりダニールに与えられたと考えられる [Майоров 2001: С. 533]。

48) ここの「ムスチスラフの子供たち」が「自分の小さな義理の兄弟たち」(шюрята) であるとは、ダニールの妻アンナがムスチスラフ [J51] の娘であることからきている ([イパーチイ年代記 (10): 269 頁, 注 230] 参照)。この子供たちは、1228 年にムスチスラフが死去する際に「自分の家と子供たちをかれ〔ダニール〕の手に委ねると望んだ」([イパーチイ年代記 (10): 307 頁, 注 439]) とする「子供たち」に相当するが、二人以上の子供がいて、支配を委ねられた息子が少なくとも一人いたという推定ができるにとどまる [Домбровский 2015: С. 596]。

なお、この「子供たち」に与えられたトルチェスクは、ムスチスラフ [J51] の生前にはかれにとってルーシにおける拠点城市であり ([イパーチイ年代記 (10): 280 頁, 注 300; 303 頁, 注 416] 参照), その子供たちにとっては父の地 (отчина) にあっていたことになる。ここでは、ダニールはトルチェスクを本来の支配者に返すことで「正義」(правда) を行ったという書き方になっている。

49) 「ペロベレジエ」(Белобережье) は南ブグ川上流支流ブジク川 (Бужк) 流域の城市で、現在のベレフリ村 (Берегели) 近郊に相当する。当時のボロホフ地方 (Болоховская земля) とガーリチ地方の境界に位置していた。

50) マイオーロフはこのアンドラーシュ王子の軍事行動をキエフに向けられたもの、キエフにいたダニール [I111] とキエフ公ウラジーミル [J22] の同盟の討伐 (弱体化) を企図したものと考えており、その理由として挙げられた地名全てが歴史的にはゴルィニ川沿岸の「ポゴリニ地方」(Погорынь) と呼ばれたキエフに近い地域だったこと、当時の敵であるウラジミル [J22] とダニール [I111] がキエフにいたことを挙げている。また、軍事行動の動機については、① ダニールとキエフ公ウラジーミル [J22] の同盟が固まり、ガーリチの自律的な支配への脅威となったことへの対抗策、② チェルニゴフの同盟者 (ミハイル [G41] 等諸公) への支援のための二点を挙げている [Майоров 2001: С. 533-534]。

51) ハンガリー陣営に転向したガーリチ貴族ヴワディスワフ・ユーリエヴィチのこと。上注 28 を参照。

の森⁵²⁾ (Чертов лес) からデレヴノエ川⁵³⁾ (Деревное) まで〔ハンガリー人を〕追い込んだ。

キエフのウラジミール [J22] とダニール [I111] のもとに、ヴワディスワフから報告が届いた。ダニール公 [I111] はウラジミール [J22] にこう言った。「〔われらは〕知りました。兄弟よ、かれら〔ハンガリー人〕はわれら二人を討つべく進軍していることを。わたしを行かせて下さい。【767】かれらの背後へ進軍します」。この者たち〔王子に率いられたハンガリー人〕は、〔このことを〕知ってガーリチへ帰還した。

【シュームスク近郊の戦い。ダニールとヴァシリコはハンガリー軍とシュームスク近郊トルチェフで戦う。：1233年3月～4月2日】

ダニール [I111] は弟〔ヴァシリコ [I112]〕と会合して、シュームスク⁵⁴⁾ (Шумьск) まで〔敵を〕追い詰めると、二人はヴェリヤ川⁵⁵⁾ (Велья) 付近でかれら〔ハンガリー王子軍〕と〔和議の〕話をした。〔この時〕王子とともにいたのは、アレクサンドル [I121]、グレーブ・ゼレミエヴィチ⁵⁶⁾ (Глебь Зеремиевич) および他のボロホフの諸公⁵⁷⁾ (Болоховьщии князи) と多数のハンガリー人だった。

ダニール [I111] はヴェリヤ川 (Велья) 付近で王子と遭遇したとき、何か虚勢を張った言葉を

52) 「チェルトフの森」(Чертов лес) は、Чертолеса, Пулины とも言い、現在の Червоноармійськ あたりに相当する。テテフ川 (Тетерев) 上流域とスルチ川 (Случь) に挟まれた一帯の名称 ([イパーチイ年代記 (4) : 注 114] も参照)。

53) 「デレヴナ川」(Деревное) はスルチ川左岸支流で、現在のデレヴィチカ川 (Деревичка) に相当する。ボロホフ地方の西の境界を構成していた。

54) 「シュームスク」(Шумьск) は、ハンガリー勢の拠点になっていたヴェリヤ川河岸の城市で、現在のテルノポリ州シュームスク市 (Шумське) に相当する。

55) 「ヴェリヤ川」(Велья) は、ゴリニ川左岸支流で、現在のヴィリヤ川 (Вілія) に相当する。シュームスク付近を流れ、上流は南西のトルチェフ方面に遡る。

56) 「グレーブ・ゼレミエヴィチ」(Глебь Зеремиевич) は1214年の遠征の記事ではムスチスラフ [J51] 公配下の、1219年の記事ではダニール [I111] 配下の軍司令官として登場している ([イパーチイ年代記 (10) : 264頁, 注 200; 274頁, 注 266] 参照)。テキストの文脈から見てかれはボロホフ地方の公=支配者 (князь) (次注) の一人のようにも読めるが、マイオーロフの考えるように、ガーリチの住民を基盤としたガーリチ貴族としたほうが理解しやすい ([Майоров 2001: С. 534])。この時点ではダニールから離反してハンガリー陣営に加わり、ダニール軍に敵対していた。その後まもなく、ダニール陣営に復帰 (転向) する (下注 84 参照)。

57) 「ボロホフ」(Болохов) はスルチ (Случь) 川上流の城市で、スルチ川と南ブグ川上流の河岸地方はボロホフの地として、ガーリチ地方、ヴォルィニ地方とは独立した諸侯 (князи) による支配が行われていた。多くの研究者はスラブ系の首長 (貴族?) が支配者だったと考えており、民族的な支配形態が残存していた地方だったとも考えられる ([Котляр 2005: С. 260-261] 参照)。この князи はポロヴェツ人の首長などについて使われる場合と同じ用法として理解でき、マイオーロフは在地住民からなる南ブグ川上流域の城市共同体の首長で、エトノス的には混淆した (スラブ系とチュルク系など) 特有の集団だった (例えば「黒頭巾族」のような) 可能性を指摘している [Майоров 2001: С. 590-591]。

なお、この時には、ボロホフの諸侯たちは、ガーリチ地方での威勢を失ったダニールを見捨てて、ハンガリー陣営に加わったと考えられる (前注及び [Майоров 2001: С. 534-535] を参照)。

口にしたが、それは神の好むところではなかった⁵⁸⁾。翌日、〔ダニールは〕ヴェリヤ川を渡ってシュームスク討伐に向かい、神と聖シメオンに拝礼して⁵⁹⁾、自分の部隊を編成すると、トルチェフ⁶⁰⁾ (Торчев) へ向けて進軍した。

アンドラーシュ王子はこれを知ると、自分の部隊を編成して、かれ〔ダニール〕に対抗するため、すなわち斬り合いのために進軍した。

かれ〔王子〕は平地を進んだので、ダニール [I111] とヴァシリコ [I112] 〔の軍勢は〕高い丘から下り降りた。他の者たちは援護を行い、丘の上に残って、下降する〔部隊を〕援護していた。ダニール [I111] は言った。「聖書には『戦争については臆病者と相談するな』⁶¹⁾ とあるぞ」。こうして、かれら〔他の者たち〕を急ぎ立て、かれら〔敵勢〕に向けて急ぎ下降させた。

ヴァシリコ [I112] はハンガリー人に向かって進軍した。千人長のデミヤンと他の多くの部隊は左手を進軍した。ダニール [I111] は自分の部隊とともに中程を進軍した。かれ〔ダニール〕の部隊は多勢だった。輝く武器を手にした勇敢な家来たちからなっていた。かの者たち〔敵勢〕はこれを見て、**[768]** かれら〔ダニールの軍勢〕と戦うことを望まず、デミヤンと他の部隊を討つべく方向転換した。〔アンドラーシュ勢の〕破城槌兵や投石機兵⁶²⁾ がやって来たので、〔デミヤン配下の〕家来たちは耐えきれず、撃ち破られて、バラバラになった。

デミヤンがスディスラフ⁶³⁾ (Судислав) と戦っていたとき、ダニール公 [I111] はかれら〔スディスラフ勢〕の背後にまわった。かれらは槍で戦っていた。デミヤンは、これをすべて〔敵の〕

58) 具体的な記述はないが、ダニールがアンドラーシュ王子の軍とヴェリヤ川で最初に遭遇したときに、ダニールが自賛のような傲慢な言葉 (слово похвално) を口にしたために、神罰によって、そこでの戦いでは勝利を収めることができなかったと言っているのだろう。これは、のちに神と聖人に礼拝する(悔い改める) ことによって最終的には勝利を手にしたという物語の筋につながっている。

59) ウクライナ語訳の訳注では「聖シメオン」について、シュームスクにあった聖シメオン教会を指し、そこでダニールが拝礼したと解釈している。[Літопис руський, 1989: С. 389, Прим. 13]

60) 「トルチェフ」(Торчев) の同定について、ロシア語訳注は現在のヴォルィニ州トルチン(Торчин) 相当するとしているが、遠征と戦闘の推移から見ると離れすぎている。ウクライナ語訳は、イクヴァ(Иква) 川左岸、現在のポチャイフ市(Почаїв) 近郊(Новий Тараж 村近くの遺跡 Десять Валів) としており、こちらの可能性が高い。

61) 『シラ書(集会の書)』37:10-11の句「戦争については臆病者に相談するな」(не совещай <...> со страшливым о брани) をパラフレーズした引用。直接の典拠は当時読まれていた「アレクサンドロス大王伝」から採られたと考えられる(例えば [Летописец Еллинский и Римский. Т. 1, С. 122] 参照)

62) 「破城槌兵」(соколы) は、城壁を破壊する破城槌を操作する重装備の兵のこと。また、стрѣлцыは通常は「射手」「弓箭兵」を指すが、投石機(カタパルト、トレビュシユット) を操作する兵を指すこともある。この部分は重装備の兵ということから後者と解釈して「投石機兵」と訳した。ここでは攻城戦ではないが、攻城のための装備をしたアンドラーシュ陣営の強兵によって、ダニール軍の一部が壊滅したと言っているのだろう。

63) 親ハンガリー派の有力貴族スディスラフは、遠征ではアンドラーシュ王子に同行していたと考えられる。

戦士だと考えて、かれ〔ダニール〕を前にして逃げ出した。ダニール [I111] は自分の槍で一人の戦士を突き刺したが、槍が折れたので、自分の剣を抜いた。そしてあちらこちらを見回して、ヴァシリコ [I112] の軍旗が立っており、〔ヴァシリコが〕よく戦い、ハンガリー人を追い詰めているのを認めた。自分の剣を抜剣したまま、かれ〔ダニール〕は弟〔ヴァシリコ [I112]〕を救援に向かい、大勢を負傷させ、他の者たちはかれ〔ダニール〕の剣で殺された。

〔ダニールとヴァシリコは〕ミロスラフ (Мирослав) と合流し、ハンガリー人が集合しているのを認めると、二人はこれを討つべく進撃した。この者たち〔ハンガリー人たち〕は耐えきれずに撤退した。他の〔ハンガリー人たち〕がやって来て戦ったが、かれらも耐えきれなかった。かれら二人〔ダニールとヴァシリコ〕は追撃しながら、二手に分かれた。その後、〔ダニールは〕弟がよく戦っているのを認めた。かれ〔ヴァシリコ〕の投げ槍は血にまみれ、その柄は〔敵の〕剣の打撃によってゴツゴツになっていた。

6740 [1232] 年⁶⁴⁾

グレーブ・ゼレメエヴィチはハンガリー人を集めると、ヴァシリコ [I112] の軍旗へ向かって到来した。ダニール [I111] はかれら〔敵軍〕のところへやって来ると、**[769]**かれらを引き寄せた。〔ダニールは〕かれらの中に誰も戦士 (воиник) を認めず、そこにいたのはただ馬を曳く小姓〔下級従士〕だけだった。この者たちはかれ〔ダニール〕に気づくと、剣でかれの馬を斬り殺そうとした。憐れみ深い神はかれ〔ダニール〕を兵士たちの手から傷一つなく助け出した。ただ、剣の刃先でかれの馬の脚の毛が切り取られただけだった。〔ダニールは〕かれら〔自分の部隊〕のところへやって来て、自分の〔部隊を〕かれら〔敵軍〕を討つべく差し向けた。

ヴァシリコ [I112] の部隊はハンガリー人たちをその本陣まで追いかけ、王子の軍旗を斬り倒した。他の多くのハンガリー人は逃げ出して、やっとのことでガーリチにとどまっていた。

〔敵軍の〕ある者たちは丘の上に、他の者たちは低地に布陣していた。ダニール [I111] とヴァシリコ [I112] はかれらを集中して討つべく、これに向けて自分の家来たちを進撃させた。神は次のようにして罪に対して報いた。ダニール [I111] の従士たちは敗走に転じた。かれら〔ハンガリー人〕はこれを取えて追撃せず、ダニール [I111] の部隊には、5人が殺されたほかは、大きな損害はなかった。

翌日、ダニール [I111] は兵をまとめたところ、弟〔ヴァシリコ〕が誰とどこにいるのか、行方がわからなかった。王子はガーリチへ引き返した。なぜなら、かれの部隊の損傷がひどかつ

64) イバーチイ写本にのみ付されているこの年代は、前後のストーリーが繋がっていることから見ても不自然であり、ないほうがよい。後代に年代を付した編者の錯誤によるものではないか。

たからである。他のハンガリー人は逃げ出して、やっとのことでガーリチにとどまっていた⁶⁵⁾。

その日は、〔このように〕大きな決戦が行われた。ハンガリー人で戦死した者は多かったが、ダニール [I111] の貴族〔で戦死した者〕は少なかった。その〔戦死者〕の名は次の通りである。ラチスラフ・ユーリエヴィチ (Ратислав Юрьевич), モイシ (Моиси), ステパン (Степан) とその兄弟ユーリイ・ヤネヴィチ (Юрьи Яневичь)⁶⁶⁾。【770】

その後、ダニール [I111] は自分の弟〔ヴァシリコ〕が健在であることを知った。かれ〔ヴァシリコ〕は〔敵軍に〕対する戦闘の態勢を止めようとしてはいなかった。

このトルチェフの戦い⁶⁷⁾ (бой Торьвський) があったのは聖大土曜日⁶⁸⁾ のことだった。

【ベルズ公アレクサンドルはダニールおよびヴァシリコと和を結ぶ：1233年4月～5月】

その後、アレクサンドル [I121] は、ダニール [I111] とヴァシリコ [I112] の兄弟に使者を遣って〔こう言った〕。「わしは、そなたたち二人なしでいることは宜しくない」。二人〔ダニールとヴァシリコ〕はかれ〔アレクサンドル〕を親愛をもって受け入れた⁶⁹⁾。

【ダニール、ヴァシリコ、アレクサンドルはハンガリー人支配下の二つの城砦を襲撃する：1233年5月】

草が生える頃になった⁷⁰⁾。ダニール [I111] は弟〔ヴァシリコ [I112]〕 およびアレクサンドル [I121] とともに、プレスネスク⁷¹⁾ (Плѣньск) に進軍した。到来して〔プレスネスクを〕奪取し、

65) 「他のハンガリー人は逃げ出して、やっとのことでガーリチにとどまっていた」の一節は二段落前の文章の機械的な繰り返しである。記事編集の際の切り貼りのミスによるものだろう。

66) 戦死したダニール陣営の貴族たちについてはここが初出で、かれらの詳細は不明。

67) トルチェフの地名の同定が難しいこともあり (上注 60 参照)、歴史学ではこの戦闘は「シュームスク近郊の戦い」(Битва под Шумском) と呼ばれている。

68) 「聖大土曜日」(Великая Субота) とは、受難週間の第 6 日目の土曜日のことで、復活祭の前日に相当する。これが、1233 年の事件なら 4 月 2 日がその日に相当する [Грушевский Хронология: С. 347, 381]。

69) 直前のシュームスク郊外の戦いでダニール陣営の敵であったベルズ公アレクサンドル [I121] がすぐに和議を提案してダニール兄弟と同盟したのは、この戦いで、ガーリチ (アンドラーシュ王子) とヴォルィニ (ダニール兄弟) との力関係が後者に有利になったことから、ダニールと同盟したほうがベルズの支配にとって有利と、アレクサンドルが判断したことによるのだろう。

70) 5 月頃と推定される。ちなみに現代でもウクライナ語の 5 月を意味する語 травень は「草萌える」という語源的な意味がある。

71) 「プレスネスク」(Плѣньск) は西ブグ川源流に近い場所にあった城砦で、ガーリチからだ北北東に 90km ほど離れた、現在のリヴィウ州ビドギリツィ (Підгірці) 村から南に 2km ほどのプリスネスク遺跡 (Пріснеське городище) に相当する。ガーリチ地方とヴォルィニ地方の境界のガーリチ側にあり、ここにハンガリー陣営 (もしくは親ハンガリー派貴族) が戦略的な拠点として城砦を構えていたのだろう。

アルブゾヴィチ⁷²⁾ (Арбузовичи)〔一族〕の〔城砦も〕奪取した。多くの捕虜を捕獲して、ヴラジミルへと帰還した。

6741〔1233〕年

【アンドラーシュ王子とスディスラフはヴラジミルへダニール討伐遠征軍を派遣。ダニールはキエフに赴き援軍を要請：1233年夏】

〔アンドラーシュ〕王子とスディスラフ(Судислав)はダニール [I111] を討つためにディオニシイ⁷³⁾ (Дьяниш) を派遣した⁷⁴⁾。

ダニール [I111] はかれらに対抗するためにキエフへ行き、ポロヴェツ人⁷⁵⁾ とイジャスラフ [C43211]⁷⁶⁾ を〔味方に〕引き入れた。そして〔ダニールは〕イジャスラフ [C43211] と、神の御堂で〔十字架接吻儀礼による同盟の誓い〕を行った。ウラジーミル [J22] も〔誓いを行った〕。二人〔ダニールとイジャスラフ〕はディオニシイに対して進軍した。

【ダニールへの援軍に参加したノヴゴロド＝セヴェルスキイ公イジャスラフの裏切り：1233年夏】

〔ところが〕、イジャスラフ [C43211] は奸策を弄し、ダニールの支配地の掠奪を〔配下の兵に〕

72) この「アルブゾヴィチ」(Арбузовичи) (フレーブニコフ系写本 Яръбузовичи) について、ロシア語、ウクライナ語、英語の翻訳はプレスネスクの城砦の守備にあたった親ハンガリー派貴族(一族)の名称と解釈している。コトリヤールはこれを独立した城砦と考える説を紹介しており、現在のハルブージュウ村(Гарбузів)に同定している。その場合、プレスネスクから南東へ20kmほど離れた位置になる [Котляр 2005: С. 230]。

73) 「ディオニシイ」(Дьяниш) はハンガリー史料のペーラ四世の文書に言及されているハンガリーの軍司令官ディオニシオス(Dionisios)と同一人物と想定される [Котляр 2005: С. 227][Котляр 2002: С. 211, Прим. 3]。

74) デイオニシイは軍司令官として、ガーリチから、ダニールが当時拠点城市としていたヴラジミル方面へと派遣され、以下のようにその途上のベレミリでダニール勢と遭遇して戦闘になった。

75) この「ポロヴェツ人」は、以下の記述でわかるように、ロシ川一帯に居住していたコチャン(Котян) (下注79)を首長とする一族を指している。

76) この「イジャスラフ」(Изяслав)の同定については、[イパーチイ年代記(10):298頁,注393]を参照。本年代記の1238年の記事では「ノヴゴロドのイジャスラフ」とあることから(下注154)、ここではノヴゴロド＝セヴェルスキイの公イジャスラフ・ウラジーミロヴィチ [C43211]の説を採りたい。

その後の事態の推移を見ても、イジャスラフ [C43211]は、緊密なポロヴェツ人との同盟関係の中で行動している。イジャスラフ自身の母親がポロヴェツ人女性であったことから([イパーチイ年代記(8):注302,303]参照)、これにはイジャスラフとポロヴェツ人の姻戚関係による何らかの同盟が想定できるかもしれない。

命じ、ティホムリ (Тихомль) を攻略した⁷⁷⁾。そして〔イジャスラフは〕帰郷してしまった⁷⁸⁾。ウラジーミル [J22] はダニール [I111] とともに、またコチャン⁷⁹⁾ (Котян) も取り残されてしまった。

おお、これはホメロス (Омиръ) がこう書いているが如きである。「悪の奸策は発覚するまでは甘美である。これは発覚した悪である。この〔悪の中に〕歩み入る者は悪しき終わりを迎えるだろう。おお、これは悪より悪しき悪である！」

【ダニール勢とハンガリー勢がペレミリで戦う：1233年夏】

〔ダニールとウラジーミルは〕そこ〔ティホムリ〕からペレミリ⁸⁰⁾ (Перемиль) へと向かった。

アンドラーシュ王子とディオニシイ、そしてハンガリー人たちは〔ペレミリの城門の〕揚橋のたもとでウラジーミル [J22] およびダニール [I111] と戦った。〔ウラジーミルとダニール軍は〕かれら〔ハンガリー軍〕を撃退した。

ハンガリー人たちは【77I】ガーリチへ戻って行った。かれらは投石機で攻撃した。ウラジーミル [J22] とダニール [I111] はかれら〔ハンガリー人〕を追って進軍した。

ヴァシリコ [I112] とアレクサンドル [I121] は兄弟〔ダニール [I111]〕のもとにやって来て、ブジェスク (Бужьск) で会合した⁸¹⁾。

他方、ウラジーミル [J22] とコチャン (Котян)、イジャスラフ [C43211] は〔それぞれが〕帰郷した⁸²⁾。

77) このイジャスラフ [C43211] の裏切り (「奸策」(льсть)) の理由について、コトリヤールは、イジャスラフは、1211年にダニールがガーリチの公座に就いた直後にガーリチ貴族によって処刑されたイーゴリー族の出身者であり、ダニールに深い恨みを抱いていたことを挙げている [Котляр 2005: C.231]。

78) イジャスラフは支配地のノヴゴロド=セヴェルスキイへ引き上げたということ。

79) 「コチャン」は、イジャスラフ [C43211] と同盟した、沿ドニエプル一帯に展開していたポロヴェツ人の首長 ([イパーチイ年代記 (10): 237頁, 注34] 参照)。

80) 「ペレミリ」(Перемиль) はストイリ (Стырь) 川上流域の城市でヴォルィニ地方に位置していた。元来はダニールとヴァシリコ一族の支配地で、1228年にはアレクサンドル [I121] の兄弟ヤロスラフ [I122] に与えられていたが ([イパーチイ年代記 (10): 308頁, 注441)、この時点では、アンドラーシュ王子の襲撃にさらされていたため、防衛する必要があったのだろう)。

81) ヴァシリコ [I112] はヴラジミルから、アレクサンドル [I121] はベルズから、ハンガリー軍を追撃するダニール [I111] の援軍のために駆けつけ、ペレミリからガーリチへの追撃の途上にあたるブジェスク (Бужьск) で合流したということだろう。

82) イジャスラフ [C43211] の帰郷についてはすでに記されており (上注78) ここは重複になっている。ウラジーミル [J22] とコチャンは、ダニール [I111] とともにハンガリー軍の追撃に加わっていたが、援軍がきた (前注) ので、ウラジーミル [J22] はキエフへ、コチャンはドニエプル川流域へとそれぞれ帰郷したということだろう。

6742 [1234] 年

【ガーリチ貴族グレーブのダニール陣営への転向：1233年】

グレーブ・ゼレメエヴィチ⁸³⁾ (Гльб Зеремѣвичъ) が〔アンドラーシュ〕王子から離反してダニール [I111] [陣営へ] 転向した⁸⁴⁾。

【ダニールとヴァシリコ of ガーリチ遠征と城市包囲戦：1233年秋～冬】

ダニール [I111] とヴァシリコ [I112] は二人でガーリチへ進軍した。ガーリチの有力者の半分がかれらを出迎えた。すなわち、ドブロスラフ⁸⁵⁾ (Доброслав), グレーブ⁸⁶⁾ (Гльб) と他の多くの貴族たちである。〔ダニールはガーリチに〕到来すると、ドニエストル川河岸に布陣した。かれ〔ダニール〕はガーリチの地を手に入れると、その諸城市を〔味方の〕貴族たち、軍司令官たちに分け与えた。かれら〔貴族・軍司令官たち〕のもとには多くの糧秣があった⁸⁷⁾。

王子とディオニシイ⁸⁸⁾ とステスラフは城市の中で飢えて疲弊した⁸⁹⁾。〔ダニール軍は〕9週間のあいだ戦いながら〔包囲の〕布陣をした。〔ダニール軍は〕渡河してかれら〔籠城軍〕を攻められるようになるまで、〔川の〕氷結を待っていた。

【籠城側はベルズ公アレクサンドルの離反を画策、さらに、ガーリチ市民のダニール陣営への転向者を捕まえる：1233年冬】

ステスラフは奸策をもって〔ベルズ公〕アレクサンドル [I121] に使者を遣って、こう言った。「そなたにガーリチ〔城市〕を与える。兄弟〔ダニール〕から離反せよ」。かれ〔アレクサ

83) この「グレーブ・ゼレメエヴィチ」はガーリチの貴族で、1233年3月のシュームスク郊外の戦いの際にはダニールに敵対していたが、ダニール側に移ったということ（上注56参照）。

84) 事態の進展から見て、ガーリチ有力貴族がダニール側についたことが、次の記事にあるダニールとヴァシリコ of ガーリチ遠征の切っ掛けになったのだろう。

85) 「ドブロスラフ」(Доброслав) はガーリチの有力な貴族。1240年の記事で、ダニールに対抗するガーリチ貴族勢力の代表として登場する（下注116）。

86) この「グレーブ」は、先に言及されているグレーブ・ゼレメエヴィチ（上注83）のこと。

87) ここで、ダニールから城市(города)を与えられたガーリチ貴族・軍司令官たちのものに「糧秣」(корма)あったと記されているのは、食料が豊かな包囲軍と食料不足で飢えた籠城軍という構図を強調するためであり、ガーリチ包囲戦のために十分な準備が整えられていたことを示している。

88) 「ディオニシイ」については上注73を参照。

89) ハンガリー史料の1233年末の項の情報に依拠したフルシェフスキーによれば、ハンガリー王アンドラーシュ二世は包囲された息子アンドラーシュを助けるために、1233年8月にハンガリーを出発した。しかし、本年代記に王の到来について言及がないことから、何かの理由で引き返さざるを得なかったようである（[Perfecky 1973, p.136, n. 69] 参照）。

ンドル] は離反した。

ガーリチ人は〔城市を出て〕ダニール [I111] のもとに〔転向して〕行こうとするガーリチ人を捕まえようとした。

【アンドラーシュ王子の死とガーリチ人の招聘によるダニールのガーリチ公座復位 (第4次) : 1233/1234 年冬】

やや時を経て, [アンドラーシュ] 王子が死んだ⁹⁰⁾。

ガーリチ人はセミョンコ・チェルムニイ⁹¹⁾ (Чермьный Семьонко) を派遣してダニールを招聘した。ステイスラフは〔ガーリチを出て〕ハンガリー人のもとへ行った⁹²⁾。

【ダニールはキエフへ逃れようとしたアレクサンドルをポロニイで捕虜とする : 1234 年春】

春になった。アレクサンドル [I121] は自分がなした悪しきこと⁹³⁾ を恐れて, 自分の義父⁹⁴⁾ [ウラジーミル [J22]] のもと, キエフへに向けて出発した。ダニール [I111] はこれを知って, かれ [アレクサンドル] を討つべくガーリチを出陣し, かれを **【772】** ポロニイ⁹⁵⁾ (Полоний) まで追い

90) アンドラーシュ王子の死の時期やその状況について言及している史料は, この個所の他にはない。前後の文脈から判断して, ダニール軍によるガーリチ包囲で長期間籠城を強いられた (「飢えと疲弊」) ことが死の原因だったという推定は成り立つ。死の時期は 1233/1234 年冬の頃だろう。

91) 「セミョンコ・チェルムニイ」(Чермьный Семьонко) はガーリチの有力貴族の一人。「セミョン」(Семьон) であるべきところが卑称で呼ばれ, 「チェルムニイ」すなわち「赤毛」というあだ名がついていることから見て年代記記者の評価は高くない。かれはすでに, 6734(1226 年) の記事で「欺瞞の徒セミョン」([イパーチイ年代記 (10) : 299 頁, 注 396]) と呼ばれて, ハンガリー王と内通した人物として登場している。ここでは, 情勢の変化にともなって, ガーリチを代表してダニール招聘の使者となっていることから, ガーリチ城市の行政について指導力を持っていた人物なのだろう。

92) 親ハンガリー派の指導者だったガーリチ貴族ステイスラフのガーリチからの退去は, アンドラーシュ王子の死とダニールに対するガーリチ公座招聘の動きを受けて, 自らのガーリチでの権力基盤を失ったことからきている。これによって, ガーリチの親ハンガリー派貴族たちは勢力を失ったと考えられる。以下の事態の推移が示すように, ガーリチではこれを補うようにして, 親チェルニゴフ派 (親イーゴリ [C432] 一族派) の貴族たちの勢力が台頭するようになる。

93) 「自分がなした悪しきこと」(злое свое створение) とは, 先の 1233 年秋～冬のダニールによるガーリチ包囲戦の最中に, アレクサンドル [I121] がダニールから離反して, ハンガリー陣営に味方したことを指している [Стб. 771]。

94) 「自分の義父」(тѣст свой) とは, 当時キエフ公だったウラジーミル・リュウリコヴィチ [J22] のこと。この記事によって, アレクサンドル [I121] はウラジーミルの娘と結婚していたことが分かるが, ドムブロフスキイはその結婚を 1231 年 4 月過ぎのことと推定している [Домбровский 2015: С. 572-573]

95) 「ポロニイ」(Полоний) は, ホモラ川 (Хомора) (次注) 下流域右岸の城市で, キエフ公領とヴォルィニ公領の境界に位置している。現在のフメリヌィーツィクィイ州の中心都市ポロンネ (Полонне) に相当する。ダニール [I111] はアレクサンドル [I121] がキエフ地方へ入る直前のところでこれを捕虜としたのである。

かけて、ホモラ川の河原⁹⁶⁾ (луг Хоморьский) で捕獲した。ダニール [I111] は三日三晩睡眠を取らなかった。かれの軍兵たちも同様だった⁹⁷⁾。

【キエフ公ウラジーミルは息子ロスチスラフを使者としてガーリチのダニールのもとに派遣して同盟を結ぶ：1234年春】

ウラジーミル [J22] がキエフに〔支配公として〕いたとき、かれは自分の息子ロスチスラフ⁹⁸⁾ [J221] をガーリチへ派遣した。〔ウラジーミル [J22]〕はかれ〔ダニール [I111]〕と兄弟としての同盟 (братство) および大いなる親愛を結んだ。

【チェルニゴフ勢ミハイルとイジャスラフはキエフを狙って遠征をはじめ、ダニールはキエフ公ウラジーミルの要請によって援軍としてキエフへ進軍する：1234年末】

しかし、ミハイル [G41] とイジャスラフ [C43211] は、かれ〔ウラジーミル [J22]〕への敵対を止めなかった。〔ダニールは〕かれ〔ウラジーミル [J22]〕のもとにグレーブ・ゼレメエヴィチとミロスラフと他の多くの貴族たちを残した。ウラジーミル [J22] は〔使者を通じて〕「兄弟よ、わしを助けてくれ」と言った。ダニール [I111] は、〔ウラジーミル [J22] との〕大いなる親愛によってすぐさま部隊を集めて進軍した。

【チェルニゴフ公ミハイルはキエフ遠征をあきらめ、ダニールの援軍はキエフに到着：1234年末】

ミハイル [G41] は耐えきれずに、キエフから〔チェルニゴフへ〕撤退した。ダニール [I111] はウラジーミル [J22] のもとに〔キエフへ〕やって来た。

【ダニールとウラジーミルはそのままチェルニゴフへ向け遠征し、周辺城市の掠奪を行う。ムスチスラフと和を結んでキエフへ戻る：1235年1月～5月】

そして二人〔ダニールとウラジーミル〕はチェルニゴフへ進軍した⁹⁹⁾。ムスチスラフ・グレー

96) 「ホモラの河原」(луг Хоморьский) のホモラ川 (река Хомора) はスルーチ川 (Случ) の左岸支流で、ヴォルィニ公領の側を流れている。

97) ガーリチからポロニイまで直線距離で北東方向へ 230km も離れており、実際にはそれ以上の距離を行軍したはずである。当時の行軍の一日行程を約 65km とすると ([イパーチイ年代記 (3): 注 212] 参照)、通常の三日行程 (「三日三晩」) は 200km ほどだから、このダニールの追討遠征はかなりの急行の行軍だったことがわかる。

98) ロスチスラフ・ウラジーミロヴィチ [J221] については本年代記ではここが初出。年少の息子と考えられ、父親のキエフ公ウラジーミル [J22] と行動をともにしていた。

99) 『ノヴゴロド第一年代記 (新輯)』の 6743(1235) 年の記事に「ウラジーミル・リューリコヴィチ [J22] 公はキエフ人とともに、ダニール・ロマノヴィチ [I111] はガーリチ人とともに、ミハイル・フセヴォロドヴィチ赤毛公 [G41] を討つべくチェルニゴフへ進軍を始めた」[НПД: С. 284] と内容的に対応する記事がある。

ボヴィチ¹⁰⁰⁾ [G31] がかれら二人 [ダニールとウラジーミル] のところに [援軍として] やって来た。そこからかれらは [チェルニゴフの] 地を掠奪するために進軍し、デスナ川流域の多くの城市を掠奪した。そこで掠奪したのはホロボル (Хоробор), ソスニツァ (Сосница), スノフスク (Сновеск) と他の多くの城市¹⁰¹⁾ だった。かれらは再びチェルニゴフ [の城市] へ到来した。

そして、ムスチスラフ¹⁰²⁾ [G31] [ミハイル [G41]] とチェルニゴフ人は、ウラジーミル [J22] およびダニール [I111] と和を結んだ。

チェルニゴフでは激しい戦闘が行われた。投石機¹⁰³⁾ (таран) が据えられ、矢の 1.5 倍もの射程

100) ムスチスラフ・グレーボヴィチ公 [G31] は、当時はチェルニゴフ地方のどこから分領城市にいたのだろう。ヴォイトヴィチは、1212 年 ~ 1239 年の期間、ノヴゴロド = セヴェルスキイの公座に就いていたと推定している [Войтович 2006: С.409]。このムスチスラフは、ミハイル [G41] が支配するチェルニゴフの公座を狙って、ウラジーミル [J22] = ダニール [I111] の陣営に加勢したのである。ムスチスラフにとってそれは成功し、実際かれはこの遠征後の 1235 年から 1239 年までの間チェルニゴフの公座に就くことになる。

101) 「ホロボル」 (Хоробор), 「ソスニツァ」 (Сосница), 「スノフスク」 (Сновеск) はいずれもチェルニゴフの東側、セイム川 (Сейм) 沿いの城市で、チェルニゴフの附属城市 (пригороды) だった。これらの城市はチェルニゴフから東 (北東) へ離れていく順番で並べられており、チェルニゴフ討伐遠征軍が東から攻略した順番になっていると考えられる [Майоров 2009: С.318]。「他の多くの城市」 (иные грады многии) もセイム川流域の諸城市と考えられる。

なお、マイオーロフは、フェネルやディムニク等の説に従って、このチェルニゴフ攻めや攻略した城市の描写は、実際には 1239 年のバトゥによるチェルニゴフ攻略についての資料をここに転用したものだとして主張している ([Майоров 2009: С. 318-321][Котляр 2005: С. 235] を参照)。

102) この「ムスチスラフ」は「チェルニゴフ人」と並記されていることから見て、また以下に述べる解釈に拠って、当時チェルニゴフ公だった「ミハイル」(G41) の誤記の可能性が高い。

総じて、チェルニゴフ近郊での戦いについては、フルシエフスキイが本年代記の設定を信用しているのに対し、現代の研究者たちは、本年代記のこの戦いに関する情報は偏向的であると見なしている。例えば、本年代記では、ウラジーミル [J22] とダニール [I111] は、チェルニゴフ公のミハイル・フセヴォロドヴィチ [G41] と戦っているはずにもかかわらず、ムスチスラフ・グレボヴィチ [G31] と和を結んだり、またミハイル公が話から消えてしまっていることも不可解である。

そのため新しい解釈では、ウラジーミル [J22] とダニール [I111] は途中までチェルニゴフ地方の攻略を首尾良く進めていたが、追い込まれたミハイル [G41] は和を求めた。ウラジーミル [J22] はこの話に乗らなかったものの、ダニールはミハイルと和を結ぼうとして攻撃をやめた。そこでミハイル [G41] は安心しきったダニール軍を夜襲し、無数のガーリチ人を殺害し、ダニールは命からがらに逃げた。結局チェルニゴフの城市は陥落せず、ミハイル [G41] は依然としてチェルニゴフ公のままであったとする。

こうした解釈は本年代記の記事と時系列的には一致しており、『ノヴゴロド第一年代記』の記述に比べて叙述が欠落しているだけである。そしてこの「欠落」は、ダニール公の敗北や誤謬を隠そうとする年代記記者の意図に由来しているとしている。

103) 「投石機」(таран) は攻城兵器を意味するポーランド語 taran 中世ドイツ語 tarant と共通の言葉で、破城槌や投石機などを指した。文脈からみて、ここでは投石機 (カタパルトもしくはトレビュジェット) のことだろう。「矢の 1.5 倍もの射程」(полтора перестрѣла) とは、矢の届く射程を約 70m とすると [Романова 2017: С. 190-191 (ПЕРЕСТРЕЛ)] 約 100m に相当する。4 人の男がようやく持ち上げられる石 (150 ~ 200kg) をこれだけの距離飛ばすのは固定式の相当大規模な装備が必要であり、騎馬を主体としたルーシ諸公の遠征にはそぐわない。いかにも大袈裟な表現である (次注 104 参照)。

の投石がなされた。その石は4人の頑健な男がようやく持ち上げられるような重さだった¹⁰⁴⁾。

こうして、和を結ぶと、かれら〔ウラジーミル [J22] とダニール [I111]〕はキエフへと戻った。

【ノヴゴロド＝セヴェルスキイ公イジャスラフはポロヴェツ人をキエフに差し向ける：1235年6月以降】

イジャスラフ [C43211] はひとり〔敵対を〕止めようとせず、キエフへ向けてポロヴェツ人¹⁰⁵⁾を差し向けた。

【ダニールのチェルニゴフ地方掠奪とキエフへの帰還についての再度の叙述：1235年1月～5月】

【773】ダニール [I111] とかれの軍兵は疲弊していた。なぜならば、かれ〔ダニール〕はすべてのチェルニゴフの地方を略取して捕虜を獲り、主の洗礼祭から主の昇天祭まで¹⁰⁶⁾のあいだ掠奪を行ったからだった。〔ウラジーミルとダニールは〕和を結ぶとキエフへと戻った¹⁰⁷⁾。

【ポロヴェツ人のキエフ地方での掠奪。ダニールはキエフからガーリチへの帰郷を望むが、キエフ公ウラジーミルと貴族ミロスラフに引き留められる：1235年6月頃】

ポロヴェツ人はキエフに到来し、ルーシの地を略取した¹⁰⁸⁾。

104) この段落の戦闘の描写は「和を結んだ」としたあとに置かれており論理的に整合しない。実は、『ノヴゴロド第四年代記』（『ソフィア第一年代記』）の6747(1239)年のバトゥによるチェルニゴフ攻撃の記事の中にはほぼ文字通り同じ文言がある〔ПСРЛ Т. 4, Ч. 1, 2000: С. 222-223〕。マイオーロフ等の研究者は、『ノヴゴロド第四年代記』の中により古い読みが残されており、本年代記の読みは古い読みの資料をこの個所に再配置したものと考えている〔Майоров 2009: С.321-322〕。そのように理解すれば、確かに、上述の不整合や、「投石機（カタパルト）」(таран)のような大袈裟な戦備（前注103参照）がここに出てくる理由を説明できる。

105) このポロヴェツ人はイジャスラフ [C43211] と同盟していたコチャンを首長とするロシ川一帯の部族を指しているだろう（上注75, 79を参照）

106) 「主の洗礼祭から主の昇天祭まで」(от Крещения до Вознесения) は、これが1235年であるとダニールが掠奪した期間は、1月6日から5月17日（復活祭から40日目の木曜日に相当する）まで（132日）になる。

107) この「和議」は、直前にある、ウラジーミルとダニールが、ミハイル [G41]（本文ではムスチスラフ [G31]）とチェルニゴフ人と結んだ和議のことを指している。「和を結んだ」「キエフに戻った」という表現も繰り返し書かれており、編集上の混乱によって、同じ事態が重複して叙述されたと考えられる。

108) 『ノヴゴロド第一年代記（新輯）』の6743(1235)年の記事は、このポロヴェツ人のキエフ地方攻撃の状況をより具体的に記している。すなわち、ウラジーミル [J22] とダニール [I111] のチェルニゴフ地方進攻のとき「イジャスラフ [C43211] はポロヴェツ人のもと〔ロシ川地方〕に逃げ出し、その後「イジャスラフ [C43211] は異教のポロヴェツとともに大軍をもって〔キエフに〕到来し、ミハイル [G41] はチェルニゴフ人とともにキエフ城下に〔到来して〕、キエフを占領した」〔НПЛ: С. 284〕とある。（〔Котляр 2015: С. 235〕も参照）

ダニール [I111] は疲弊消耗していたので、ダニール [I111] は〔キエフを〕出て、森林地帯を抜けて〔ガーリチへ〕帰郷しようとした。ウラジーミル [J22] が〔キエフに留まるよう〕懇請したにもかかわらず。また、ミロ斯拉フはかれ〔ダニール〕に次のように忠言した。「われらは〔キエフを〕出て、異教のポロヴェツ人を討とうではありませんか」。

【ポロヴェツ人はキエフ郊外に迫り、ダニールはキエフからの出撃を主張する：1235 年 6 月頃】

ポロヴェツ人は、かれらをズヴェニゴロド¹⁰⁹⁾ (Звѣнигород) 近郊で迎え撃とうとした。

ウラジーミル [J22] は〔キエフ城市へ〕撤退しようとし、ミロ斯拉フも撤退を進言した。ダニール [I111] はこう言った。「戦闘に向かう戦士はこうすべきではないのか。すなわち、勝利を手にするか、さもなくば戦場で斃れるか。わしは〔これまで戦いを〕押しとどめてきた。今となって分かった。そなたたちが臆病者だったことを¹¹⁰⁾。わしはそなたたちに言ったではないか。『損傷のない軍兵に対して、疲弊した軍兵を差し向けてはならない』と。いまそなたたちは何を迷っているのか。かれら〔敵手〕に対抗するために〔キエフの城市から〕出陣せよ」。

【ダニール勢とポロヴェツ人とのトルチェスク近郊の戦い。ダニールは敗走してガーリチへ向かい、ウラジーミル公とミロ斯拉フなどガーリチ貴族たちが捕虜になる：1235 年 6 月頃】

多くのポロヴェツ人の軍勢がトルチェスク付近で迎え撃った。激しい斬り合いだった。ダニール [I111] はポロヴェツ人を追撃したが、かれの栗毛の馬が矢を受けて傷ついた。それまでは、他のポロヴェツ人たちが敗走しようとしていた。ダニール [I111] は疾走していた馬が矢傷を受けたのを知って、敗走に転じた。【774】

〔キエフ公〕ウラジーミル [J22] はトルチェスクで捕獲され¹¹¹⁾、ミロ斯拉フも同様に、神を

109) この「ズヴェニゴロド」(Звѣнигород) はガーリチ地方の城市ではなく、キエフの丘から約 16km 南西に位置する小さな城砦で、『原初年代記』1097 年の記事のイパーチイ写本系統にのみある地名で「夜になって、キエフからおよそ 10 露里の小さな城市ズヴェニゴロドへかれ (ヴァシリコ [A13]) を連れて行った」とされる城砦と同一と考えられる。

110) 上注 61 で引用されている『シラ書』の句がここで参照されている。

111) ウラジーミル [J22] が捕虜になったことについて、『ノヴゴロド第一年代記 (新輯)』の 6743(1235) 年の記事は「ポロヴェツ人は、ウラジーミル [J22] とその公妃は捕らえ、自分の地へ連行し、また、多くの悪をキエフ人に対してなした。ミハイル [G41] はガーリチ〔の公座に〕就き、イジャ斯拉フ [C43211] はキエフ〔の公座に就いた〕。ポロヴェツ人は身代金を受け取って、ウラジーミル [J22] とかれの妻を解放した。諸公は身代金〔にすための金〕をドイツ人から取り立てたのである。」[HPLI: C. 284-285] と記している。

畏れぬグリゴリー・ヴァシーリエヴィチ¹¹²⁾ (Григорь Василевич) とモリボゴヴィチ一族¹¹³⁾ (Молибоговичи) の者たちの奸策によって〔捕獲された〕。他の多くの〔ガーリチの〕貴族たちも捕獲された。

【ダニールはガーリチへ帰還する：1235年夏～秋】

ダニール [I111] がガーリチ〔城市〕へ逃げ込んだとき、ヴァシリコ [I112] はガーリチ〔城内〕に部隊とともにいた¹¹⁴⁾。かれ〔ヴァシリコ〕は自分の兄〔ダニール [I111]〕を迎えた。

【ガーリチ貴族たちの反乱。ダニールはハンガリーへ行く：1235年秋】

メジボジエのボリス¹¹⁵⁾ (Борис же Межибожський) は、ドブロスラフ (Доброслав) とズブイスラフ¹¹⁶⁾ (Збыслав) と謀議して、ダニール [I111] へ使者を遣って言った「イジャスラフ [C43211] とポロヴェツ人はヴラジミルへ向けて進軍しています」。これは奸計だった。ダニールは自分の弟〔ヴラジミルのヴァシリコ [I112]〕に使者を遣って「ヴラジミルを守れ」〔と命じた〕。ガーリチの貴族たちは、ヴァシリコが部隊を連れて¹¹⁷⁾ 退去していくのを見て、反乱を起こした。

112) 「グリゴリー・ヴァシーリエヴィチ」(Григорь Василевич) はここが初出だが、ポロヴェツ人と同盟した反ダニール派のガーリチ貴族だろう。コトリヤールは、この人物を、アンドラーシ王子が没し、ステイスラフがハンガリーへ去った後の、ガーリチにおける反ダニール派の筆頭貴族と考えている [Котляр 2015: С. 235-236]。

113) モリボゴヴィチ一族は反ダニール派の貴族で、このときはイジャスラフ [C43211]、もしくはミハイル [G41] と同盟していたのだろう。上注 7, 19 も参照。

114) 1234 年末にダニール [I111] がキエフ公ウラジーミル [J22] との同盟 (「親愛」) ゆえにキエフに援軍に向かい、ガーリチを留守にしている間、ガーリチの貴族たちの謀反を押さえるために、弟のヴァシリコが自分の軍勢 (「部隊」) を連れてヴラジミルからガーリチにやって来て、滞在していたということ。

115) 「メジボジエ」(Межибожье) は、南ブグ川上流左岸ブジョク川 (Бужок) 河口に位置し、ポロホフの地の中心的な城市。現在のメジビジ (Меджибіж) 市に相当する。キエフ、ヴォルィニ、ガーリチそれぞれの公領の境界にあっていた。「ボリス」(Борис) はこのポロホフの地を支配する公 (「ポロホフの諸公」(Болоховские князи), 上注 57 参照) の一人と考えられる。

116) 「ドブロスラフ」(Доброслав) はガーリチの有力な貴族 (上注 85 参照)。「ズブイスラフ」(Збыслав) もガーリチの貴族で 1213 年には反ハンガリー派の貴族たちとガーリチに逃げている ([イパーチ年代記 (10): 260 頁, 注 172] 参照)。この二人は当時、ガーリチからポロホフ地方に派遣されており、親ミハイル [G41] = 反ダニール [I111] の謀議に荷担したのだろう。

117) 原文はイパーチ写本ともフレーブニコフ系写本とも с полономъ (捕虜を連れて) となっているが、ロシア語、ウクライナ語訳は「部隊を連れて」(с полкомъ) と読み替えて訳している (英訳は「略奪品をもって」(with spoils) と解釈)。確かに、直前の記事にヴァシリコは「ガーリチに部隊とともにあった」(бывшу в Галичи с полкомъ) との文言があり、この部隊がいなくなってダニールの軍事力が手薄になったことが以下のガーリチ貴族たちの反乱の引き金の一つになったと考えられることから、「部隊」(полк) を引き連れてヴラジミルへ戻ったとの解釈は妥当だろう。

スディスラフ・イリイチ¹¹⁸⁾ (Судислав Ильючь) は〔ダニールに対して〕言った。「公よ、ガーリチ人¹¹⁹⁾ は奸計を弄しているのです。自分を滅ぼしてはなりません。ここから立ち去りなさい」。ダニール [P111] はかれら〔ガーリチ貴族たちの〕反乱を知ると、〔ガーリチを出て〕ハンガリー人のもとへと行った¹²⁰⁾。

【ヴァシリコはポーランド人を率いてガーリチ周辺に掠奪遠征を行う：1235/1236 年冬】

冬が到来し、ヴァシリコ [P112] はポーランド人を引き連れて、ガーリチへ到来した¹²¹⁾。その頃、ダニールはハンガリーから〔ヴラジミルの〕自分の弟のもとへやって来た。かれら〔ヴァシリ

118) 「スディスラフ・イリイチ」(Судислав Ильючь) はここが初出だが、ガーリチ貴族であることは確かである。年代記記述の文脈では、ダニールに対する善意でガーリチ退去を勧めたととれるが ([Майоров 2001: С. 571-572][Літопис руський, 1989: С. 518]), コトリヤールは、すでに前からミハイル [G41] 招聘を決めていたガーリチ貴族たちの陰謀 (「奸計」(льсть)) の一環とであると解釈している [Котляр 2005: С. 236]。

119) この「ガーリチ人」(галичань) の概念について、マイオーロフは、平民を含めた共同体の相当数の構成員を意味するとして、多数の市民の陰謀であったことがガーリチ退去の理由としている ([Майоров 2001: С. 572] 参照)。しかし、本年代記には「ガーリチ人」がもっぱら貴族を指す用例も多くあり、この解釈は疑問である。

120) このダニールのハンガリー行きは、ハンガリーにおける国王交替にも関わっている。すなわち、ハンガリーでは 1235 年 9 月 21 日に国王アンドラーシュ二世が没し、息子のベーラ四世が即位した。ダニールはその即位式への出席を機にガーリチを逃れたのである。ハンガリー史料 (『ハンガリー年代記集成』) によればダニールはベーラ王の即位式 (1235 年 10 月 14 日) に出席し、「白い城市〔セーケシュフェヘルヴァル〕でベーラ王が献堂した福者ベトロ聖堂で戴冠式がなされ (...) ルーシの公ダニール [P111] は大いなる榮譽をもって馬の前で〔手綱を〕引いた」(rex Bela (...) coronatus est in cathedrali ecclesia beati Petri, Albae, quam ipse consecrari fecit, (...) Daniela vero, duce Ruthenorum, equum eius, ante ipsum, summa cum reuerentia ducente)[Дашкевич 1873: С. 48] としている。ダニールは、戴冠式でハンガリー王の「臣下」の役割を引き受ける (手綱を引く) ことと引き換えに、ガーリチ公座奪回に向けて王の援助を受けることを狙ったが、結果的にはその意図は適えられなかった [Древняя Русь-Хрестоматия Т. 4: С. 373, Прим. 139]。

なお、『ノヴゴロド第一年代記 (新輯)』6743(1235) 年の記事に「ミハイル [G41] はガーリチ〔の公座に〕就いた」[НПЛ: С. 284] とあるが、これは、ダニールがガーリチを去ったあとのガーリチの公座の交替 (1235 年 9 月以降) を指しているのだろう。

121) このガーリチへの進軍は、ダニールがガーリチ退去するとすぐにミハイル [G41] がガーリチの公座に就いた ([НПЛ: С.284], 上注 111 参照) ことにかかわっている。すなわち、ヴァシリコ [P112] は、ダニールがハンガリーから戻ったことを切っ掛けに、兄とともに遠征してガーリチの公座回復を試みたが、ミハイルが支配しているガーリチ城市周辺地の掠奪はしたものの、城市そのものの攻略は果たせなかったということ。

なお、このヴァシリコ [P112] (とダニール) がこのガーリチ遠征に「ポーランド人を引き連れて」(поима ляхы) いたことについて、コトリヤールは次のように解釈している。当時、マゾフシエ公だったコンラートは、かつてのダニールの同盟者からガーリチ公となったミハイル [G41] の支持に立場を変えていた (下注 135 も参照)。そのため、おそらく、当時のサンドミエシユ公ボレスワフ純潔公 (Boleslaw Wstydlivy) (サンドミエシユ公在位: 1232 年 ~ 1279 年) から援軍 (ポーランド人) の支援を得て、コンラートのガーリチ支配への影響力を殺ぐために、ガーリチ遠征を組織したというのである [Котляр 2005: С. 237]。

コとダニール〕は掠奪を行ったが、ガーリチ〔城市〕に到達することはなく、二人は〔ヴラジミルへ〕帰郷した。

6743〔1235〕年

【ガーリチ貴族がボロホフ諸侯とともにホモラ川流域を襲撃し掠奪。ダニール陣営のカメネツの貴族はウラジーミル〔J22〕からの援軍を得てこれを撃退する：1236年春¹²²⁾】

ガーリチ人〔貴族〕がカメネツ¹²³⁾ (Каменец) を討つべく到来した。すべてのボロホフの諸公¹²⁴⁾ (болоховьсции князи) がかれらと同行し、ホモラ川¹²⁵⁾ (Хомора) 流域を掠奪し、カメネツに近づいた。そして、多数の捕虜を捕獲して、進軍した¹²⁶⁾。

その時、**【775】**ウラジーミル¹²⁷⁾〔J22〕はダニール〔P11〕のところに援軍として、トルク人¹²⁸⁾ (торцькы) とダニール・ナジロヴィチ¹²⁹⁾ (Данил Нажирович) を差し向けていた。ダニール〔P11〕配下の貴族たちはカメネツ〔の城市〕から出撃すると、トルク人と(съ торкы)¹³⁰⁾ 合流して、かれら〔ガーリチ人〕を追撃した。不忠なガーリチ人は打ち負かされた。ボロホフの諸公(Болоховьсции князи) はみな捕らえられ、かれらはヴラジミルへ、ダニール公〔P11〕のところに

122) この年代推定は [Грушевський 2005: С. 348] 参照。

123) 「カメネツ」(Каменец) は、スルーチ川(Случ)上流域左岸の城市で、現在のミロピリ(Миропіль)市カメンカ村(Кам'янка Дзержинський)に相当する [Літопись руський 373]。ホモラ川の中心城市ポロノエ(Полонное)から東へ14kmほどしか離れていない。ボロホフの地とヴォルィニの地の境界上に位置しており「ダニール配下の貴族たち」(Даниловы бояре)によって支配されていた。

ガーリチ人〔貴族〕は、ダニールのボロホフ支配を嫌ったボロホフ諸公の要請によってこの遠征を敢行したか。いずれにせよ、ガーリチ貴族およびミハイル〔G41〕にとって、この地の攻略は、ダニールとキエフ公ウラジーミル〔J22〕の同盟を弱体化させるという戦略的な意味があった。

124) この「ボロホフの諸侯」については上注 57 を参照。

125) 「ホモラ川」(река Хомора) はスルーチ川(Случ)の左岸支流。上注 96 を参照。

126) コトリヤールはこのガーリチ貴族とボロホフ諸公の遠征の目的を、ミハイル〔G41〕と共謀の上で、ダニールの勢力を殺いで、ミハイルのガーリチ進攻を有利に進めるためだとしている [Котляр 2005: С. 238]。

127) ウラジーミル〔J22〕は、1235年のトルチェスク近郊の戦いでポロヴェツ勢の捕虜になったが、身代金を支払って解放されている(上注 111)。かれはそのままトルチェスクで公支配を行っており、トルク人部隊(次注)(トルチェスクは「トルク人の城市」という意味)を配下に持っていたのだろう。

128) 「トルク人」(торки) はロシ(Рось)流地域に居住していたテュルク系民族で、従来からキエフ公と同盟(もしくは臣従)していた。『キエフ年代記』6701(1193)の記事には、ポロヴェツ人がロシ川流域のトルク人を掠奪した記事がある。トルク人はポロヴェツ人の旧来の敵であり、ポロヴェツ人と同盟していたミハイル〔G41〕に対抗するためには好適な援軍だっただろう。

129) 「ダニール・ナジロヴィチ」(Данил Нажирович) は、ウラジーミル〔J22〕配下の軍司令官。

130) イパーチイ写本は「下級従士たちと」(со отрокуы)となっているが、文意の整合性からフレーブニコフ系写本の読みを採用した。

へ連行された¹³¹⁾。

【ガーリチ公ミハイルとイジャスラフはマゾフシェ公コンラートと同盟してダニール=ヴァシリコ討伐を行うが失敗する：1236 年夏～1237 年春】

夏がやって来た。ミハイル [G41] とイジャスラフ [C43211] は〔ダニールに〕使者を派遣するようになり、こう脅して〔言った〕。「われらの兄弟たちを引き渡せ¹³²⁾。さもなくば、そなたを討つ戦争を行うつもりだ」。

ダニールは神と主教聖ニコライ〔の聖像〕に祈り、かれ〔聖ニコライ〕は自らの奇蹟を示した¹³³⁾。

ミハイル [G41] とイジャスラフ [C43211] は、ダニール [I111] を討つために、多くのポーランド人¹³⁴⁾、ルーシ人、ポロヴェツ人を引き入れた。

コンラート¹³⁵⁾ は、現在ホルム (Холм) の城市がある場所¹³⁶⁾ に布陣した。かれはチェルヴェン¹³⁷⁾ (Червень) に〔兵を〕派遣して掠奪させた。ヴァシリコ [I112] の家来たち¹³⁸⁾ はこれを迎え撃って、かれらと戦った。そして、ポーランドの貴族 (лядьские бояре) たちを捕獲して、ゴロ

131) この捕虜となってヴラジミルへ連行された「ポロホフ諸公」がすぐ後の紛争の原因となっている。

132) 「われらの兄弟たち」(наша братья)とは、直前(上注 131)のカメネツ付近の戦いで捕虜となったガーリチ貴族およびポロホフの諸公を指している。このとき連行されて捕虜となったポロホフの諸公はのちに赦免されて帰郷したらしいことが、以下の記事によって推定される。

133) ダニールが祈願のために聖ニコライ(聖ニコラオス)の聖像を拝礼したことは1227年の記事にも記されている([イパーチイ年代記(10):304頁,注424])。ここで示された「自らの奇蹟」とは、ダニールの敵手コンラートの軍勢がヴェプリ(ヴェプシ)川で溺れたこと(下注142)を指すのだろう。ちなみに、5月9日が聖ニコライの祭日であり、ちょうど春の増水期にあっている。

134) 「ポーランド人」(ляхы)はコンラート一世の軍隊をさしている(下注139)。なお、イジャスラフ[C43211]の伯叔父スヴァトスラフ・イーゴレヴィチ[C4323]の娘がコンラート一世と結婚しており(1208年前後)[イパーチイ年代記(10):243頁,注59]、イーゴリー族のイジャスラフとコンラートの同盟はこの姻戚関係が背景になって成立したのではないか。

135) マゾフシェ公のコンラート一世(Кондраг)は、当時、ドブジン騎士団をヴォルィニ公領との国境に配置して、ダニール=ヴァシリコ等への敵対を鮮明にしていた(下注149,151参照)。そのため、ダニールを追放した敵手であるミハイル[G41]と提携して、ダニールの影響力の排除を狙ったのだろう。

136) ホルム(現ポーランドのヘウム(Chełm))は、この記事の時点(1236年)ではまだダニールの拠点城市として建設されてはいなかったことから、このような言い方になっている([イパーチイ年代記(10):285頁,注334]参照)。以下に見るように、その後、1238年にはダニールの拠点になっている(下注165参照)。

137) 「チェルヴェン」はヴラジミルの南西50kmほどと近い距離にあり、1232年にアレクサンドル[I121]の手に渡ったが(上注41)、1234年にアレクサンドルがダニールの手で捕虜になって(上注96)からは、ヴラジミル公のヴァシリコ[I112]の支配下にあったと考えられる。

138) 「ヴァシリコの家来たち」(Василковичи)は、接尾辞-вичиを付けて配下の者を指す用語で、チェルヴェンに派遣されていたヴァシリコ配下の貴族・兵士たちを指している(前注も参照)。

ドク¹³⁹⁾ (Городок) のダニールの前にかれらを引き立てた。

ミハイル [G41] はポドゴリエ地方¹⁴⁰⁾ (Подъгораи) に布陣して、コンラートと合流することを企図した。〔ミハイル [G41] は〕ポロヴェツ人とイジャスラフ [C43211] を待っていた。ポロヴェツ人はガーリチの地に到来したが、かれらはダニール [I111] を討つことを望まず、ガーリチの地をすべて掠奪してまわると帰郷して行った¹⁴¹⁾。

ミハイル [G41] はこのことを聞くとガーリチへ帰還した。コンラートはその夜にポーランドの地へ急ぎ引き返したが、かれの多くの軍兵がヴェプリ川¹⁴²⁾ (Вепрь) で溺れ死んだ。【776】

【ダニールとヴァシリコはガーリチとズヴェニゴロドの城市攻略を試みるが失敗する：1237年夏】

夏がやって来た。〔ダニールとヴァシリコは〕ミハイル [G41] とロスチスラフ¹⁴³⁾ [G411] を討つべくガーリチへ進軍した。かれら二人〔ミハイルとロスチスラフ〕は城内に籠城した。その〔ミハイルの〕もとには多くのハンガリー人がいた¹⁴⁴⁾。〔ダニールとヴァシリコは〕〔包囲の〕兵を撤退させると、ズヴェニゴロド¹⁴⁵⁾ (Звенигород) 付近で掠奪を行った。この城市の〔攻略を〕

139) この「ゴロドク」(Городок) はペレムィシェリの地、現在のウクライナ、リヴィウ州のホロドク(Городок)のこと。ペレムィシェリとガーリチを結ぶ中間地点に位置している。ミハイル [G41] がすでにペレムィシェリの地であるポドゴリエ地方に来ていたことから(下注140)、これに対抗するためにゴロドクに拠点を置いたのだろう(【Котляр 2005: С. 239】参照)。

140) 「ポドゴリエ地方」(Подъгораи) は文字通り「山麓」を意味し、ドニエートル川、サン川最上流域のカルパチア山脈山麓一帯の地方名。

141) ダニール討伐のためにカメネツ方面へ派遣されたポロヴェツ人が直接ダニールを討たずに、ガーリチの地を掠奪しただけで帰還したという、同様の事態は、1229年にも起こっている(【イパーチイ年代記(10): 310頁, 注455】)。その時は、ダニール [I111] はポロヴェツ人(コチヤン)のもとに懐柔のための使者を派遣していたが、今回も同様の工作が「ダニールを討つことを望ま」なかった理由なのかもしれない。

142) 「ヴェプリ川」(Вепрь) は、ヴィスワ川(Wisla)支流の現在のヴェプシ川(Wieprz)のこと。その中流・上流域はポーランドとヴォルィニ地方との境界の役割を果たしていた。コンラートの兵が溺れたのは、1327年春の増水の時期と重なったことによるのだろう。

143) ロスチスラフ [G411] は1229年の夏～秋に父ミハイル [G41] に譲られてノヴゴロドの公座に就いたが(【НПЛ: С. 68, 274】、1230年12月には公座をヤロスラフ [K4] に引き渡している。その後は、おそらく父親とともに行動していたと思われ、この時点ではミハイル [G41] とともにガーリチにいたのだろう。

144) 原文が曖昧なため「ハンガリー人たちが」誰の陣営にいたかについて、ロシア語訳は「ダニールのもと」と解釈し、英訳、ウクライナ語訳は「ガーリチ城内」「ミハイルのもと」と見解が分かれている。コトリヤールも後者の見解を支持しており、ハンガリー人の多数の軍勢ゆえに、ダニールとヴァシリコはガーリチ城市を攻略できず、和議を余儀なくされた(下注147)と解釈している(【Котляр 2005: С. 240】)。このハンガリー人はアンドラーシュ王子の死(上注90)を契機に親ハンガリー勢力がガーリチから引き上げたあとに残留した兵士たちだったのだろうか。

145) 「ズヴェニゴロド」はガーリチとベルズとのほぼ中間地点にあり、ガーリチからだと北北西に76kmほど離れている。現在のリヴィウ州のズヴェニホロド(Звенигород)に当たっている。付属城市的な性格から見て、この時にはガーリチ公(ミハイル [G41])の支配下にあったことは疑いない。ロスチスラフ [G411] もしくはイジャスラフ [C43211] が拠点としていたか。

試みたが、攻略できなかった。城内に聖なる聖母の奇蹟のイコンがあったからである¹⁴⁶⁾。

【ダニールとヴァシリコはミハイルと和を結ぶ：1237 年秋】

その年の秋、かれら〔ダニール [I111] とヴァシリコ [I112]〕は〔ガーリチ公のミハイル [G41] と〕和を結んだ¹⁴⁷⁾。

【ダニールとヴァシリコはヤトヴァグ人討伐遠征を試みるが増水のために断念：1238 年春 (2 月 ~ 3 月)】

春になり、〔ダニールとヴァシリコは〕ヤトヴァグ人を討伐すべく遠征し、ベレスチエ¹⁴⁸⁾に到達した。川が増水していたため、ヤトヴァグ人討伐の遠征をすることはできなかった。

【ダニールとヴァシリコはドロギチンに遠征して騎士団を壊滅させる：1238 年 3 月】

ダニールは言った。「ソロモン (Соломоничъ) と呼ばれるテンプル十字軍 (крижевник Тепличъ)¹⁴⁹⁾ がわれらの父の地を支配しているのはよいことではない」。そして二人〔ダニールとヴァシリコ〕は重装備の軍隊をもってかれらを討つべく〔ベレスチエから〕進軍した¹⁵⁰⁾。3

146) この「聖母の (...) 奇蹟のイコン」(свагата Богородица, чудная икона) がどのようなものであったかについては記録や伝承はない。ウクライナ語訳は、ズヴェニゴロドにあるピャトニツコエという場所に教会があり、1241 年のタタール襲来のときに焼け落ちた遺跡があることから、この教会のことではないかと推定している [Літопис руський, 1989: С. 392, Прим. 5]。ただし、聖ピャトニツァ (Пятниця) は女性聖人だが聖母ではない。

いずれにせよ、ダニール陣営にとっては攻城が失敗したにもかかわらず、その理由として守備の聖物の力がここで記されているのは、年代記記者の敬虔さもあるが、年代記の編集が同時代とは時間差があったことも関わっているのではないか。

147) 叙述の流れからみて、ダニールとヴァシリコは二度にわたる遠征によるガーリチの攻略の失敗から、ガーリチの公座に就くことを断念して、ミハイル [G41] およびロスチスラフ [G411] から、自分たちにとってできるだけ有利な条件で和を結んだということではないか。この和議については、以下の記事 (下注 152) でも再説されており、ダニールはベレムィシェリを獲得したことがわかる。

148) この討伐の対象となったヤトヴァグ人のは西ブグ川中流・下流域に居住していたと考えられ、ヴォルィニ公領の北西境界に位置する「ベレスチエ」(Берестье, 現在の Брест) は遠征の拠点としては格好の場所にあった。この増水した川は西ブグ川のことだろう。

149) ここの「ソロモンと呼ばれるテンプル十字軍」(Крижевник Тепличъ, рекомый Соломоничъ) の表記は、テンプル騎士団のラテン語名 Pauperes commilitones Christi Templique Solomonici の後ろの部分を音写したもの。ただし、実際には、1228 年にマゾフシェ公コンラート一世の命令でプロシア人からの防衛の目的で創設され、同様の騎士団組織を持つ「ドブジン騎士団」(Fratres Militie Christi de Livonia contra Prutenos, fratres de Dobrin; Добринский орден, Добжинский орден) のことを指している。

150) 叙述の流れからみて、ダニールとヴァシリコは、ヤトヴァグ人遠征のためにベレスチエまで到達したが、増水のために遠路の遠征を諦め、近くにあるドロギチン (次注) へと討伐の対象を方向転換したのである [Грушевський 2005: С. 348]。

月に城市〔ドロギチン〕を占領し¹⁵¹⁾、かれらの団長ブラウン (Braun) を捕まえ、軍兵を捕獲して、ヴラジミルに帰還した。

【ダニールはガーリチ遠征を行い、ミハイルと和を結んでペレムィシェリを得る：1237年秋】

その年にダニールはミハイル [G41] を討つべくガーリチへ遠征した。かれ〔ミハイル〕は和を請うて、かれ〔ダニール [I111]〕にペレムィシェリを与えた¹⁵²⁾。

【ダニールはコンラート討伐の遠征のために、リトアニア公ミンダウガスおよびイジャスラフを派遣する：1237年】

その年、ダニール [I111] は、コンラートを討つために、リトアニア人ミンダウガス¹⁵³⁾ (Миньдог) とノヴゴロド (новгородский) 〔・セヴェルスキイ〕のイジャスラフ¹⁵⁴⁾ を差し向けた¹⁵⁵⁾。

151) このドブジン騎士団は1235年にドイツ騎士団に併合されたが(そこから上注149の名称が発している)、1237年にコンラート一世の命令によって、西の国境の防衛を担う軍事組織として建て直され、西国境の城市「ドロギチン」(Дорогичин)が拠点地として与えられた。この事態にダニールとヴァシリコは、ドロギチンは自分たちの「父の地」とであると反発して、討伐を試みたのである [Літопис руський, 1989: С. 392, Прим. 6]。

この城市ドロギチンは、ベレスチエより北西15kmほどの西ブグ川河岸の城砦で、ヴォルィニ公領との北西の境界に位置していた。ダニールがこの城市を「父の地」と見なしていたことについては、1240年の項に詳しい記事がある(下注281参照)。

152) この記事は、先の注147で述べられている和議(「和を結んだ」と同じことを、再びより具体的・補足的に叙述したのではないか([Грушевський 2005: С. 349]も同様の見解)。ただし、コトリヤールはミハイル [G41] に対して力関係が優位に立ったダニールが、対ハンガリー政策において戦略的に重要な城市ペレムィシェリを要求して勝ち取ったと解している [Котляр 2005: С. 243]。

153) 最初のリトアニア国家の統一者「ミンダウガス」(Миньдог)は、ここではリトアニア人(部族)の代表のように記されており、1220年の時点と比べると([イパーチイ年代記(10):276頁,注284]参照)、かれの手による部族統一が進行していたことがうかがわれる。

154) この「イジャスラフ」の同定は難しい。ロシア語訳は「ノヴゴロド公のイジャスラフ・ヤロスラヴィチ」と注しているが、そのような公の存在は史料になく不思議である。ウクライナ語訳は「これを「イジャスラフ・ミクーリチ [ヴォロダレヴィチ?]]」 [L22412] と同定し ([イパーチイ年代記(7):260頁,注552]参照)、原文の новгородський をポロツク公領の「ノヴゴロドク」と解釈しているが、ノヴゴロドクがリトアニアに隣接しているとは言え、いかにも唐突である。コトリヤールは、これをノヴゴロド=セヴェルスキイ公イジャスラフ・ウラジーミロヴィチ [C43211] (上注76参照)としているが、このイジャスラフ [C43211] はこれまで、ダニールに敵対し、コンラートと同盟してきた経緯があり唐突である。

155) 「差し向けた」(возведе)とあることから、ダニール自身はオーストリア大公の援軍のために不在で(下注158参照)このコンラート討伐遠征には参加しておらず、配下の軍隊を、ミンダウガス、イジャスラフの指揮の下に従軍させたと考えられる。

ミンダウガス率いるリトアニア人と同盟したのは、コンラート一世のドブジン騎士団再興の政策がますますリトアニアの部族を圧迫しており、これに対抗するという点で両者の利害が一致したことによるだろう。イジャスラフ [C43211] との同盟については解釈が難しい。ダニールは直前まで、イジャスラフとポロヴェツ人の連合軍と敵対しており、ここに到ってなぜ同盟したのだろうか。

【ダニールとヴァシリコはペーラ四世の戴冠式のためにハンガリーへ行く：1237 年春】

その頃、ダニールは自分の弟とともにハンガリー人のところ、王〔ペーラ四世〕のもとへと行っていた。〔王は〕かれ〔ダニール〕を榮譽をもって呼んだからである¹⁵⁶⁾。

【オーストリア大公が神聖ローマ皇帝との抗争においてダニールに援軍を求めるが、ハンガリー王の妨害によって断念する：1237 年春】

この頃、皇帝フリードリヒ¹⁵⁷⁾ (Фридрихъ царь) は大公¹⁵⁸⁾ を討つべく戦争のため遠征した。ダニール [I111] はその弟ヴァシリコ [I112] とともに大公の援軍に駆けつけようとした。しかし〔ハンガリー〕王〔ペーラ四世〕は二人にこれを妨げたため¹⁵⁹⁾ 【777】、二人は自分の地へと帰還した。

【キエフの支配公がウラジーミル [J22]、ヤロスラフ [K4]、ミハイル [C41] と次々と交替する：1236 年～1238 年】

その後、スーズダリのヤロスラフ [K4] が〔キエフに〕到来して、ウラジーミル [J22] からキエフを奪取したが¹⁶⁰⁾、これ〔キエフ〕を支配することができずに、再びスーズダリへ戻っ

156) なお、フルシェフスキイはダニールとヴァシリコのこのハンガリー行きと、次のオーストリア大公のための二人の援軍の記事を関連付けて理解している。すなわち、まず大公からの援軍要請によってハンガリー方面へ向かったが、ハンガリーにおいて国王ペーラ四世が「榮譽をもって呼んだ」(звал его на честь) (贈物等を与えて二人を懐柔した) ために援軍を止めて、帰国したという解釈である [Грушевський 2005: С. 349]。

157) ここの「皇帝フリードリヒ」(Фридрихъ царь) は、シュタウフェン朝の神聖ローマ皇帝フリードリヒ 2 世 (Friedrich II) (在位 1220 年～1250 年) のこと。

158) ここで「大公」(гѣрцик) と呼ばれているのは、バーベンベルク家出身のオーストリア大公 (herzog) フリードリヒ 2 世闘争公 (Friedrich II der Streitbare) (在位 1230 年～1246 年) を指している。この頃、オーストリア大公は隣国ハンガリーと抗争を続けており、1234 年にはハンガリー王アンドラーシュ二世はウイーンを攻撃するがのちに撤退。1236 年初めには大公がハンガリーを攻めていた。そのような中、1236 年 6 月に大公が帝国からの独立を策していることを危ぶんだ皇帝が、オーストリアとシュタイアーマルクの大公の資産を没収、1236 年末から 1237 年にかけてオーストリアに軍を派遣してウイーンを占領し、皇帝自身も 1237 年 1 月～4 月この都市に滞在した。このような状況の中で、大公はハンガリーの敵手であるダニールに支援を求めたと考えられる。

159) 「王が二人にこれを妨げた」(королеви же возвравшу има) というのは、フルシェフスキイの解釈によれば、上注 156 の「榮譽をもって呼んだ」と同じことを指していることになる。

160) これについては、『ノヴゴロド第一年代記 (新輯)』の 6744(1236) 年の項の冒頭に「ヤロスラフ [K4] がノヴゴロドを出発してキエフへ、その公座に〔就くために〕向かった。(…) 到着すると、キエフの公座に就いた」[НПЛ: С. 385] とある。これは 1236 年のことである。

た¹⁶¹⁾。ミハイル [G41] は、かれ〔ヤロスラフ [K4]〕から〔キエフを〕奪った¹⁶²⁾。

【ロスチスラフはガーリチの支配公になり、ペレムィシェリをダニールから取り上げる：1238年】

そして〔ミハイル [G41] は〕自分の息子ロスチスラフ [G411] をガーリチに〔支配公として〕残した。かれら〔ロスチスラフ〕はダニール [I111] からペレムィシェリを取り上げた¹⁶³⁾。〔このように〕かれら〔ミハイル＝ロスチスラフとダニール〕の間には時に平和が、時に戦争があった¹⁶⁴⁾。

【ダニールはロスチスラフ不在の間にガーリチに到来して公座に就く（第5次）：1238年後半】

ロスチスラフ [G411] は原野に向けて出撃した。神の助けによって、ダニール [I111] はホルム¹⁶⁵⁾ (Холъм) にいたときに報告を受け取った。ロスチスラフ [G411] がすべての貴族たちと騎兵をともなって、リトアニア人討伐に向かっているというのである¹⁶⁶⁾。

この〔報を〕受け取ると、ダニールは軍兵を率いてホルムを出陣し、3日目にはガーリチ

161) ヤロスラフ [K4] は、ヴラジミル公の兄弟ユーリイ [K3] がシーチ川でのタタール人との戦闘で死んだ(1238年3月4日)こと(下注195参照)を知って、ヴラジミルの大公位に就くべくキエフからヴラジミルへ向かった。報告を受けてすぐの3月半ばにはキエフを出発したのだろう [Літопис руський, 1989: С. 392, Прим. 11]。

162) ミハイル [C41] は、ヤロスラフ [K4] のキエフ退去によって(前注)キエフの公座が空白になったことを知って、ガーリチからキエフに急行し、1238年の3月末～4月初めには到着したと思われる(前注参照)。

163) 先に和議によってダニールに与えたペレムィシェリ(上注152)を、取り決めに破棄して取り上げたということ。次の格言的な文言につながっている。

164) この文言は、『キエフ年代記』の1148年、1149年、1151年の記事で引用されている Мир стоит до рати, а рать до мира (平和は戦争まで、戦争は平和まで)の諺([ПСРЛ Т. 2, 1998: Стб. 364, 392, 444])に類似であり同じ由来を持つものだろう。

165) この時点(1238年)でホルム(現ポーランドのヘウム(Chelm))はダニールにとっての軍事的な拠点地になっていたことがわかる(上注136参照)。コトリャールはこの城市の建設を1236年後半から1238年前半の期間と推定している [Котляр 2005: С. 238]。

166) このロスチスラフ [G411] の遠征については「リトアニア人討伐」(на литву)とあるが、その前には「原野に向けて」(в поле)出発したとある。полеは通常の年代記の用法では、ドニエプル川、南ブグ川下流域のポロヴェツの居住地を指すことが多く、森の民であるリトアニア人とは整合しない。このロスチスラフの遠征先については、リトアニア人討伐は必然性が認められず(マイオーロフは、ダニールの同盟者であるミンダウガス討伐のためとしているが [Майоров 2001: С. 575])、この時点で全軍を動員してまで討伐すべき相手だとは考え難い、またリトアニアの地に達するにはダニール等が支配しているヴォルニニ地方を通過しなければならないことから ([Котляр 2005: С. 246] 参照)、その可能性は低い。これに対して、父ミハイル [G41] が同盟していたポロヴェツの地へ、おそらくモンゴル＝タタールの来襲の報を受けた対策として出動したことは十分に考えられる。また、ロスチスラフ [G411] は、ガーリチがダニールの手に落ちたことを聞くと、遠征の帰路ハンガリーに向かっているが、ロドナ峠(下注176)からハンガリーに入っている(サン川上流域の国境越え行路ではなく)。この行路も、ロスチスラフが南ブグ川下流域に遠征に向かったとするなら地理的に整合する。

に到来した¹⁶⁷⁾。〔ガーリチの〕市民たちはかれ〔ダニールに〕信愛を示した。かれ〔ダニール〕は城市に近づいて、かれら〔市民たち〕に言った。「おお、城市の家臣たちよ¹⁶⁸⁾、そなたたちはいつまで異族の公たちの支配¹⁶⁹⁾に耐えようというのか」。かれら〔市民〕は叫び声を上げてこう言った。「ここにいるのが神から与えられたわれらが支配者である」。そして、かれらは〔ダニールへと〕走り寄った。それは、あたかも子供が父親のもとへ、蜂が女王蜂のもとへ、渴した者が泉へと向かうようであった。

主教アルテミイ¹⁷⁰⁾ (Артемий) と宮廷官グリゴリーイ¹⁷¹⁾ (Григорий) はかれ〔ダニール〕を妨害しようとしたが、二人は城市〔の住民〕を押しとどめることができないことを見て取ると、小心にも城市〔ガーリチ〕の引き渡しに同意し、目に涙を浮かべ、弱気な顔つきで、唇をなめながら〔城市から〕出てきた。なぜなら、かれら二人は自らが〔持むべき〕公の力を持っていなかった¹⁷²⁾ からである。【778】そして二人は嫌々ながら言った。「ダニール公 [I11] よ、さあ来て城市を獲るがよい」。

ダニール [I11] は自分の城市に入城して、聖なる聖母教会¹⁷³⁾ にやって来ると、自分の父の

167) ホルムからガーリチまで直線距離で 242km あり、三日の行程で到着したのは、眠らずに行軍するほどの (上注 97 を参照) かなりの急行だったはずである。ダニールが公 (ロスチスラフ [G411]) と貴族の軍勢ガーリチからいなくなる機会をいかに待ち望んでいたかがわかる ([Майоров 2001: C. 576] 参照)。

168) 「城市の家臣たち」(мужи градъстии) はガーリチの「市民たち」(граждане) に向かっての呼びかけの呼称。この時期の年代記では мужи は身分が高く、多くの場合君公に仕える人物を指している。ダニールは、市民たちの中でも民会を運営するような要人たちに向かって呼びかけたということか。

169) この「異族の公たちの支配」(иноплемьныхъ князий держава) は一義的にはハンガリー人のアンドラーシュ王子の支配を指しているが、おそらく、自分とは異なる一族 (племя) であるロスチスラフ [G411] の支配 (公の一族としては、いわゆるオレーグ [C41] 一族 (ольговичи) に属し、ダニールが属するモノマフ一族 (мономаховичи) とは異なる) も同時に指しているだろう。

170) 「アルテミイ」は当時のガーリチ主教座の主教。1240 年の記事にも言及がある (下注 342 参照)。ガーリチの教会勢力がダニールの支配を嫌った理由について、コトリヤールは、以前のダニールのガーリチ支配のときの教会締め付け政策を主教は好ましく思っていなかったと、解釈している [Котляр 2005: C. 246]。

171) 「宮廷官」(дворский) は公の館 (宮廷) の家政を管理・運営する役職で、領内の御領地の管理にもあたり、行政的・軍事的な権限を有していた。「グリゴリーイ」はおそらく反ダニールのガーリチ貴族の指導者「グリゴリーイ・ヴァシーリエヴィチ」(上注 112) と同じ人物と思われるが、この時はロスチスラフ・ミハイロヴィチ [G411] の宮廷官として、公が遠征中で不在のガーリチの行政を担当していた。そのため、主教とともにガーリチ城をダニールに引き渡す交渉を担うことになったのである。

172) ロスチスラフ [G411] が「すべての貴族たちと騎兵」を率いて、ガーリチを出払っていたことを指している。

173) ガーリチ城市 (クリロス) 内の聖母就寝首座教会 (Успенский собор) のこと。1211 年にダニールが最初にガーリチの公座に就いたときも、ここで着座の儀式が行われている ([イパーチイ年代記 (10): 257 頁, 注 153] 参照)。

座に就いた。そして、勝利を宣言して、〔城市の〕ネメツキイ門に自分の旗を掲げた¹⁷⁴⁾。

【ロスチスラフはガーリチが奪取されたことを知ってハンガリーへ向かう：1238年】

その翌日、かれ〔ダニール〕のもとに次の報告がもたらされた。「ロスチスラフ [G411] がガーリチに向けて軍を進めていたが、城市が奪取されたことを聞いて、途中からハンガリーへ向けて急ぎ、かれらはいまバルスコフ・デル¹⁷⁵⁾ (Борьсуков Дѣл) に向かっている。そして、ロドナ (Родна) と呼ばれる塩鉱山¹⁷⁶⁾ に到着し、そこからハンガリーへ向かうという」。

【ダニールはガーリチ貴族たちを赦免し、ハンガリーへ逃れようとする貴族たちを連れ戻す：1238年】

〔ガーリチの〕貴族たちがやって来て¹⁷⁷⁾、かれ〔ダニール〕の足下に平伏し、「われらは、他の公〔ロスチスラフ [G411]〕を支配者としたことについて、あなたに対して罪を犯しました」と言って憐れみを乞うた。かれ〔ダニール〕はかれらに答えて言った。「赦免を受けるがよい。二度とそのようなことをなすな。よりひどい罪に堕ちないように」。

ダニール [I111] は、かれら〔ガーリチ貴族の一部〕が〔ガーリチから〕逃げ出そうとしていることを知ると、かれらに対して自分の軍兵を差し向けた。そして、〔軍兵は〕かれらを〔カ

174) 「ネメツキイ門」(Нѣмѣцьскыя врата) は、城下にドイツ人商人居住地があった場所の城門と考えられるが、諸注、研究書に言及はなく考古学的にも同定される遺跡は見つからないようである。ウクライナ語訳付録の地図の中では？印付きだが、内城の南に東西に築かれた土塁の東側の城門を「ネメツキイ門」と推定している [Літопис руський, 1989: С. 578]。

なお、自分の旗 (хоругвь своя) を城門に掲げるのは、城市の支配者たることを宣言する軍事儀礼だろう。1238年のこのガーリチ入城でダニールは最終的なガーリチ支配を確立して、これ以降かれの死まで、ガーリチを手放すことはなかったことから、年代記記者は、最終的な支配確立の象徴としてこのエピソードを挿入したと考えられる。

175) 「バルスコフ・デル」(Борьсуков Дѣл) は、次注のロドナ山麓の峠にいたる近隣の山地の地名と推定される [Когляр 2005: С. 246-247]。

176) 「ロドナと呼ばれる塩鉱山」(бана, рекомѣи Родна) の「塩鉱山」の原語 бана はウクライナ語で岩塩を採掘する場所を意味している。「ロドナ」(Родна) は現在のルーマニア北方、カルパチア山脈の高峰ロドナ山 (Munții Rodnei; гора Родна) の山麓で、ビストリツァ (Bistrita, Быстрица) 川の最上流にあたる場所。ガーリチから南へ直線距離で 172km だが、カルパチア山脈を越えなければならない。ここにガーリチ地方からハンガリーへ抜ける峠があった [Пашут 1950: С. 173]。

177) ロスチスラフ [C411] の遠征 (上注 166) に従軍していたガーリチ貴族がガーリチに戻って来たのである。

ルパチアの] 山¹⁷⁸⁾ まで追いかけたが、〔城市に〕 帰還した¹⁷⁹⁾。

バトゥの戦い¹⁸⁰⁾

6745〔1237〕年

【モンゴル＝タタール人の軍勢がルーシに到来する：1237年】

神を畏れぬイシュマイル人たち¹⁸¹⁾ が到来した。かれらは以前にカルカ川で (на Калкохъ) ルーシ諸公と戦った¹⁸²⁾ 相手だった。

178) この「山」(гора) は単数であることから、上注 176 のロドナ山を指すのかもしれない。

179) ロスチスラフ [G411] の遠征に従軍していた反ダニール派の貴族たちが、ロスチスラフに追従してハンガリーへの亡命を企図したので、追撃してかれらの捕獲を狙ったが、ハンガリーとの境界であるカルパチア山脈を越えてまで追いかけることはしなかったということ。

180) 「バトゥの戦い」(Побоище Батыево) の表題は次の 6745 年の年代とともにイパーチイ写本のみにある文言。フレープニコフ写本では「バトゥの戦争はルーシにおいて 6745(1237)年に始まった」(Батыева рать начая в Руси в лѣто 6745) との後年の書き込みが付されている。

なお、研究史では、この個所から 1240 年の記事の半ば (下注 259) まで (ただし 1238 年の記事を除く) を『バトゥ襲来の物語』(Повесть о нашествии Батыя) としてまとめ、『ラヴレンチイ年代記』『ノヴゴロド第一年代記』等の並行的な記事のテキストとの比較研究がなされている ([СККДР Вып.1: С. 361-363] を参照)。

181) 「イシュマエル人」(измаилтянѣ) (通常、「異教の(поганные)」「神を畏れぬ(безбожные)」などの形容詞が付く) の呼称は『原初年代記』『キエフ年代記』ではポロヴェツ人について使われていたが ([イパーチイ年代記 (10): 232 頁, 注 7] 参照), ここでは「タタール人」に〈転用〉されている。ちなみに、1223 年のカルカ川の戦いの記事では、タタール人は「神を畏れぬモアブ人」(безбожные моавитяне) と形容されており ([イパーチイ年代記 (10): 285 頁, 注 336]), 以下には「神を畏れぬハガル人」という表現もある (下注 189 参照)。

182) 1223 年のカルカ川の戦いについては、[イパーチイ年代記 (10): 291 頁, 注 361] 以下を参照。

なお、本年代記にはリヤザンへの来襲以前のバトゥ軍の行動についての記述がないが、『ラヴレンチイ年代記』6744(1236)年の記事では「その年の秋、東の国からブルガールの地へ神を畏れぬタタール人が到来し、ブルガールの栄えある大なる城市(Великий город)を攻略した。そして武器をもって老人から幼児まで一人残らず撃ち殺し、多くの富を略奪した。そして、かれらの城市を火で焼き、かれらの地を略取した」[ПСРЛ Т. 1, 1997: Стб. 460] とバトゥ軍がヴォルガ川中流域に攻め入ったことについて書かれている。翌年(1237年)の春、遠征軍はポロヴェツ人(キプチャク族)を攻撃し、その一部は滅ぼされ、一部は移動し、一部は降伏した。ポロヴェツ人のパチマンという首長は長らく抗戦し、のちに逃走して追撃を逃れたが、司令官モンケ(下注 214)の手で討伐された。遠征軍はこの地のモルドヴァ人、チェルクス人等を征服したのちに、主な司令官たち(バトゥの総指揮のもとに従軍したモンゴル人の諸王侯)はクリルタイを開いて、ルーシの地への侵攻を決めたという [モンゴル帝国史 2: 151-153 頁]。

【タタール人はリャザンとプロンスクを攻略：1237年12月21日～1238年1月】

かれらは最初の到来はリャザンの地だった。かれらはリャザンの城市¹⁸³⁾を槍で¹⁸⁴⁾攻略し¹⁸⁵⁾、奸計をもってユーレイ公¹⁸⁶⁾ [H33]を〔リャザン城内から〕おびき寄せ、プロンスク¹⁸⁷⁾ (Прыньск)へと連れ出した。この時、かれの妃がプロンスクにいたからである。かれらは、かれの妃を奸計をもって〔プロンスク城内から〕おびき寄せ、ユーレイ公 [H33]とかれの妃を殺害した。そして、その全地の〔民〕を撃ち殺し、【779】乳飲み子を含め子供すら容赦しなかった。

183) この「リャザンの城市」(град Рязань)はいわゆるスターラヤ (旧)・リャザンで、現在の州都リャザン (Рязань)からは南東へ50kmほど離れたオカ川右岸の台地に位置していた。現在は遺構が残っている。

184) 「槍で攻略」(взяша град... копьем)は、城市を突撃戦によって攻略するときの定型的文言。槍の部隊は城門・城壁を破るときの先遣隊とされていた ([ロシア原初年代記：396頁, 971年注2]参照)。

185) タタール人 (モンゴル軍) のリャザン攻略について本年代記には描写はないが、『ノヴゴロド第一年代記』6746(1238)年の項に「異教の異族〔タタール人〕はリャザンを包圍し、逆茂木でそれを取り囲んだ。リャザン公ユーレイ [H33]は、人々とともに〔リャザンの〕城市の中に立てこもった。(…)タタール人は、〔リャザンの〕城市を〔1237年〕12月21日に占領したが、到来したのは同じ月の16日であった。こうして〔タタール人は〕公と公妃、男と女と子ども、修道士、司祭を、ある者は火によって、ある者は剣によって殺し、母や姉妹たちの前で修道女や司祭の妻や娘たちを辱めた。しかし主教は神が守護りになった。かれは軍勢が城市を包圍したその年に、他の場に出ていたからである」[НПД: С. 75]と、日付とともに詳しく描写されている。

16世紀の『ニコン年代記』6746(1238)年の記事では以上の内容への追加的文言があり「リャザン、ムーロム、プロンスクの諸公は〔それぞれの城内から〕、神を畏れぬ輩に対して出撃し、かれらと戦った。斬り合いは悪しきものだった」[ПСРЛ Т.10, 2000: С. 106]と記している。

なお、16世紀中頃に編集された『バトゥによるリャザン壊滅の物語』(Повесть о разорении Рязани Батыем)では、バトゥはヴォロネジ川に布陣して、リャザンのユーレイ公 [H33] (次注)に使者を遣り、財産の十分の一の貢納を要求した。ユーレイ [H33]はヴラジミル・ザレスキイのユーレイ・フセヴォロドヴィチ [K3] 公に使者を遣り援軍を求めたが無駄だった。そこでリャザンの地の兄弟諸公に呼びかけると同時に、息子のフョードル [H331]に贈物を持たせて使者に立てて恭順の意を示した。しかしバトゥは無法な要求をしてフョードルと使節団を殺し、この報を聞いたフョードルの妃は自殺した。ユーレイ [H33]は兄弟諸公とともに出撃してバトゥ陣営を襲撃して勇敢に戦ったが、ユーレイをはじめ諸公は全員戦死した (ここでプロンスク公フセヴォロド・ミハイロヴィチ [H511]も死んだことになっている)。バトゥは自分の兵が多く殺されたことに立腹して、リャザン地方の付属城市プロンスク、ベルゴロド (Белгород)、イジェスラヴェツ (Ижеславец)を攻略し、その後にリャザン城市を包圍して、〔1237年〕12月21日に占領し、城内で徹底的な殺戮、放火、略奪を行った。その後スーズダリとヴラジミルへ向けて進軍した [БЛДР-5: С. 140-147]と、リャザン攻略の経緯が詳細に描かれている。

186) 「ユーレイ」[H33]は、リャザン公ユーレイ・イーゴレヴィチ。兄弟のリャザン公イングヴァル [H32]が1235年に没して以降、リャザンの公座に就いていた [Княжа доба 2006: С. 382]。

187) 「プロンスク」(Прыньск; Пронск)は、リャザンの南方約70km、オカ川支流のプロニャ川河岸に位置するリャザンの付属城市。

主上ミハイルの子 [H511]¹⁸⁸⁾ [フセヴォロド・ミハイロヴィチ] は自分の家来を連れてスーズダリ [地方] まで逃れ、大いなる公ユーリイ [K3] に神を恐れぬハガル人¹⁸⁹⁾ (агаряне) の到来、来襲について告げた。

【フセヴォロドはヴラジミルを出てコロムナでタタール人を迎え撃つが失敗する: 1238 年 1 月】

大いなる公ユーリイ [K3] はこれを聞くと、自分の息子フセヴォロド [K31] に全ての家来を率いさせ、ミハイルの子 [H511] とともに [対抗する遠征へと] 派遣した。

バトゥ¹⁹⁰⁾ (Батый) はスーズダリの地を討つべく進撃した。フセヴォロド [K31] はかれ [バトゥ] をコロドナ¹⁹¹⁾ (Колодна) [コロムナ] で迎えた。双方は戦い、双方の多くの者が斃れた。フセヴォロド [K31] は逃げ出すと、父親 [ユーリイ [K3]] に先の戦いの相手が [スーズダリの] 地へ、かれ [ユーリイ] の諸城市へ討伐に向かっていることを告げた¹⁹²⁾。

188) 「主上ミハイルの子」の原語は Кюрь Михайлович で、ミハイル・フセヴォロドヴィチ [H51] (主上 (Кюр) と呼ばれた) の息子を指している。「主上」(кир) は「主人」を意味するギリシア語 κύριε を音写したもので、本来はビザンツの皇族・高位聖職者などギリシア人に対する尊称に用いられたが、ここではミハイルに対する「教会的」な尊称が定着して通称になったのだろう。このミハイル [H51] はブロンスク公で 1207 年に没しており ([НПЛ: С. 428] 参照)、ブロンスク公を継いだ息子の名はフセヴォロド [H511] と伝えられている ([БЛДР-5: С. 140] 参照) (英訳は「アレクサンドル」と注している)。しかし、なぜ本来の名で呼ばれず、父親の名で呼ばれているのかは不明。この時、かれはブロンスク公だったが、襲撃された城市ブロンスクを逃れてヴラジミル・ザレスキイへ逃げ込んだのである。

189) 「ハガル人」(агаряне) については上注 181 を参照。

190) 「バトゥ」(Батый; Batu; 中国史料表記は「拔都」) はチンギス・ハンの長男ジョチの次男で、ジョチ家 (ウルス) の 2 代目のハン (在位 1225 年 ~ 1256 年)。キプチャク・ハン国 (ジョチ・ウルス) の実質的な創建者である。モンゴル帝国皇帝 (大ハーン) オゴデイの命を受けて、1236 年 2 月に西征軍の総司令官として遠征を開始した (当時 29 歳)。1236/1237 年冬までにカスピ海北部、ヴォルガ川中流域のヤース人とヴォルガ=ブルガール人を征服して、1237 年に春にはドン川、ヴォルィニ川の下流域に侵入してポロヴェツ人を殺戮し、1237 年秋に北上して、本記事にあるようにドン川上流域のリャザンを手始めにルーシの諸城市の攻略を開始した。

191) 「コロドナ」(Колодна) はすべての写本でこのような表記だが、そのような地名は存在しない。タタール来襲についての諸年代記記事の比較から (下注 192 参照)、これは、モスクワ川がオカ川に注ぐ河口近くの城市コロムナ (Коломна) の誤記であると解釈されている。

192) このフセヴォロド [K31] のヴラジミルからの派遣とコロムナ近郊の戦い、フセヴォロドの帰還については、『ラヴレンチイ年代記』 6745(1237) 年の項にやや詳しい並行記事がある。「その冬に、フセヴォロド [D177:K] の孫フセヴォロド・ユーリエヴィチ [K31] がタタールを討つべく進軍した。そして、コロムナ付近で遭遇した。大いなる斬り合いがあり、フセヴォロド [K31] の軍司令官エレメイ・グレーボヴィチが殺され、他にフセヴォロド [K31] の多くの家臣が殺された。フセヴォロド [K31] は少数の従士たちとともにヴラジミルへ逃げ込んだ」 [ПСРЛ Т. 1, 1997: Стб. 461]。

【ヴラジミル＝ザレスキイ公ユーリイは戦死する：1238年3月初旬】

ユーリイ公 [K3] は、自分の息子〔フセヴォロド [K31]〕と〔自分の〕公妃をヴラジミル〔＝ザレスキイ〕に残すと、城市〔ヴラジミル〕を出た。かれ〔ユーリイ〕は自分の周りに軍兵を集結させたが、斥候部隊を擁していなかった。そのため、かれ〔ユーリイ〕は無法のボロルタイ¹⁹³⁾ (Бурондай) の奇襲を受け、城市全体が奇襲攻撃を受けて¹⁹⁴⁾、ユーリイ公 [K3] 自身も殺された¹⁹⁵⁾。

193) 「ボロルタイ」(Бурондай, Бурундай, Буранда, 中国史料表記は「孛斡台」) は、チングス・ハンの功臣筆頭のボオルチュの甥で、バトゥ本営の筆頭将軍として遠征軍を率いていた。以下の記事にはかれについて「勇者」(богатырь) と敬称をつけて呼ばれることもある(下注 252 参照)。

かれは、このヴラジミル攻略の後、遠征軍本隊を離れて、北方のロストフ、ヤロスラヴリ、ウグリチを攻略し、シチ川(река Сить)でルーシ諸公連合軍を撃ち破った(下注 195 参照)。1240年にはバトゥと合流してともにキエフを占領、その後のガーリチ・ヴォルィニ地方、ポーランドへの遠征にも参加している。かれの名は本年代記の1240年、1260年の項にも記されている。

194) この奇襲攻撃を受けた「城市」(город) がどこであるか文脈からは不明。ユーリイ [K3] の死について年代記記者は断片的であやふやかな情報をしか持っていなかったのだろう。ここではユーリイは、ボロルタイの奇襲によって「城市」(ヤロスラヴリ?) の中で殺されたように書かれているが、『ノヴゴロド第一年代記』と『ラヴレンチイ年代記』の記事にあるように(下注 195 参照) シーチ川の合戦で戦死したと考えるべきだろう。

195) ヴラジミル公ユーリイ [K3] の行動と死について、『ノヴゴロド第一年代記』6746(1238)年の項では突き放した書き方がされている。「ユーリイ [K3] 公は、ヴラジミルを抜け出すとヤロスラヴリへと逃げた。(…) ユーリイ公 [K3] は、〔軍司令官〕ドロジを3千人の搜索のために〔ヤロスラヴリから〕派遣した。ドロジは急ぎ戻るとこう言った「公よ、もう私たちは取り囲まれています」。そこで公は、自分のまわりに軍隊を集め始めたが、そこに突然タタール人が近づいてきた。公は何をする余裕もなく〔ヤロスラヴリから〕逃げた。かれがシーチ川に着いたとき、〔タタール人が〕かれに追いついた。そこでかれは生涯を終えたのである。かれがどのように死んだか誰も知らない。別の者たちはかれについてさまざまなことを言っている。ロストフとスーズダリは違うことを〔言っている〕」[НПЛ: С. 75-76]。

これに対してユーリイ [K3] に好意的な『ラヴレンチイ年代記』6745(1237)年の記事では、「ユーリイ [K3] は少数の従士たちとともにヴラジミルを出た。(…) そして、ヴォルガ川へ向けて、自分の甥たち、すなわちヴァシリコ [K11]、フセヴォロド [K13]、ウラジーミル [K12] とともに軍を進めた。かれ〔ユーリイ〕はシーチ川(Сить)に陣営を張った。そして、自分の兄弟ヤロスラフ [K4] とその部隊、スヴァトスラフ [K6] とその従士団を待っていた。大いなる公ユーリイ [K3] は、タタールに対抗する軍兵を集めはじめた。そして、ジロスラフ・ミハイロヴィチに自分の従士たちの指揮を委ねた」[ПСРЛ Т. 1, 1997: Стб. 461] とあたかも諸公軍を集めるためにヴラジミルを出たように書かれており、さらにヴラジミル陥落を知ったユーリイが嘆く様子が詳しく描かれ、続いて「神を恐れぬタタール人はシーチ川に到達して、大いなる公ユーリイと対抗した。これを聞いて、ユーリイ公 [K3] は自分の兄弟スヴァトスラフ [K6]、自分の甥たちのヴァシリコ [K11]、フセヴォロド [K12]、ウラジーミル [K13]、自分の軍兵を率いて異教徒に対して出陣した。双方の軍隊が遭遇し、悪しき斬り合いが起こった。われらの〔軍は〕異族の前で逃げ出した。そして、そこでユーリイ公 [K3] は殺され、ヴァシリコ [K11] は神を恐れぬ輩の捕虜になり、その陣営に連れられていった。この不幸な出来事は、聖殉教者パウロスとユリアナの祝日3月4日に起こった。こうして、大いなる公ユーリイ [K3] はシーチ川で殺され、かれの多くの従士たちもそこで戦死した」[ПСРЛ Т. 1, 1997: Стб. 465] とユーリイの死が描かれている。

【タートル人首領バトゥはヴラジミル包囲して降伏させる：1238年2月（7日）】

バトゥは〔ヴラジミルの〕城市付近に布陣し、城市を激しく攻撃した。かれ〔バトゥ〕は奸計をもって住民にこう伝えた。「いったいリャザンの諸公、そなたたちの城市、そなたたちの大いなる公ユーリイ [K3] はどこにいるのか。われらの双腕がかれ〔ユーリイ〕を捕えて、死に引き渡したのではないか¹⁹⁶⁾」。

主教の尊師ミトロファン¹⁹⁷⁾ はこれを聞くと、〔住民の〕全員に向かって涙ながらにこう語り始めた。「子たちよ、不信心者どもの奸策を恐れるな。【780】 滅びやすいつかの間の生のことを思慮するにはおよばない。つかの間に過ぎ去るものではない生、すなわち天使たちとともにある生に配慮しようではないか。もし、われらが城市が槍〔武力〕によって攻略され、占領され、われらが死に引き渡されたなら、子たちよ、わしは保証する、そなたたちは神たるキリストの不朽の栄冠を受けるだろう」。この言葉を聞いたすべての〔住民は〕激しく戦い始めた。

タートル人は投石機¹⁹⁸⁾ (порокы) をもって城市を破ろうとし、無数の石 (矢) を撃った。フセヴォロド公 [K31] は戦闘がより苛烈になるのを見て取ると恐れをなした。かれは若かったのである。かれ〔フセヴォロド [K31]〕は、少数の従士たちを伴い、多くの贈物を持って〔ヴラジミルの〕城市を出た。かれ〔バトゥ〕に命乞いをするを期したのである¹⁹⁹⁾。かれ〔バトゥ〕はあたかも猛獣のように、若年のかれ〔フセヴォロド [K31]〕を容赦せず、自分の目の前でかれを斬り殺すよう命じた。そして、城市をすべて破壊した。

尊師〔ミトロファン〕主教は〔ユーリイ [K3] の〕公妃とその子供たちとともに聖堂の中に逃げ込んだ。不信心者〔バトゥ〕はこれを火で焼くよう命じ、こうしてかれらは自分たちの魂

196) ここではバトゥはユーリイ [K3] の死を知っているかのように語っているが、『ラヴレンチイ年代記』『ノヴゴロド第一年代記』の並行記事によればユーリイはヤロスラヴリに逃れたのち、1238年3月初旬(4日?)にシーチ川の戦いで戦死しており(上注195参照)、こちらが本来の事件の経過と考えられる。この時系列の混乱は、本年代記の編集過程で生じたものだろう。

197) 「主教の尊師ミトロファン」(преподобный Митрофан епископ) はヴラジミル = スーズダリ主教で1227年3月に叙任されてヴラジミルにいた。すぐ後で見ると、バトゥのこのヴラジミル攻略のときに没している。

198) この「投石機」(порокы) は、上注103 таран と同じもので、多くの人力で石を城内に向けて投じて城柵や城壁を破るための武器、いわゆるカタパルトである。

199) この、フセヴォロド [K31] の行動は、諸公・ポロヴェツ人の間の内争で、攻城側の戦力が圧倒的で勝ち目がないときに、防衛側が降伏と贈物提供を条件に、過度の掠奪や住民の殺害を免れる、和議を申し出る場合の戦争儀礼である。しかし、タートル人にはそれが通用しなかったことになる。このフセヴォロドの「否定的な」行動が記されているのは史料の中では本年代記のみである。

なお、諸研究には、フセヴォロドはその兄弟(弟)のムスチスラフ・ユーリエヴィチ [K32] を伴って城市を出て、ムスチスラフもやはり殺されたとしているものがあるが(Котляр 2005: С. 249) など、それに該当する記述が本年代記には見当たらず不思議である。

を神の手に引き渡した²⁰⁰⁾。

200) 『ラヴレンチイ年代記』6745(1237)年の記事では、1238年2月3日にバトゥがヴラジミルに到来して、2月7日に陥落したとしているが、その際の主教とユーリイの公妃の死について具体的に次のように描いている「主教ミトロファン、ユーリイ [K3] の公妃と娘と嫁たち、孫たち、他の者たち、ウラジミル [K33] の妃と子供たち、多くの貴族たちと庶民は聖なる聖母教会に閉じこもった。そして、かれらは情け容赦なく焼き殺された。神を愛する主教ミトロファンは祈って言った。(…) こうして、かれは世を去った。タタール人は教会の扉を實力で打ち破った。そして、ある者は火で焼かれ、別の者は武器で撃ち殺されているのを見た」[ПСРЛ Т.1, 1997: Стб. 463]。

なお、ラシードウッディーンの『集史』(Сборник летописей)の「グユク＝ハン紀」の中で、バトゥによるヴラジミル攻撃については「大いなるユーリイの城市(ユウギ・ブズルグ)を包圍して、8日でこれを攻略した。かれら〔住民〕は激しく戦った。かれら〔住民〕を打ち破るまでのあいだ、モンケ＝ハンは個人的な武勇の功業を示した」[Рашид-ад-дин Т. 2: С. 39][モンゴル帝国史2: 364頁]と記されており、攻城戦の様子や攻略までの日数はほぼ対応している。

また、『ノヴゴロド第一年代記』6746(1238)年の項ではより詳しく描写されている「ヴラジミルにはかれの息子のフセヴォロド [K31] が母〔ユーリイの公妃〕、尊師〔主教ミトロファン〕、および、そのすべての領民とともに立てこもった。無法なイシマエル人らは城市に近づき、軍勢をあげて城市を包圍し、柵ですっかり取り囲んだ。翌朝フセヴォロド公とミトロファン尊師は、城市がすでに占領されそうであるのを見て聖母教会に入り、公も公妃も、娘も、息子の嫁も、貴族もその妻も、すべての者がミトロファン尊師の手によって剃髪、スヒマ修道士になった。すでに無法な者たちが近づいて来て破城槌を立て、城市を占領して火で焼いた。肉断ちの主日の前の金曜日〔1238年2月5日〕のことであった。公、尊師、および公妃は城市が焼かれ、人々がすでに火によって、またある者は剣によって死につつあるのを見て、聖母教会に逃げ込み、唱歌席に閉じ込められた。異教徒たちは扉を打ち破り、教会を焼き、木材を運び込んで、すべての人々を窒息させて殺した。このようにしてこれらの人々は生涯を終え、魂を主にゆだねた」[НПЛ: С.75-76]。ここでは、占領の日が2月5日になっていることが注目される。

【タタール人はコゼリスクを攻め、7週間の戦いのすえに占領する：1238年夏頃】

かれ〔バトゥ〕はヴラジミルの城市を撃ち破り、スーズダリ地方の諸城市を捕獲し²⁰¹⁾、コゼリスク (Козельск) の城市へと向かった²⁰²⁾。ここにはヴァシーリイ²⁰³⁾ [G11] という名の若い公がいた。不信心者どもは、この城市の人々は堅固な魂の知恵を持っていること、奸計の言葉をもっては城市を落とすことはできないことを知った。コゼリスク人は協議して、【781】バトゥに降

201) 本年代記には、ヴラジミル攻略以後の北東ルーシ (スーズダリ地方) へのタタール軍の動きについての具体的な記述はないが、他の年代記史料によると、タタール人の別働隊はさらに北へ向かい諸城市を襲撃している。

『ラヴレンチイ年代記』によれば、「この呪われた吸血鬼のタタール人はヴラジミルを制圧すると、大いなる公ユーリイ [K3] を討つべく出発した。タタール人の一部はロストフへ進軍し、別の一部はヤロスラヴリへ向かい、また別の一部はヴォルガ川のごロデツへ向かった。そして、かれらはヴォルガ川沿岸の地をメールスキイのガーリチまで制圧した。また別のタタール人はペレヤスラヴリ〔・ザレスキイ〕を討つべく出発し、これを占領した。そこから、その周辺地を全て制圧し、トルジョクの近くまで多くの城市を制圧した」[ПСРЛ Т.1, 1997: Сrб. 464] とスーズダリの地の各方面に分かれて略奪を行っていることがわかる。

また『ノヴゴロド第一年代記』6745(1238)年の記事によれば、「モスクワ、ペレヤスラヴリ、ユーリエフ、ドミトロフ、ヴォロク、トヴェーリを占領した」とヴォルガ川沿いの諸城市を略取して、トヴェーリからトルジョクへ向かって城市を濠で囲んだとある[НПЛ: С.76, 288]。さらに、トルジョク占領とノヴゴロドへの進軍と突然の方向転換については、「イスマイル人たちはトルジョクを包囲した。斎戒の主日〔大斎の第1の日曜日〕すなわち集いの〔主日〕〔1238年2月21日にあたる〕だった。2週間投石機を撃ち続けた。城内の人々は疲弊した。ノヴゴロドからかれらへの援助はなかった。その時は誰もが異教徒への恐れから困惑、混乱していた。かの神を畏れぬポロヴェツ人〔「タタール人」の誤記〕はトルジョクの城市を攻略し、老若男女、司祭職・修道職を問わず全員を斬り殺し、みな酷く虐げられ辱められて、屈辱の死をもって主なる神に魂を引き渡した。3月5日の大斎中日のことだった〔この年の中日は3月14日なのでズレがある〕。このとき殺されたのはノヴゴロドの代官イヴァンコ、ヤキム・ヴヌーコヴィチ、グレーブ・ポリソヴィチ、ミハイル・モイセエヴィチだった。〔タタール人は〕トルジョクからセリゲルの道 (Серегърскимъ путем) を進撃して、イグナートの十字架 (Игнач крест) まで達した。かれらはすべての人を草のように切り倒し、ノヴゴロドから100露里 (ヴェルスタ) のところまでは達しなかった。慈しみ深い神、聖なる大いなる教父アレクサンドリア大主教キリルが、再びノヴゴロドを守護したのである。ノヴゴロドの大主教たち、ルーシの敬虔なる諸公、尊い修道士、司祭たちの集まりによる聖なる正教の祈り〔もノヴゴロドを救った〕。かの神を畏れぬ者どもはイグナートの十字架のところまで聖なるキリルに追放されて引き返した」[НПЛ: С.76, 288] と詳細に記されている。

この事件について詳しい史料学的考証を行ったヤーニンによれば、なお、この「イグナートの十字架」(Игнач крест) の方向転換は3月18日、エルサレム主教キリルの祝祭日でトルジョク陥落の13日後にあたる[Янин 2013: С. 77]。

202) 「コゼリスク」(Козельск) は、オカ川 (Ока) の支流ジズドラ川 (Жиздра) 沿いの城市で、スーズダリ地方とノヴゴロド・セヴェルスキイのほぼ中間地点に位置している、現在も同名の城市。ヴラジミル=ザレスキイからなら西南に376kmも離れている ([イパーチイ年代記 (10): 286頁, 注340] 参照)。

203) 「ヴァシーリイ」[G11] 公は、1223年のカルカ川の戦いで戦死したチェルニゴフとコゼリスクの公ムスチスラフ・スヴャトスラヴィチ[G1] ([イパーチイ年代記 (10): 286頁, 注341] 参照) の息子。かれは父の公座を継いでコゼリスクにいたのだろう。

伏せず、次のように言った。「われらの公は若年だが、われらの命をかれに委ねよう。ここでこの世の栄光を受け、あそこで天の栄冠を神であるキリストから受けようではないか」。

タートル人は城市を攻め、城市を占拠しようと望み、城壁を撃ち破り、土塁に駆け上った。コゼリスク人は短刀をもってかれらと斬り合った。〔コゼリスク人は〕協議して、城外でタートル人部隊に対抗することにした。こうして、城市を出撃すると、かれらの投石機を破壊し、かれらの部隊に襲いかかり、4千人のタートル人を撃ち殺したが、自分たちも撃たれた。

バトゥは〔コゼリスクの〕城市を占拠し、〔住民〕全員を撃ち殺し、乳飲み子も含め子供すら容赦しなかった。ヴァシーリイ公[G11]の消息は杳として知れなかった。ある者は、かれは若かったので、血の海の中に沈んだと言っていた。

その時から、タートル人はこの城市をコゼリスクと呼ぼうとせず、「悪しき城市」と呼ぶようになった。なぜなら、7週間もここで戦ったのだから。タートル人の側では、万人長の三人の息子²⁰⁴⁾が戦死した。タートル人はかれらを捜したが、多数の死体の中から捜し出すことはできなかった²⁰⁵⁾。

【タートル人はドン川とドネツ川の中流域のステップ地帯へ向かう：1238～1239年】

バトゥはコゼリスクを占領すると、ポロヴェツの地へと進軍した²⁰⁶⁾。そこから、ルーシの地の諸城市へ使者を派遣し始めた。

204) 「万人長の三人の息子」(сыны темничя три)の万人長(темник)とは、1万をあらわすモンゴル語 *tiimen*、チュルク語 *tuman* (ロシア語 *тыма*) に由来すると考えられ、大軍を統制する最高位の軍司令官を指している。当然、その「息子たち」も高位の司令官たちだったに違いない。

205) バトゥの軍のコゼリスク攻撃については、ラシードウッディーンの『集史』にも記されており、ここでは「その〔別働隊を派遣した〕間にバトゥはコゼリスク(キシル・アクスカ?)の城市に近づいた。そして、2ヶ月の間これを包囲したが、攻略することができなかった。その後、カダン〔皇帝オゴデイの息子〕とブリ〔チンギス=ハンの子チャガタイの孫〕が〔別働隊の攻略を終えて〕到着すると、3日で城市を占領した。そこで、かれらは〔城内〕の家屋の中に身を置いて、休むことができた」[Рашид-ад-дин Т. 2: С. 39][モンゴル帝国史2: 365頁]と苦戦した様子が記されている。

206) 「ポロヴェツの地」(земля половецкая)は、『イーゴリ軍記』に頻出する表現だが、ドン川とヴォルガ川下流域のステップ地帯を指している。バトゥ軍はコゼリスク攻略の後の1238年秋～1239年夏の期間、ステップに隣接する北カフカス地方において越冬し、その間にこの地の、チェルケス人(アラン人)、クリム人(ポロヴェツ〔クマン〕人)諸民族の征服を行っている。また、1238/1239年冬にはカフカスのアラン人の城市を征服、1239年春にはデルバンド周辺地方を攻略している[モンゴル帝国史2: 159-160頁]。

【タタール人はステップを西進してペレヤスラヴリを攻略する：1239年9月～10月】

そして、ペレヤスラヴリ²⁰⁷⁾の城市を槍で占領し、〔住民〕全員を撃ち殺し、大天使ミハイル教会²⁰⁸⁾を破壊し、無数の教会の聖具、【782】黄金や宝石の〔装飾〕を掠奪し、尊師主教シメオンを殺害した²⁰⁹⁾。

【バトウはチェルニゴフを攻略する：1239年(10月18日)】

そして、〔バトウは〕チェルニゴフへ〔軍隊を〕派遣して、この城市を大軍をもって包囲した。ムスチスラフ・グレーボヴィチ²¹⁰⁾ [G31]は、異族によって城市が襲撃されていることを聞くと、全軍兵を率いてかれらを討つべく駆けつけた。かれ〔ムスチスラフ〕は戦ったが、ムスチスラフ [G31]は撃ち負かされた²¹¹⁾。そしてかれの軍兵の多くも撃ち殺された。〔チェルニゴフの〕城

207) ロシア語訳の注はこれを「ペレヤスラヴリ＝ザレスキイ」としているが、直前に「ルーシの地」に使者を發したと書かれていることから、ドニエブル河岸のペレヤスラヴリ〔＝ルースキイ〕とすべきだろう。

208) ペレヤスラヴリ・ルースキイの首座教会。このとき石造りの聖堂が破壊されて以降、17世紀に木造教会が再建されるまで聖堂は完全に廃墟となっていたという [Раппопорт 1982: С. 32, №44]。

209) モンゴル軍のペレヤスラヴリ・ルースキイ攻撃については、『ラヴレンチイ年代記』の1239年の項に「この年、タタールはルーシのペレヤスラヴリを占領し、主教を殺した。そして人々を虐殺し、城市を火で焼いた。多くの捕虜と略奪物を得ると撤退した」[ПСРЛ Т.1, 1997: Стб. 464]との並行記事がある。

210) 「ムスチスラフ・グレーボヴィチ」(Мстиславъ Глѣбовичъ)[G31]については上注100参照。続いて「かれらを討つべく駆けつけた」(приде на ны)とあることから、公座のあるノヴゴロド＝セヴェルスキイから、チェルニゴフの城市に援軍に駆けつけたのだろう。

なお、『ノヴゴロド第四年代記』(『ソフィア第一年代記』)『ヴォスクレセンスカヤ年代記』[ПСРЛ Т.7, 2001: С. 144]の6747(1239)年の項では、本年代記の6742(1234)年のダニール等によるチェルニゴフ攻撃の記事にある「チェルニゴフでは激しい戦闘が行われた。投石機が据えられ、矢の1.5倍もの射程の投石がなされた。その石は4人の頑健な男がようやく持ち上げられるような重さだった」の文言が使われている。ディムニク、マイオーロフ等の研究者たちは、この文言は本来の資料では、ここのバトウ勢によるチェルニゴフ攻めの描写であったと考えている(上注104参照)。

211) ヴォイトヴィチは、ムスチスラフ [G31]はこの戦闘で死んだとしているが [Войтович 2006: С.409]、ウクライナ語訳注によれば、かれは死ぬことはなく逃げることができたとしている。実際、『ラヴレンチイ年代記』に「〔チェルニゴフの〕公をハンガリーへ連れて行った」(下注212参照)とある。なお、プラノ＝カルピニのヨハネスによれば、ムスチスラフにはアンドレイという息子がいたが、1245年にモンゴル人の手で死んでいる [Літопис руський, 1989: С. 394, Прим. 9]。

市は占領され、火で焼かれた。主教²¹²⁾は殺されずに、グルーホフ²¹³⁾(Глухов)へ連行された。

【モンゴル人司令官モンケがキエフ城下に現れ、攻略を準備する：1239年秋】

モンケ＝ハン²¹⁴⁾(Меньгукан)がキエフの城市を視察するためにやって来た。かれ〔モンケ〕はドニエプル川の対岸のペソチニイ²¹⁵⁾(Пъсочный)の要塞に布陣して、〔キエフの〕城市を眺め、その美しさと偉容に驚嘆した。そして、〔キエフ公〕ミハイル²¹⁶⁾[G41]と住民に宛てて使者たちを派遣して奸計をもって〔降伏させようと〕したが、かれ〔モンケ〕の言を聞き入れることはなかった²¹⁷⁾。

212) 『ラヴレンチイ年代記』6747(1239)年の記事に「その年、タタール人はチェルニゴフを占領し、公〔ムスチスラフ[G31]〕をそこからハンガリーへと連れて行った。城市は焼き、人々は虐殺し、修道院は略奪し、主教ポルフィリイはグルーホフで解放した。タタール人自身は自分たちの陣営に戻った」とあることから、この主教(епископ)はチェルニゴフ主教ポルフィーリイ(Порфирий)であることがわかる[ПСРЛ T.1, 1997: Стб. 469]。

213) 「グルーホフ」(Глухов)は、デスナ川とセイム川に挟まれ、チェルニゴフから東へ約185km離れている。現在のウクライナの「フルーヒウ」(Глухів)に相当する。タタール軍はキエフへ向かう本隊とは別に、デスナ川、セイム川方面への部隊を派遣したのだろう。

214) 「モンケ＝ハン」(Меньгукан; Мунке, Möngke)の表記も、中国史料表記は「蒙哥」(1209年～1259年)は、バトゥ軍の高位司令官。のちに、モンゴル帝国の第4代皇帝(大ハーン)(在位1251年～1259年)となった人物。チンギス・ハーンの四男トルイの長男で、バトゥの2歳年少の従兄弟にあたる。1236年のバトゥを総司令官とする西征(上注190)に従軍し、1238年には「ポロヴェツの地」でヤース人(アラン人)を制圧し、翌年には、南ルーシの征服、とくにキエフ攻略で戦功を挙げた。

215) 「ペソチニイ」(Пъсочный)は「砂州」を意味し、ベレヤスラヴリから南東方向に約60kmほど離れ、キエフの丘からは北東に7kmほどの距離の、ドニエプル川対岸チェルトリイ川(Чертория)の河岸に位置する城砦。現在の、キエフ州ベレヤスラフ＝フメリニツキイ区のピシチャネ(Піщане)村あたりにあったと推定されている。12世紀の諸公の内訌においても、対岸からキエフを攻めるときには、ここに布陣することが多かった。

216) ミハイル[G41]は、1238年3月後半頃からキエフの公座に就いていた(上注162を参照)。

217) このモンケがキエフ対岸布陣した先遣隊は偵察と降伏を促す交渉が目的で、攻略を目指したものではなかった。結局、交渉は成立せず、以下に見るように、モンゴル軍はバトゥの指揮のもとあらためて軍勢を整えてキエフ攻略に着手することになる。

なお、『ニコン年代記』6748(1240)年の項では「モンケはかれ〔ミハイル[G41]〕に奸計をもって使者を遣り、こう言った『わしはそなたに言いたいことがある。自身でわしのもとに来たれ』。かれ〔ミハイル〕はかれ〔モンケ〕の使者を全員撃ち殺し、自らキエフを逃げ出した」[ПСРЛ T.10, 2000: С. 116]と交渉についての補足的なエピソードが書かれている。

6746 [1238] 年

【キエフ公ミハイルはハンガリー人のもとへ逃亡し、ヴィシェゴロド公ロスチスラフがキエフの公座に就く：1240 年春】

〔キエフ公〕ミハイル [G41] は自分の息子〔ロスチスラフ [G411]〕のあとを追って²¹⁸⁾、タタールを前にしてハンガリー人のもとに逃亡した²¹⁹⁾。そして、スモレンスク公のロスチスラフ・ムスチスラヴィチ²²⁰⁾ [J311] がキエフの公座に就いた。

【ダニールは遠征してキエフを占領し、貴族のドミトルを代官として置く：1240 年春～夏】

ダニール [I111] はかれ〔ロスチスラフ [J311]〕を撃つべく速駆けで進軍し、かれを捕獲し、そこ〔キエフ〕にドミトル²²¹⁾ (Дмитр) を〔代官として〕残した。〔ダニールは〕〔キエフを〕

218) ミハイル [G41] の息子ロスチスラフ [G411] は、1238 年にダニール [I111] によるガーリチ城市の奪取の報を聞くと、遠征先からハンガリーへ逃げ出していた (上注 175, 176)。

219) ミハイル [G41] のハンガリーへの逃亡については、『ノヴゴロド第一年代記 (新輯)』6753(1245) 年の記事で、侵略の初め (1240 年) の回想として「ルーシの地に異教徒のタタールが侵入した。諸公は諸城市に立て籠もった。当時、キエフを支配していたミハイル [G41] のもとに皇帝バトゥから使者たちがやってきた。ミハイルはかれらの偽りの言葉を見抜いて使者たちを殺すように命じた。かれ自身は自分の家の子たちとハンガリーへ逃げた」[НПЛ: С. 298] としている。おそらくミハイル公は、バトゥ軍本隊によるキエフ攻撃は不可避であり、攻撃を受けたときには防衛できないと見限って、援軍を得るためにハンガリーのベーラ四世のもとへと逃げ出したのだらう ([Пашуто 1950: С. 221] 参照)。

220) 「ロスチスラフ・ムスチスラヴィチ」[J311] は、ヴィシェゴロド公で 1188 年に没したムスチスラフ・ダヴィドヴィチ [J31] [イパーチイ年代記 (8): 227 頁, 注 261] の息子と同定される (ロシア語訳も同様の同定)。かれは、1188 年以降父が支配していたヴィシェゴロドに拠点を置き、成人後はスモレンスクとヴィシェゴロドを公支配していたのではないか (1194 年に生まれたムスチスラフ・ダヴィドヴィチ [J32] [イパーチイ年代記 (8): 261 頁, 注 446] の息子の可能性もあるが、その場合年齢は 20 代前半と推定され、キエフの公座に就くには若すぎるだろう)。ミハイル [G41] がキエフを逃げ出してすぐに、かれがキエフの公座を獲得できたのは、距離の近さによるものだろう。ただし、ムスチスラフ [J31] は十分な武力を持たず、おそらくキエフ市民の支持もなかったため、次に見るように、キエフ公座に野心のあったダニール [I111] にあっけなく捕らえられてしまう。かれが捕虜となった後の消息は史料に記されておらず不明である。

なお、コトリヤールはこの「ロスチスラフ・ムスチスラヴィチ」を 1223 年にカルカ川の戦いで戦死したキエフ公 (スモレンスク公) ムスチスラフ・ロマノヴィチ [J12] ([イパーチイ年代記 (10): 286 頁, 注 339]) の息子のロスチスラフ・ムスチスラヴィチ [J124] (洗礼名ボリス) ではないかと推定しており、ウクライナ語訳もそのように同定しているが、ともにその根拠は示されていない。

221) 「ドミトル」(Дмитр) はガーリチの千人長で、1219 年にムスチスラフ [J51] 配下の軍司令官として言及され、その後ダニール [I111] に勤務していることから ([イパーチイ年代記 (10): 272 頁, 注 252] 参照)、老練の軍人であるかれが、ダニール [I111] によってキエフの代官として派遣されたのだらう。1240 年 12 月のバトゥ軍によるキエフ攻撃のときに防衛部隊の指揮をとり、陥落後は捕虜になって、バトゥ軍と行動を共にしている (下注 255)。

異族の手から、神を畏れぬタタール人から守るよう、ドミトルの手にキエフを託した。

【スーズダリ公ヤロスラフはカメネツを占領してミハイルの妃を捕虜にする：1240年春～夏】

〔スーズダリ公ヤロスラフ [K4] は知った²²²⁾〕ミハイル [G41] がキエフから逃げ出しハンガリー人のもとに行ったことを。そして、〔ヤロスラフ [K4] は〕駆けつけて〔カメネツに〕到来すると、かれ〔ミハイル [G41]〕の公妃²²³⁾を捕まえて、かれ〔ミハイル〕の貴族たちを捕獲し、カメネツ²²⁴⁾ (Каменец) の城市を占領した²²⁵⁾。

【ミハイルの妃は解放されて、実の弟であるダニール等の庇護のもとに置かれる：1240年春～夏】

ダニール [I111] はこのことを聞いて、〔ヤロスラフ [K4] に向けて〕使者たちを派遣してこう言った。**【783】**「〔わしの〕姉²²⁶⁾ (сестра) はわしのもとに解放せよ。なぜなら、われら二人〔ダニールとヴァシリコ〕に悪事のはかりごとをなしたのは〔妃ではなく〕ミハイル [G41] なのだから」。ヤロスラフ [K4] はダニール [I111] の言葉を聞き届けた。そして次のことが起こった。姉がダニール [I111] とヴァシリコ [I112] の二人のもと〔ガーリチ〕にやって来た。二人は大いなる名誉をもってかの女を保護下に置いた。

222) この部分は原文が断片的で (テキストの脱落によるものか) 文意が取りにくい。以下に叙述されている事態の進展を勘案して「ヤロスラフ [K4] は知った」と補った。

223) このミハイル [G41] の妃 (妻) については下注 226 を参照。

224) 「カメネツ」 (Каменец) は、スルーチ川上流河岸のカメネツ (上注 123 参照) を指している (ウクライナ語訳索引参照)。

225) 『ラヴレンチイ年代記』1239年の記事に「その年、ヤロスラフ [K4] はカメネツへ出発した。かれは城市カメネツを占領し、ミハイル [G41] の妃と多くの掠奪品を持ち帰った」[ПСРЛ Т.1, 1997: Стб. 469] と同様の内容の記事がある。捕虜となったミハイル [G41] の妻はスーズダリ地方に連行されたのだろう。

なお、『ラヴレンチイ年代記』索引では、この「カメネツ」をドニエストル左岸支流スモトリチ川 (Смотрич) の最下流域にあるカメネツ (現カメネツ=ポドリスキイ (Кам'янець-Подільський)) としているが、これはスルーチ川上流河岸の城市とすべきだろう (上注 224 参照)。

226) これはダニール [I111] にとって「姉」(сестра) のことで、かの女はミハイル [G41] の公妃 (княгиня) (上注 223) であることから、ミハイル [G41] はダニール [I111] とヴァシリコ [I112] にとって義理の兄弟 (шурин) であったことが分かる。この女性はロマン [I11] と先妻のブレドスラヴァ ([イパーチイ年代記 (9) : 232 頁, 注 85] 参照) の間にできた娘で、ダニール等にとっては腹違いの姉にあたる。記事の流れから見ると、タタール人の脅威を前にミハイル [G41] は妃を伴ってキエフを逃げ出しハンガリーへ向かったが、その途上のカメネツで妃と一部の貴族たちを置いて、自分だけで息子ロスチスラフ [G411] のいるハンガリーへ行ったということになるか。

なお、ドムプロフスキイはかの女をダニールの実の姉で 1199 年～1201 年に生まれ、1211～1212 年にミハイル公 [G41] と結婚したと推定している。「リユーベク過去帳」の史料によれば「エレーナ」(Елена) という名だった可能性があるという [Домбровский 2015: С. 304-308]。

【ハンガリー王ベーラ四世は、亡命中のロスチスラフとミハイルを追放、かれらはマゾフシェ公コンラート一世のもとに身を寄せる：1240 年夏】

〔ハンガリー〕王は自分の娘をロスチスラフ [G411] と結婚させず、かれ〔ロスチスラフ〕を追放した²²⁷⁾。ミハイル [G41] とロスチスラフ [G411] の二人は、自分の母方の伯叔父である²²⁸⁾、ポーランドのコンラートのもとに行った²²⁹⁾。

【ミハイルはポーランドからダニールに和を請い、ダニールは赦してミハイルを〔ガーリチに〕呼び寄せる：1240 年夏】

ミハイル [G41] はダニール [I111] とヴァシリコ [I112] に宛てて使者を遣って、こう言った。「わたしはあなたたちに何度も罪を犯しました。何度もあなた〔ダニール〕に悪事を働きました。あなたに約束したことを行いませんでした。わたしがあなたと親愛を結ぼうと思っても、不忠なガーリチ人〔貴族〕たちはわたしを許してくれませんでした。今、わたしは誓約によって、今後いかなる時もあなたに敵対しないことを、あなたに誓います」。

ダニール [I111] とヴァシリコ [I112] は悪事を恨まず、かれ〔ミハイル [G41]〕に自分たちの姉²³⁰⁾を引き渡して、かれをポーランド人のもとから呼び戻した²³¹⁾。

【ダニールとヴァシリコは、ミハイル [G41] とロスチスラフ [G411] に、それぞれキエフとルチェスクを与えることを約束するが二人は行かず：1240 年夏～秋】

ダニール [I111] は自分の弟〔ヴァシリコ [I112]〕と協議して、かれ、ミハイル [G41] にキエフを与え、その息子ロスチスラフ [G411] にルチェスクを与えた。ミハイル [G41] はしかしタター人を恐れてキエフへ行こうとしなかった。ダニール [I111] とヴァシリコ [I112] はかれ〔ミハイル [G41]〕に自分たちの地の通行を許可し、かれに多くの小麦、蜂蜜、牡牛、雄羊を充分に

227) ミハイル [G41] はキエフ防衛の援軍要請と同盟関係の強化のために息子ロスチスラフ [G411] とベーラ四世との婚姻同盟を望んだが (上注 219)、ベーラ王は同盟を結ぶつもりはなく、かえってミハイル [G41] 親子をハンガリーから追放した。

228) コンラートがミハイル [G41] にとって「母方の伯叔父」(уї) であるとは次の通り。コンラート一世の姉妹 (カジミェシュ 2 世正義公の娘) マリアは、ミハイル [G41] の父フセヴォロド公 [G4] と結婚していた ([イパーチイ年代記 (7): 245-246 頁] 参照)。つまり、ミハイル [G41] にとってコンラートは母親の兄弟 (母方の伯叔父) なのである。

229) コンラート一世の支配地マゾフシェ公国の首都プウォツク (Płock) もしくはその近くへ向かったと思われる。

230) この「姉」はヤロスラフ [K4] の捕虜になり、その後ダニール [I111] に引き取られて保護されていたミハイルの妃を指している (上注 226 を参照)。

231) このことについては 6749(1241) 年の記事でも再び言及されている (下注 322 参照)。

与えた〔にもかかわらず〕²³²⁾。

【ミハイルはキエフ陥落を知って、ポーランドへ逃げる：1241年1月】

ミハイル [G41] は、【784】キエフが〔タタール人に〕奪取されたことを知ると、自分の息子〔ロスチスラフ [G411]〕とともにポーランドのコンラートのもとに逃げた²³³⁾。タタール人が〔ポーランドに〕接近すると²³⁴⁾、その地にいることにも耐えられず、ヴロツワフの地²³⁵⁾ (земля Воротыславъска) へ向かった。

【ミハイルはヴロツワフからレグニツァへ向かうが道中でドイツ人の襲撃に遭う：1241年2月～3月】

さらに、〔ミハイルは〕セレダ²³⁶⁾ (Середa) という名のドイツ人の場所に到着した。ドイツ人は、〔ミハイルのもとに〕多くの備蓄があることを見て、かれの家来たちを撃ち殺し、多くの備蓄品を取り上げ、かれ〔ミハイル〕の孫娘を殺した。ミハイル [G41] は、〔目的地へ〕到着して

232) ダニールはミハイルがポーランドから帰国して、キエフに向かうときにも、ヴラジミル経由で自分たちの土地 (ヴォルィニ地方) の通過を許し、おそらく同様に補給を与えている (下注 286 参照)。

233) ミハイル [G41] は、コンラート一世の支配地マゾフシェ公国 (首都プウォツク (Plock)) に戻ったのである (上注 229 参照)。

234) キエフ攻略ののち、バトゥ軍の本隊はハンガリーへ向かったが、バトゥの兄オルダとバイダルを司令官とする分遣隊は、ポーランドやチェコからハンガリーへの援軍を阻止するために、1241年1月にポーランドに侵攻し、ルブリン、ザヴィホスト、サンドミエシュのマウォポルスカ地方を攻略した [モンゴル帝国史 2: 162-163 頁]。さらに、一部の分遣隊は3月にサンドミエシュから北西のウエンチツァ (Łęczycza) 方面へ向かっており、ミハイル [G41] 一家はこれを恐れて、より西へと向かったのだろう。

235) 「ヴロツワフの地」(земля Воротыславъска) は、オドラ川中流域シレジア地方の当時ヘンリック 2 世敬虔公 (下注 238 参照) が支配していたヴロツワフ (Wroclaw) を中心とする地域。マゾフシェ公国 (プウォツク) からははるか南西 (250km も離れている) に位置し、ミハイル [G41] 一家はそこならモンゴル軍の勢力が及ばないと考えたのだろう。しかし、1241年4月にはモンゴル勢は「ヴロツワフの地」へ侵攻したため (下注 238 参照)、以下に見るようにかれらはさらなる逃避行を強いられたのである。

236) この「セレダ」(Середa) の場所について、パシュートは、ヴロツワフから西に 30km ほど行った現在の「シロダ・シロンスカ」(Środa Śląska) に同定している [Пашуто 1950: С. 221]。ここは、ヴロツワフからレグニツァへ向かう街道のちょうど中間地点になる。この都市は、1210年に当時のシレジア大公ヘンリック一世顎鬚公 (1163年～1238年) がドイツ人を入植することによって建設され、1235年にはマグデブルグ都市法に基づく諸特権を得て、シレジア地方における塩売買によって栄えたことから、ドイツ人の都市と見なされ、その力が強かった。なお、ロシア語訳はこれをカルパチア山脈西山麓のオルト (Olt) 川最上流の辺地 (現在のルーマニアのハルギタ県の県都ミエルクレア = チュク (Miercurea Ciuc) に相当) に同定しているが、ミハイル [G41] 一家が「ヴロツワフの地」から直線にして 800km という距離を踏破するのはいかにも不自然である。

いなく²³⁷⁾,そこへ行こうとしていたのだが,大いに嘆き悲しんだ。すでにタタル人はヘンリックの息子²³⁸⁾ (Иньдрихович) のところに向けて到来して戦おうとしていたのである。ミハイル [G41] は再びコンラートのもと〔マゾフシェ地方〕に戻った²³⁹⁾。

われらは以前の記述に戻ろう。

6747 [1239] 年

6748 [1240] 年

【バトゥ軍のキエフ城攻囲戦が始まる：1240 年秋～冬】

バトゥは大軍をもってキエフに到来した。その非常に多い軍をもって〔キエフの〕 城市を包囲した。タタル軍は攻囲戦を始め,城市は大いなる困窮に陥った。バトゥは城市の〔河岸の〕 側におり,かれの配下の兵たちが城市を包囲していた。かれ〔バトゥ〕の荷車が軋む音,かれの駱駝の大声で咆哮する声,かれの馬の群れの鳴き声によって,何事も聞き取ることができなかった。ルーシの地は〔敵軍の〕兵士たちに満ちあふれていた。

237) ミハイル [G41] はシレジアの州都ヴロツワフから,おそらくヘンリック 2 世 (次注) に支援を要請するためにレグニツァに向かったが (上注 236), 到着する前 (не дошедшу) に強奪に遭ったのである。

238) 「ヘンリックの息子」 (Иньдрихович; Генрихович) とは, ヴロツワフ公ヘンリック一世顎髭公の息子のヘンリック 2 世敬虔公 (Робоżны) (1196 年頃 ~ 1241 年) のこと。父が亡くなった 1238 年以降ポーランド大公 (シロンスク = ヴロツワフ, クラクフ, ヴィエルコポルスカ南部の公) として大きな権限を振るっていた。モンゴル軍のポーランド侵攻の際には,かれはヨーロッパ諸国に援軍を求めたが本格的な援助は得られず,その間,オルダとバイダルが指揮するモンゴル分遣隊はマウォポルスカ地方を破竹の勢いで西に進軍した。1241 年 2 月にトゥルスコ, 3 月フミエルニクを攻略し, 4 月にはクラクフに侵攻して, またたくまにマウォポルスカ全域がモンゴルの支配下に置かれた。モンゴル軍はさらにシロンスク地方へ進み, オドラ川を下ってヴロツワフに向かった。

ちょうどこのとき,ヘンリック 2 世はモンゴル軍を迎え撃つためにレグニツァに軍を集合させていたのだろう。1241 年 4 月 9 日,レグニツァ近郊で会戦が行われたが (ワールシュタットの戦い),ヘンリックは大敗を喫して戦死した。その後,モンゴル軍はハンガリーのバトゥ軍本隊と合流するために,レグニツァから転進してハンガリーへ向かった。

239) ミハイル [G41] 一家は,災難に遭った上にあてにしていた援助を得ることもできず,ポーランドのマゾフシェのプウォツク (上注 233) もしくはヴィシェゴロド (ピシヨグルト (Wyszogród) (下注 280) へ「戻った」 (воротися назад опять) ののである。

【キエフ攻城に参加したバトゥ軍の王族と軍司令官たちについて】

トヴルール²⁴⁰⁾ (Товрул) という名のタタール人が捕虜として捕まった。かれは、かれら〔籠城軍〕に、じぶんたちの軍勢についてすべて語った。これは〔バトゥ〕の兄弟たちの【785】強者(つわもの)の軍司令官たちで、オルダ²⁴¹⁾ (Урду), バイダル²⁴²⁾ (Байдар), ブリ²⁴³⁾ (Бирюй), コデン²⁴⁴⁾ (Кайдан), ボチュク²⁴⁵⁾ (Бечак), モンケ²⁴⁶⁾ (Меньгу), グユク²⁴⁷⁾ (Кююк) で

240) 「トヴルール」(Товрул) というタタール人捕虜は他の史料で確認できないが、16 世紀中頃成立の『バトゥによるリャザン壊滅の物語』(上注 185) 中の勇士イバーチイ・コロヴラト(Евпатий Коловрат)のエピソードに、かれと決闘して殺された相手としてタタール人「ホストヴルール」(Хостоврул) (他の版では Таврул) という人物が言及されている [БЛДР-5: С. 149, 478]。さらに、『ママイの戦いの話』(Сказание о Мамаевом побоище) の後代の版 (第 4 写本) には Таврул (もしくは Темир-мурза) という名が修道士戦士ペレスヴェートのやはり決闘の相手として登場する [Шамбинога 1907: С. 61]。このことから、Таврул (Товрул) はタタール人の武人の一般的な人名として認識されていたことが想定される。このことによって、ブイリーナの登場人物の名 Азвяк Таврульевич [Сборник Кириши Данилова, № 4] などの中にもこの名の使用が反映しているだろう。なお、Таврул (Товрул) は「鷹」を意味するチュルク語 to‘rul に由来し、実際に広く固有名詞 (人名) に取り入れられているという [Фасмер Т. 4: С. 9]。

241) 「オルダ」(Урду; Урдюй) は、チンギス=ハンの長男ジョチの長男で、バトゥの兄にあたる。ジョチが没するとオルダは一族の本拠地であるイルティシュ川上流域を相続した。また弟のバトゥをジョチ家の当主に推戴するなど、多くの場面でバトゥを支援し、この西征でも従軍してバトゥを補佐している [モンゴル帝国史 2 : 349 頁]。

242) 「バイダル」(Байдар; 『集史』の表記は Bāidā, 中国語史料では貝達爾, 拜達兒など) はチンギス=ハンの次男チャガタイの六男で、西征にはチャガタイ家を代表して甥のブリとともに従軍した。ルーシ征服ののちは、ポーランド遠征の分遣隊の指揮をとった。

243) 「ブリ」(Бирюй; Бури, Būri, 中国語史料では「不里」「不舌里」) は、チャガタイの長男モエトウケンの次男。西征には、チャガタイ家の代表として叔父のバイダル (上注 242) とともに参加した。このときの勝利の宴席で、バトゥを侮辱する言葉を放ったために、皇帝オゴデイに帰還を命じられたという (下注 249 参照)。第 4 代皇帝モンケが即位した後、この宴席での侮辱の報復としてバトゥによって殺害されたとされる [モンゴル帝国史 2 : 289 頁]。

244) 「コデン」(Кайдан, フレーブニコフ系写本は Кадан; 他の表記に Годан, Кутан; Kūtān, 中国語史料表記「闊端太子」) は、皇帝オゴデイの次男で、グユク (下注 247) の弟にあたる。ルーシ征服後のポーランド侵攻では、バイダル (上注 242) とともに軍の指揮を執った。

245) 「ボチュク」(Бечак; Bōčōk, 中国史料表記は「撥綽」) は、チンギス=ハンの四男トルイの第八子。ルーシ征服にはとりわけの力を発揮し、『元朝秘史』によれば、総司令官バトゥと仲違いして帰国したグユクに対して、皇帝オゴデイは「スプタイとボチュクの庇護があったからこそ、ルーシ人との戦いに功績を挙げることができたのだ」と論じたことが記録されている。この遠征の功績により、ボチュクは「勇者」(Партол: 下注 250 参照) の称号を皇帝から受けたという。

246) 「モンケ」(Меньгу; Мунке) は、チンギス=ハンの四男トルイの長男。かれについては上注 214 を参照。

247) 「グユク」(Кююк, フレーブニコフ系写本は Куюкь) (1206 年～1248 年) は、当時の皇帝 (大ハーン) オゴデイの長子で、父の命令によってバトゥの西征に従軍した。オゴデイの死後、1246 年から 1248 年までのあいだ第 3 代の皇帝になった。

ある²⁴⁸⁾。かれ〔グユク〕は、皇帝(кан)の死を知ると帰還し、そして皇帝になった²⁴⁹⁾。かれ〔バトウ〕の親族ではない軍司令官で筆頭の者たちは、勇者²⁵⁰⁾ スプタイ²⁵¹⁾ (Себѣдй) と勇者ボロルタイ²⁵²⁾ (Бурундани) であり、かれらはブルガールの地とスーズダリ〔の地〕を占領した²⁵³⁾。その他に数え切れないほどの軍司令官がおり、わたしたちはここに書き尽くすことはできない。

248) 以上の、捕虜からの聞き取りに基づいて記されたと思われる、「〔バトウ〕兄弟の強者(つわもの)の軍司令官たち」(братья его сильные воеводы)の7人は、すべて西征に参加したチンギス=ハンの血を引く王族たちである(なお、注に示したそれぞれの人物の同定については[Карпов 2011: C.100]も参照)。ラシード『集史』の回暦633年(1236年)の項にキプチャク平原遠征に参加した王族の名が挙げられているが、「トゥルイの子モンケとボチュク、オゴデイの子グユクとカイダン、チャガタイの子〔孫〕ブリとバイダル、オゴデイの弟コルゲン、ジュチの子バトウ、オルダ、シバン、タンゴト」[P ашид-ад-дин T. 2: C. 37][モンゴル帝国史2: 360頁]となっている(ジュヴァイニー『世界征服者の歴史』の並行部分も同様だが「シバン」の名が欠けている[Tизенгаузен T. 2: C. 22][モンゴル帝国史2: 358頁])。このペルシア語史料と比較すると、本年代記の「名簿」はコルゲン、シバン、タンゴトが欠けているだけで、他の7人については見事に一致している。

ちなみに、コルゲンはコロムナ(イケ=オカ川)の戦いで戦死しており([Рашид-ад-дин T. 2: C. 39][モンゴル帝国史2: 364頁])、シバンは1238年秋にクリミア方面へ転戦して[Храпачевский 2005: C. 376]キエフ攻略に参加していないため、「名簿」に記されなかったのではないか。タンゴトについては、遠征に関する史料に言及がほとんどなく、その役割については不明である。

249) 当時の皇帝(大ハーン)オゴデイがカラコルムで没したのは1241年12月11日であり、西征軍がそれを知って帰還を決めたのは1242年3月のことである。しかし、グユクが帰還した直接の理由は、この記事にあるような父の死ではなかった。ラシードウッディーンの『集史』によれば、1239年秋に皇帝オゴデイによってグユクはモンケとともに帰還を命ぜられたが[モンゴル帝国史2: 190, 365頁]、グユクが本国に帰還する途上で病没してしまっただけとしている。『元朝秘史』によると、遠征中の酒宴でブリがジョチ家の王子たちと口論になり、バトウを面罵したところ、グユクもブリに同調したと伝えられ[元朝秘史下: 224 ~ 226頁]、おそらくそれが原因で、父オゴデイの怒りを買って、グユクの帰還が命じられたのだろう。なお、グユクはカラコルムに戻ると、生母の政治工作などによって競争相手を排除し、1246年に父の跡を襲って第3代の皇帝になっている[モンゴル帝国史2: 224 ~ 225頁]。

250) この「勇者」は本年代記では богатурь, багатырь, богатырь と記されているが、モンゴル軍司令官で功を立てたものに皇帝が与えた称号で、中世モンゴル語 ba'atur (バートル)、中国語「拔都」と表記される語に対応している。

251) 「スプタイ」(Себѣдй Богатурь, フレーブニコフ系写本は Бедей; Субедей, 『集史』のペルシア語表記は Sūbdāī bahādur, 中国史料表記は「速別額台」「速不台」「雪不台」)(1176年 ~ 1248年)は、チンギス=ハン時代からの功臣で、バトウの西征の際には、皇帝オゴデイから、軍事能力と長年にわたる従軍経験を評価されて、総司令官バトウの副官に任命された。バトウとともに、1236年 ~ 1240年のブルガール征服、北東ルーシ諸城市の攻略、カフカス諸民族の制圧、キエフ攻撃などの軍事作戦の指揮をとっている。ここでは、敬称的な通称で呼ばれており、とくに優れた司令官と見なされていた。

252) 軍司令官の「勇者ボロルタイ」(Бурундани багатырь)については上注193を参照。

253) このキエフ攻略の前に、スプタイはブルガール遠征における司令官として、ボロルタイはヴォルガ川沿いの城市攻撃の分遣隊長として実際に活躍している(上注251, 193参照)。

【バトゥ軍はキエフを占領する：1240年12月6日】

バトゥは〔キエフの〕城市に向けてリャツキイ門²⁵⁴⁾の傍らに投石機(порокы)を据えた。その場所には叢林が迫っていたからである。投石機は休むことなく昼夜を分かたず撃ち続け、城壁を撃ち破った。住民たちは城壁の残っている部分へと殺到した。そこでは、槍が折れ、盾の欠片が飛び、雲霞の如き石〔矢〕が光を曇らせているのを目撃した。住民たちは打ち負かされ、ドミトル²⁵⁵⁾は負傷を負った。タタール人は城壁を乗り越え、その場所で待ち伏せた。その日の昼と夜のうちに住民は聖なる聖母教会²⁵⁶⁾の周辺に別の防壁を建てた。翌日、〔タタール軍は住民を討つべく〕来襲した。かれらの間に苛烈な戦闘が展開された。人々は教会の中や教会の屋根の上に備蓄品を手に入れた。しかし、教会の壁は重みに耐えられず、人を乗せたまま倒壊した²⁵⁷⁾。こうして、〔敵の〕軍兵によって〔キエフの〕城市は占領された²⁵⁸⁾。ドミトルは負傷したまま連行され、その雄々しい働きのゆえに殺されることはなかった²⁵⁹⁾。

【ダニール公はハンガリーのベーラ四世のもとに行く：1240年秋～冬】

その頃、**[786]**ダニール〔I111〕はハンガリーの王のもとに馬を駆って向かっていた²⁶⁰⁾。かれ〔ダニール〕は異教のタタール人がキエフに到来したことは聞いていなかった。

254) 「リャツキイ門」(врата Лядьския)はキエフ城市ヤロスラフ区の南に設けられ、門の前にはドニエストル川へ降る斜面が近く、そこが叢林になっていた。バトゥ軍にとっては大型の投石機を城内からの攻撃による破壊から守りながら設置できる格好の立地だったのだろう。

255) ダニールの代官でキエフ防衛戦の総司令官(上注221参照)

256) 「聖母教会」は996年にスヴァトスラフ聖公〔06〕によって建てられた十分の一教会(Десятинная церковь)のこと〔ロシア原初年代記：138頁〕。ソフィア聖堂があるヤロスラフ区は城壁が破られてすでに占拠されたため、住民はウラジーミル区における内城のような役割のこの聖堂に立て籠もったのである。

257) この聖堂の倒壊のあと、十分の一聖母教会は再建されることなく、ほぼ400年のあいだ廃墟のまま放置されていた。ようやく17世紀30年代になってペトロ・モヒラの手で廃墟の西南隅に小さな聖堂が建てられたという〔Раппопорт 1982: C. 7〕

258) バトゥ軍のキエフ攻略について、『ラヴレンチイ年代記』は6748(1240)年の項で「この年、タタール人はキエフを占領し、聖ソフィアの聖堂を略奪し、すべての修道院を〔略奪した〕。イコン、尊い十字架、全ての教会の飾りが持ち去られ、すべての人々が貴賤を問わず虐殺された。この災厄は主の降誕の日の前のニコライの日〔12月6日〕に起こった」と簡単に記されている。これによって、キエフ陥落が1240年の12月6日であったことがわかる。

259) 研究史の上では、1237年の記事(上注180)からこの個所までを、『バトゥ襲来の物語』(Повесть о нашествии Батгя)としてまとめ(ただし1238年の記事を除く)て研究がなされている。

260) このダニールのハンガリー行きには、自分の息子のレフ〔S2〕とハンガリー王ベーラ四世の娘との結婚を画策する意図があった。それゆえ、レフを伴って王のもとに赴いたのである。これについては、以下の記事でも繰り返されている(下注272, 273参照)。

【バトゥによるガーリチとヴォルィニ地方諸城市の攻略：1241 年初め～春】

バトゥはキエフの城市を占領すると、かれはダニール [I111] がハンガリーにいることを聞いた。かれ [バトゥ] は自らヴラジミル [=ヴォルィンスキイの城市] へと進軍した。[バトゥは] コロデヤジン²⁶¹⁾ (Колодяжън) の城市へと到来した。かれは 12 台の投石機を据え付けたが、城壁を破ることはできず、[城市の] 住民を言葉巧みに説得しようとした。かれら [住民たち] はかれ [バトゥ] の悪しき企みを聞き入れて、降伏したが、自ら撃ち殺された。

[バトゥは] カメネツ²⁶²⁾ (Каменецъ) とイジャスラヴリ²⁶³⁾ (Изяславль) に到来し、これらの城市を占領した。[バトゥは] クレミヤネツ²⁶⁴⁾ (Кремянъць) とダニーロフ²⁶⁵⁾ (Данилов) の城市を見て、自分はこれを占領することはできないと考え、これら [の城市] から立ち去った。

そして、ヴラジミル²⁶⁶⁾ [=ヴォルィンスキイ] へ到来すると、槍をもって攻略し、[住民を] 容赦なく撃ち殺した。同様のことは、ガーリチの城市にも、他の多くの城市にも起こり、その [城市] の数は無数であった。

【バトゥ軍はハンガリーへ進軍し、モヒの戦いに勝利する：1241 年 4 月】

キエフにおけるダニール配下の千人長ドミトルは、バトゥに対してこう言った。「この地に長く留まるな。あなたはハンガリー人を討つべく進軍する時だ。もし留まっていたら、かの地 [ハンガリー] はあなたにとって強力になる。あなたに対抗するために集結して、自分の土地にあなたを入れることはしないだろう」。このことを [ドミトルが]かれ [バトゥ] に言ったのは、ルー

261) 「コロデヤジン」(Колодяжън) は、スルチ川上流右岸に位置する城砦で、現在のジトミール州コロデヤジニイ村 (Колодяжний) に遺構がある。キエフ公領とヴォルィニ公領の境界に位置している。キエフからだ西へ 200km ほどの距離があり、カメネツ (下注 262) までは西へスルチ川を越えると 5km くらいしか離れていない。

262) スルチ川沿岸の「カメネツ」(Каменецъ) については、上注 123, 224 を参照。

263) 「イジャスラヴリ」(Изяславль) はカメネツからさらに西へ約 62km 進んだ。現在のフメリニツキイ州イジャスラウ (Изяслав) に同定される。ウクライナ語索引は、フメリニツキイ州シェベティイスキイ区のホテルシチェ (Городище) 郊外の遺構の説を紹介しており、その場合だとカメネツからは西へ 42km ほどになる。

264) 「クレミヤネツ」(Кремянъць) は、現在のテルノーピリ州クレメネツ市 (Кременецъ) に相当し、中心地の内城に城市の遺構がある。イジャスラウからだ西にさらに 78km ほど進むことになる。

265) 「ダニーロフ」(Данилов) は、ウクライナ語索引によると、テルノーピリ州シュムスキイ区スティジョク村 (Стіжок) の東北 2km ほどの丘のダニロフカ村 (хутор Даниловка) 遺構に同定されている。クレミヤネツから北東へ約 17km と非常に近い。名称から見て、ダニール [I111] が建設して、かれの名に献じられた城砦だろう。

266) ヴァシリコ [I112] の拠点城市ヴラジミル=ヴォルィンスキイは、クレメネツ (上注 264) からだと北西へ直線距離で 130km ほど進軍したところにある。

シの地が不信心者〔バトゥのこと〕の手で滅びていくのを目の当たりにしたからである²⁶⁷⁾。

バトゥはドミトルの助言を聞き入れて、ハンガリーへと進軍した。ベーラ王(король жь Бъла)とカールマン²⁶⁸⁾(Каломан)は【787】ソロナヤ川²⁶⁹⁾(Солоная)の河畔でかれら〔モンゴル軍〕を迎え撃とうとした。かれらの部隊は戦い²⁷⁰⁾、ハンガリー人は逃げ出した。タタール人はかれらをドナウ川まで追撃した。そして、勝利ののち3年の間、その地〔ハンガリー王国領内〕に布陣していた²⁷¹⁾。

【ダニールはハンガリーへ行き、ベーラ四世との婚姻同盟を図るが失敗する：1240年秋～冬】

それより前に、ダニール公はハンガリー王のところへ駆けつけていた²⁷²⁾。かれ〔王〕と姻戚関係の親愛〔同盟〕を結ぼうとしたのである。しかし、かれら二人の間には親愛はなかった²⁷³⁾。

267) これによると、キエフで捕虜になったドミトルはバトゥに仕え、さらなる遠征に関する助言者になったようである。年代記記者によるこの説明は、バトゥに仕えたドミトルの立場を弁護するためであることは明らかである。

268) このアンドラーシュ二世の息子でベーラ王の弟であるカールマン(Каломан; Kálmán)は、本年代記6719(1211)年でポーランドのレシェク公の娘との政略結婚の相手として言及され、1221年にムスチスラフ[J51]の捕虜となるまでガーリチの公座に就いていた人物のこと〔イバーチイ年代記(10):266頁,注216;280頁,注300]。その後、解放されてハンガリーへ帰国し、1226年～1241年の期間スラヴォニア、クロアチアの公となっていた。かれはこの戦闘で負傷し、まもなく没している。

269) ソロナヤ川(Солоная)は、文字通りではスラブ語で「塩の川」を意味し、現在のスロヴァキアとハンガリーを流れるティサ川の支流でドナウ川水系に属する川を指している。スロヴァキア語でスラナ川(Slaná)、ハンガリー語ではシャイオ川(Sajó)と表記される。

270) この戦闘は歴史的には「モヒの戦い」もしくは「サヨ〔シャイオ〕川の戦い」と呼ばれ、1241年4月12日にシャイオ川河岸南西のモヒ平原(Muhi)で行われた。

271) 「モヒの戦い」の勝利ののち、モンゴル軍は西進してドナウ川河岸のベシュト(現ブダペスト)を攻略した。ベーラ王は追撃から逃れて、ハンガリー王国の最南端のダルマチアの海岸部に避難した。その間、モンゴル軍はハンガリー領の各地に展開して略奪を行い、それは、1242年3月頃に大ハーンのおゴデイの死の報を受けて撤退するまで続いた。ベーラ王が避難先から王都に復帰するのは1242年5月のことで、ハンガリーはほとんど3年の間略奪、破壊、虐殺の舞台となっていた〔モンゴル帝国史2:172～199頁〕。

272) このダニールのハンガリー行きについては、先の記事(上注260)ですでに言及されている。

273) ダニールは自分の息子(おそらくレフ[D2])とベーラ王の娘の婚約を提案したのだろう。この婚姻同盟の提案について、コトリヤールは、共同の軍事力をもってモンゴル軍に対抗することを企図したものと推定している。これに対して、ベーラ王は「バトゥの軍隊とその怒りを恐れて」提案を斥けたとしている〔Koplyar 2005: C. 257〕。これについては、以下の注481でも言及されている。

【ダニールはガーリチへ向かったが、直前でタタールによるガーリチ攻略を知りハンガリーへ戻る：1240 年 12 月末】

〔ダニールは〕王のもとから戻る〔帰路に〕、シネヴォロツコ²⁷⁴⁾ (Синеволодьско) の聖なる聖母修道院へやって来た。翌日に〔ダニールは〕起床すると、神を恐れぬタタール人から逃げて来た多くの民を目撃した²⁷⁵⁾。そして、〔ダニールは〕ハンガリー人のもとへと戻った。かれはルーシの地を通ることができなかった。なぜなら、かれのもとには少数の従士しかいなかったからである。

かれ〔ダニール〕は自分の息子〔レフ [S2]〕をハンガリーに残した。ガーリチ人〔貴族〕の手にかれ〔息子のレフ〕を引き渡さないためであった。かれら〔ガーリチ人貴族〕が忠実でないことを知っており、それゆえかれ〔ダニール〕はかれ〔息子〕を連れて行かなかったのである。

【ダニールはハンガリーからサンドミエシュ、ピリツァ川へ行き家族と再会する：1240 年末～1241 年初め】

〔ダニールは〕ハンガリーからポーランドへ向かい、バルドゥエフ²⁷⁶⁾ (Бардуев) へ行き、そしてスドミール²⁷⁷⁾ (Судомирь) に到着した。そこで、自分の兄弟について、自分の子供たちや公妃について〔消息を〕聞いた。かれらは神を恐れぬタタール人〔の到来を〕目の前にして、ルーシの地を出てポーランド人のもとへ向かったという。〔ダニールは〕急いでかれらを捜そうと

274) 「シネヴォロツコ」(Синеволодьско) は、カルパチア山脈東山麓ストリ川(Стрый)支流のオービル川(Опир)の河口付近の地名でガーリチから西へ 84km ほどの場所に位置する。現在のリヴィウ州スコリウスキイ地区(Сколівський)ヴェルフネ・シニョヴィドネ村(Верхне Синьовидне)に相当する。近郊の黄金丘(Злага гора)にこの聖母修道院の遺構がある。ここからさらに南西に街道を進むと、カルパチア山脈を越えてハンガリー王国領へ抜ける峠(現在のヴェレツキ峠(Верещкий перевал))があり、バトゥ軍もガーリチ領からここを抜けてハンガリー王国へ侵攻したと考えられる [Rady 1991: p. 45]。

275) ダニールはハンガリー王国(おそらく当時の王都セーケシュフェヘルヴァール(Székesfehérvár))からパンノニア平原を横断し、ヴェレツキ峠を越えて帰国のためにガーリチへ向かったがシネヴォロツコ(前注)で、ガーリチはすでにバトゥ軍の手で攻略されていることを知ったのである。

276) 「バルドゥエフ」(Бардуев)は、現在のスロヴァキアプレショフ県の都市バルデヨフ(Bardejov)に相当する。ハンガリーからこの都市を経由して北上し、カルパチア山脈を越えてポーランドのマウオポルスカ地方(サンドミエシュはその中心城市のひとつ)へ入る街道があり、ハンガリーとポーランドを結ぶ交通の要所だった。なお、ここから「スドミール」(現在のサンドミエシュ)(次注)までは北へ約 157km 離れている。

277) 「スドミール」(Судомирь)は、現在のポーランドのマウオポルスカ地方の中心城市のひとつサンドミエシュ(Sandomierz)のこと。城市の古名 Sędomir, は Sędzi-〔裁く〕(ロシア語で судить)と mir〔平和〕(ロシア語で мир)からなっており、本年代記の「スドミール」(Судомир)の名称はそこからきている。この城市は、キエフ陥落直後の 1241 年 1 月にバトゥ軍の襲撃を受けていた。

して、ポルカ (на Полцѣ) と呼ばれる川²⁷⁸⁾ でかれらを発見した。〔ダニールは〕自分たちが再会したことを喜び、ルーシの地が制圧されたこと、多くの城市が異族の手で占領されたことを残念に思った。

【ダニールはさらにマゾフシェ地方に行き、ボレスワフ一世からビシヨグルトを与えられる：1241年2月頃】

ダニールはこう言った。「われらはこの場所に、【788】われらを攻略しようとしている異族の近くにいることは良くない」。かれ〔ダニール〕はコンラートの息子ボレスワフ²⁷⁹⁾の処へ、マゾフシェの地 (земля Омазовьская) へと向かった。そして、ボレスワフ公はかれ〔ダニール〕にヴィシエゴロド²⁸⁰⁾の城市を与えた。かれ〔ダニール〕はここに、ルーシの地から神を恐れぬ徒〔タタール人〕が引き上げたという報を受けるまで滞在した。

【ダニールは帰路にドロギチンに立ち寄るが入城を拒否される：1241年3月中頃～後半】

〔ダニールは〕自分の地へ戻り、ドロギチン (Дорогычин) の城市へやって来て、城内に入ろうとした。ところが、かれに対して「そなたは城内へ入ることができない」と通知された。かれ〔ダニール〕は言った。「これはわれらの城市、われらが父の城市だった。にもかかわらず、そなたたちはわしを入城させないのか」。このように思慮して、〔ダニールは〕その場を立ち去った²⁸¹⁾。

278) 「ポルカ川」(Полка) はそのままの読みでは該当する川はなく、ウクライナ語訳は Полиця と読み替えている。その場合は、ヴィスワ川左岸支流のピリツァ川 (Pilica) に相当する。この河口一帯はサンドミエシュからさらに川を下って北へ135kmはなれており、マウオボルスカ地方とマゾフシェ地方の境界に属している。タタール軍の遠征が及ばなかったところで、ここはおおむね妥当な避難場所だったと考えられる。

279) 「ボレスワフ」(Болеслав) はここが初出。マゾフシェ公ボレスワフ一世 (Bolesław I Mazowiecki) (1208年頃～1248年以降) は、マゾフシェ公コンラートとノヴゴロド＝セヴェルスキイ公スヴァトスラフ [C4323] の娘アガーフィアとの間の息子で、当時マゾフシェ公として首都プウォツク (Płock) に座していたと考えられる。

ダニール [I111] とコンラートは1229年のカリシュ包囲戦の援軍 [イパーチイ年代記 (10) : 313頁, 注469] などのように同盟関係を保持しており、コンラートの息子ボレスワフもこの関係を引き継いでいたと考えられる。その後もこの同盟は、1247年にコンラートが没した後のボレスワフの公位継承の際に有利に働いたと考えられる。

280) 「ヴィシエゴロド」(Вышегород) は、マゾフシェ地方の中心地プウォツク (Płock) からヴィスワ川を40kmほど上った上流にある現在のビシヨグルト (Wyszogród) に相当する。ボレスワフが同盟者であるダニールに対して、かれの一族と同行の郎党のこの地における養いのために、扶持領 (扶持金) として与えたものだろう。

281) このダニールを入城させなかった城市ドロギチンの支配者 (держатель) は、ダニール＝ウラジミルコが代官として派遣したヴォルィニ在地の貴族と推定され、モンゴル人来襲によって公の権力と権威が低下したことを利用して、城市の独占支配を謀ったと考えられる [Котляр 2005: С. 258]。

神はその後²⁸²⁾、この城市〔ドロギチン〕の支配者に報復を行い、この〔城市〕をダニール [I111] の手に引き渡した。〔ダニールは〕〔城市を〕改築し、聖なる聖母の美しい教会を建立して、こう言った。「見よ、わが城市である。最前にわしはこれを槍で攻略したのだ」。

【ダニールはベレスチエとヴラジミルがタタール人によって荒廃しているのを目撃する：1241 年春～夏】

ダニール [I111] は弟〔ヴァシリコ [I112]〕とともにベレスチエ (Берестье) に向かったが、二人は進むことができなかった。おびただしい数の死者の腐臭が平地に〔漂っていた〕からである。ヴラジミル〔・ヴォルィンスキイ〕にも生き残った者は一人もなく、聖なる聖母教会²⁸³⁾ は死体で満ちており、他の教会も死体や死者の体の一部で満ちていた²⁸⁴⁾。

【ミハイル一家はポーランドのマゾフシェ地方を発ってピンスクへ向かう：1241 年 7 月】

その後、ミハイル [G41] は自分の母方の伯叔父〔コンラート〕のもとを去り²⁸⁵⁾、自分の息子 (ロスチスラフ [G411]) を伴ってヴラジミルへと向かった。そして、そこからピンスクへ向けて進んだ²⁸⁶⁾。

【ロスチスラフがホルムのダニールを訪問する：1241 年春】

ロスチスラフ・ウラジーミロヴィチ²⁸⁷⁾ [J221] はダニール [I111] のもとへ **[789]**、ホルムへ

282) 以下のホルム建設にかかわるエピソードについては、6756(1248)年の記事を参照。

283) このヴラジミル=ヴォルィンスキイの石造りの首座教会である聖母教会 (聖母就寝教会) については [イパーチイ年代記 (10): 243 頁, 注 61] を参照。

284) バトゥ軍によるヴラジミル=ヴォルィンスキイの攻略について上の記事では「槍をもって攻略し、〔住民を〕容赦なく撃ち殺した」(上注 266 参照) と簡単にしか描写されていないが、実際には深刻な被害であったことが、ここの記述によってわかる。

285) ミハイル [G41] 父子はコンラートの庇護を受けてその支配地マゾフシェ地方 (プウォツク?) に滞在していた (上注 239 参照) が、コンラートがポーランド大公位を得てクラクフに座を移した (1241 年 7 月) ことを機に、ヴラジミル、ピンスク経由でキエフへ向かい、その公座への復位を目指したのだろう。

286) ミハイル [G41] は先にダニール [I111] に悔悛の意を示して和解していることから (上注 232 参照)、妨害はされないと考えてヴォルィニの地を通過して (トゥリヤ川 (Турья) を遡行?) ピンスクに行き、そこからプリピャチ川 (Примья) の水上交通を利用してキエフへと向かったのだろう (下注 290 参照)。

287) ロスチスラフ [J221] については上注 98 を参照。かれは、父のキエフ公ウラジーミル [J22] の死後 (1239 年 3 月 [ПСРЛ Т. 7, 2001: С. 132])、一族の拠点地であるオブルチに公座を置いていたか。

とやって来た。神はそれ(かれ)を神を恐れぬタタール人から守ったのである²⁸⁸⁾。ロスチスラフ [J221] は、自分はミハイル [G41] と共謀したのではないと、自らの信義を示した。

他方、ミハイル [G41] は、ダニール [I111] とヴァシリコ [I112] の好意に対して、自らの信義を示すことはなかった。〔ミハイルは〕かれ〔ダニール〕の地を通過したが、使者を〔ダニールへ〕遣ることさえなく²⁸⁹⁾、キエフに向かった²⁹⁰⁾。〔そしてミハイル [G41] は〕キエフ郊外の中州で居を構えていた²⁹¹⁾。

かれの息子ロスチスラフ [G411] は、チェルニゴフへ向かった²⁹²⁾。

【レフがハンガリーから帰郷する：1241年4月】

レフ [S2] は、ガーリチ貴族たちとともにハンガリーを出て、ヴォダヴァ²⁹³⁾ (Водава) の自分の父〔ダニール [I111]〕のもとにやって来た。父はかれの到来を喜んだ。

【タタール来襲後のガーリチ地方の貴族たちの専横：1241年】

ガーリチの貴族たちはダニール [I111] を自分たちの公と呼んでいたが、自分たち自身ですべての〔ガーリチの〕地を支配していた。すなわち、ドブロスラフ²⁹⁴⁾ (Доброслав) は〔ガーリチ

288) この部分はいまいで、神が「ロスチスラフ [J221] を守った」と「ホルムを守った」という二つの解釈が可能だが、ベレスチエやヴラジミルの荒廃についての先行の記事と対比すると、後者の可能性が強い。ウクライナ語訳、コトリャール [Котляр 2005: C. 258] も後者の解釈である。なお、城市ホルムは1259年にポロルタイ(上注252)が襲撃したときにも陥落をまぬかれている。

289) ここはイパーチイ写本の読みと英訳の解釈に従った。ロシア語訳、ウクライナ語訳は「使者を遣ってから」と反対の意味に解釈している。

290) ミハイル [G41] はモンゴルの軍勢が去ったのを確認して、再び公座に復帰するためにキエフに向かったのである。このキエフ帰還については、『ノヴゴロド第一年代記(新輯)』6753(1245)年の記事では次のように書かれている。「〔1240年12月のキエフ陥落から〕暫くして、〔タタール人は逃げ出した住民たちを〕諸城市へ住ませ、かれらの数を数え、貢税を課すようになった。これを聞いたミハイル公は異国の地へ離散していた人々を連れ戻し、〔ミハイルも〕自分の地に戻って来た」[НПЛ: C. 298]。

291) キエフの丘の城内は完全に破壊されて、居住することも、布陣をすることさえもできなかったことが分かる。

292) ミハイル [G41] は、バトゥ軍による破壊によって荒廃したチェルニゴフ城市の復興と公支配を息子のロスチスラフ [G411] に託したのである。

293) 「ヴォダヴァ」(Водава; Влодава) は、西ブグ川左岸の城砦で現在のポーランド、ルブリン県の都市ヴォダダワ(Włodawa)に相当する。ベレスチエから60kmほど南へ川を遡ったところにあった。ダニールは、モンゴル軍に破壊されたヴラジミルやガーリチに居を置かず、破壊をまぬかれたホルム(上注288)やヴォダヴァなどのヴォルィニ地方の城砦にしばらく居を置いていた。また、支配地のガーリチへすぐに行かなかったのは、タタール来襲のときにおそらくこの城市の守備を担っていた貴族ドブロスラフ(下注294参照)の勢力が強く、簡単にガーリチへ入城することはできなかったのだろう。

294) 「ドブロスラフ」(Доброслав) はガーリチの有力な貴族の一族の代表。上注85を参照。

の) 公として支配していた。

また、司祭の孫であるステイイチ²⁹⁵⁾ (Судьичь) はすべての地〔の富〕を強奪して、バコタ²⁹⁶⁾ (Бакота) に入り、公の命令なしにすべてのポニジエ地方 (Понизье) を占有した。

〔他方、〕グリゴリーイ・ヴァシーリエヴィチ²⁹⁷⁾ (Григорьи же Васильевичь) はペレムィシェリの山岳地方²⁹⁸⁾ を支配しようと画策していた。その地では大いなる騒乱とかれらによる強奪が起こった。

【ダニールは貴族ポニジエ地方のドブロスラフ党の懲罰に着手する：1241 年】

ダニール [1111] はこれを見て、自分の大膳職ヤコフ²⁹⁹⁾ (Яков) を〔ガーリチ城市へと〕派遣して、ドブロスラフに大きな不満を示してこう言った。「そなたたちの公はこのわしである。そなたたちは、わしの〔名において勝手な〕命令を出してはならない。〔ポニジエの〕土地〔の富〕を強奪してはならない³⁰⁰⁾。ドブロスラフよ、わしはチェルニゴフの貴族たち³⁰¹⁾ を受け入れるように命じてはいない。ガーリチ〔貴族たちに〕に領地を与えるように〔命令したのだ〕³⁰²⁾。

295) 「ステイイチ」(Судьичь) は文字通りだと「裁判官の息子」を意味し、おそらくこの人物の通称だろう。「司祭の孫」(поповъ внукъ) も出自の低さをいう呼び名であり、全体として年代記記者が侮蔑的に書いていることは確かである。かれは、ドブロスラフの家臣である可能性が高い。

296) 「バコタ」(Бакота) は、ガーリチから 175km ほどドニエストル川を下った左岸の城市で、現在のフメリニツキ州カメネツ=ポドリスキイ地区のバコタ村(Бакота)に相当する。ガーリチ領の東南の境界地帯のポニジエ地方に属し、この地方を防衛するために建てられた城砦だった。コトリヤールはその建設を 12 世紀中頃～後半と推定している [Котляр 2005: С. 259]。

297) この「グリゴリーイ・ヴァシーリエヴィチ」は反ダニール派のガーリチ貴族の指導者。上注 112, 171 を参照。

298) 「山岳地方」(горная страна) とはペレムィシェリからカルパチア山脈山麓にいたる地方で、ガーリチ地方にとっては西の境界地帯にあっていた。

299) 「自分の大膳職ヤコフ」(Яков, столник свой) の「大膳職」(стальник) は公に側近の職務で、使者として直接に自分の意向を伝えさせたのである。ヤコフはダニールの側近の貴族で、後の記事でマルコヴィチ(Маркович)とも呼ばれている(注 438)。

300) 上注 296 を参照。ドニエストル川や南ブク川下流域のポニジエ地方はポロヴェツ人支配地の「原野」やキエフ領との境界に接しており、支配が定まらない地域だった。ここは、流民などが定着して交易など独自の生業を営んでいたと思われる。「強奪」(грабиша) はかれらの富を対象としたもの。

301) パシュートによれば、この「チェルニゴフの貴族たち」は、モンゴル軍の来襲で故郷を追われてポニジエ地方まで逃げて来たチェルニゴフ貴族たちではないかとしている [Пашуто 1950: С. 225]。

302) ダニールは、ハンガリー、ポーランドにおける逃避行のときに同行した自派の忠実な貴族たちに、このポニジエ地方の領地を与えることを考えていたということか [Пашуто 1950: С. 225]。

そなたたちはコロムィヤの塩³⁰³⁾ (коломыйская соль) をわしのところに送れ」。かれ〔ドブロスラフ〕は「そのようにいたしましょう」と言った。

その時、ヤコフがかれ〔ドブロスラフ〕のもとにいたとき、**[790]** ラゾリ・ドマジレチ³⁰⁴⁾ (Лазорь Домажирець) とイヴォル・モリボジチ³⁰⁵⁾ (Ивор Молибожичь) の二人がやって来た。この二人の無法者は平民の出身者³⁰⁶⁾ だった。二人は〔ドブロスラフに対して〕地面に届くまで拝礼した³⁰⁷⁾。ヤコフは驚いて、二人が拝礼したのはなぜなのかその理由を訊いた。ドブロスラフは言った。「わしは二人にコロムィヤ (Коломыя) を与えたのだから」。ヤコフはかれ〔ドブロスラフ〕に言った。「そなたには、公の命令なしにこれ〔コロムィヤ〕を二人に与えるなどどうしてできようか。大いなる諸公 (величии князи) だけがこのコロムィヤを戦士たち (оружьники) に与える権限があるのだ³⁰⁸⁾。この二人はヴォチニン³⁰⁹⁾ (Вотьнин) を受ける値さえないではないか」。かれ〔ドブロスラフ〕は冷笑して言った。「そのことについてわしは何を言うことができようか³¹⁰⁾」。

ヤコフは〔ダニールのもとに〕やって来ると、〔復命して〕ダニール公にすべてを話した。ダニー

303) 「コロムィヤ」(Коломыя) はプルート川最上流左岸の城市で、現在のウクライナのイワン・フランコ州コロミア地区の中心都市コロミア (Коломия) に相当する。ガーリチから南に 70km ほどと近い位置にある。ここは、ポーランド、ハンガリー、ビザンティンとガーリチ地方を結ぶ水運・陸上交通による商業路の結節点にあたり、さらに近郊に塩鉱山があったため、ガーリチに富をもたらし繁栄していた。

304) 「ラゾリ・ドマジレチ」(Лазорь Домажирець) は反ダニールのガーリチの有力貴族ドマジル (Домажир) 一族の当主。[イパーチイ年代記 (10) : 278 頁, 注 294] を参照。

305) 「イヴォル・モリボジチ」(Ивор Молибожичь) は反ダニール派ガーリチ貴族のモリゴボヴィチ一族 (上注 7, 19, 113 参照) の出身者。

306) 年代記記者の反逆貴族たちが低い出自 (от племени смердьа) であることの蔑視がここにもあらわれている (上注 295 参照)。

307) この拝礼は臣従関係を確認する儀礼的身振りであり、ヤコフは、これら貴族たちがドブロスラフの臣下のように振る舞っていることを見て驚いているのである。

308) コトリヤールはこの個所に、15 世紀の北東ルーシで本格化した知行地制 (поместное землевладение) がすでにこの時代にも存在したことの主な根拠を見ている [Котляр 2005: С. 259-260]。なお、この個所では領地恵与 (知行地の安堵) についてのこれまでの慣行が二つの点で蔑ろにされていることを指摘し抗議している。第一は、公の支配領内の城市を含む領地の安堵は公 (「大いなる」は強調表現だろう) の権限であるにもかかわらず、貴族のドブロスラフが行ったことについて。第二は、領地 (城市) の恵与は、武功を示した軍司令官 (貴族) (「戦士」(оружейник)) に対してだけになされなければならないにもかかわらず、身分が低く武功のない平民になされたことについてである。

309) 「ヴォチニン」(Вотьнин) はオプラシニャ川 (Опрашина) 河岸に位置する城砦で、コロミヤから北に 50km ほどの付属城市である。現在のイワン・フランコ州コロミヤ地区の都市オチニャ (Отиня) に相当する。豊かなコロミヤに比べると格落ちの領地ということになる。

310) ダニールの名代ヤコフが主張する公の領地恵与の権限など、自分にとっては関係のないとドブロスラフは言っているのである。

ルは悲しみ、自分の父の地〔ガーリチの地〕について神に祈った。この不信心の者ども³¹¹⁾がこの〔父の地を〕支配し所有しようとしていることについて。

【二人のガーリチ貴族ドブロスラフとグリゴリーイは諍いを起こし、仲裁のためダニールのもとに出頭する。ダニールは二人を捕縛する：1241 年夏～秋】

暫く時を経て、ドブロスラフは、グリゴリーイ³¹²⁾を誹謗する使者を〔ダニールのもとに〕派遣してこう言った。「この者はあなたに対して不忠です」。〔ドブロスラフ〕は、かれ〔グリゴリーイ〕に敵対しながら、自分自身ではすべての〔ガーリチの〕地を支配しようと目論んでいた。

かれらは自分たちの間で諍いを起こし、〔ドブロスラフは〕大いなる傲慢をもって、〔ダニールのもとに仲裁をもとめて〕やって来た。ドブロスラフは下着一枚の姿で、傲慢に馬に乗り続け、地面を見ることはなく、〔他方〕ガーリチ人〔貴族たち〕はかれの鎧の傍らを走って来た³¹³⁾。

ダニール [II11] とヴァシリコ [II12] はかれ〔ドブロスラフ〕の傲慢さを見て、大いなる敵意をかれ〔ドブロスラフ〕に対して向けた。ドブロスラフとグリゴリーイの二人が自分〔ダニール〕を陥れようとしているのだから。ダニール [II11] はかれらの言葉を〔仲裁の場で〕聴いた。〔その言葉が〕奸智に満ちていること、かれらが自分〔ダニール〕の意志に従って従軍しようとしないこと、かれ〔ダニール〕の支配権〔支配地〕を他人に **[791]** 引き渡そうとしていることを〔聴き知った〕。かれ〔ダニール〕は弟〔ヴァシリコ〕と相談して、しかたなしに、かれらの無法を目にして、かれらを捕縛するよう命令した。

311) 「不信心の者ども」(нечестивии)の語はこれまではタタール人に対して用いられており、キリスト教に敵対する者という含意がある。ここでは、ガーリチの支配を狙っている貴族たちを指していることから、かれらに対する非常に強い非難の意味あいがかもっていることがわかる。

312) この「グリゴリーイ」はペレムィシェリ地方を実質的に支配していた有力貴族グリゴリーイ・ヴァシエヴィチを指している。上注 297 参照。

313) 「下着一枚の姿」はドブロスラフが、公であるダニールへの敬意を示していない傲慢さを示す修辭的表現。「馬に乗って」「地面を見ず」「ガーリチ人〔貴族〕はかれの鎧のそばを走る」は、あたかもドブロスラフが他の貴族たちを従えて自らガーリチの公であるかのように振る舞っていることを示す修辭的な表現(上注 307 も参照)。

6749〔1241〕年

【チェルニゴフ公ロスチスラフがポニジエのパコタへ遠征を仕掛けるが、ダニールの代官キリルによって撃退される：1241年秋～冬】

ロスチスラフ³¹⁴⁾ [G411] はボロホフの諸公³¹⁵⁾、生き残ったガーリチ人³¹⁶⁾を集めて、パコタ³¹⁷⁾ (Бако́та) に〔遠征に〕到来した。印章役だったキリル³¹⁸⁾ は、そのときパコタにいた。かれ〔キリル〕は、不信心の貴族たちによる強奪を調査し³¹⁹⁾、この地を鎮めるために、ダニール公 [I111] とヴァシリコ [I112] によってここに派遣されていたのである。

かれら〔ロスチスラフたち〕は〔パコタの〕城門のところで戦い、兵を引いてから、かれ〔キリル〕を言葉で誑かそうとした。キリルはかれ〔ロスチスラフ〕に答えて言った。「そなたは、自分の母方の二人の叔父たち³²⁰⁾〔ダニール [I111] とヴァシリコ [I112]〕の徳行に対してこのように報おうというのか。ハンガリー王がそなたとそなたの父〔ミハイル [G41]〕を〔その〕地から追い出したときのことを憶えていないのか³²¹⁾。わしの二人の主人であり、そなたにとっての母方の叔父である方〔ダニール [I111] とヴァシリコ [I112]〕は、そなたの父を大いなる榮譽をもって支援し、そなたにキエフを約束し、ルチェスクを与え、そなたの母であり自分たちの

314) ロスチスラフ [G411] はチェルニゴフに帰還しており（上注 292）、タタール人來襲による荒廢でガーリチ支配の基盤を弱体化させていたダニールに対して、以下のように軍勢を組織してチェルニゴフから遠征を行い、ガーリチ支配権の奪還を狙ったのである（[Котляр 2005: С. 260]）。

315) 「ボロホフの諸公」（Болоховские князи）については、上注 57 を参照。ガーリチ＝ヴォルィニ地方の東の境界領域を支配地としていたかれらは、ダニールによるガーリチ地方支配の復興には敵対する立場にあった。

316) 「生き残ったガーリチ人たち」（останокъ галичанъ）とは、タタール人の來襲の被害をまぬかれたガーリチ地方諸城市に居住していた貴族たちを指している。

317) ポニジエ地方の城市パコタについては上注 296 を参照。当時は、ガーリチ公ダニールにとって、ポニジエ地方支配の拠点とされていたのだろう。

318) 「キリル」（Кирилл）はガーリチ貴族で、印章役（печатник）という、文書の真正性を保証する印章（печать）を管理する要職をつとめる官吏で、ダニール [I111] とヴァシリコ [I112] に近い人物。この時は軍司令官として派遣されている。かれは、1242 年末頃にはキエフ府主教に任命されており（下注 362）、1246 年にニカイアの総主教によって叙聖されている（下注 483）。その後、アレクサンドル・ネフスキイ [K42] に仕え、1251 年～1264 年はヴラジミル〔クリャジマ河畔の〕に身を置いたが、60 年代後半から 70 年代には再びキエフに戻っている（[Котляр 2005: С. 261]）。なお、D・リハチョフは、このキリルこそが本年代記の中心的な編纂者だと推定している。[БЛДР-5: С. 502-503]

319) 上注 295 にあるように司祭の孫ステイイチの、パコタを初めとするポニジエ地方の強奪について調査するために派遣されたのである。

320) ミハイル [G41] の妃（すなわちロスチスラフ [G411] の母親）がダニールとヴァシリコの姉であることについては、上注 226 を参照。

321) ミハイル [G41] がハンガリーから追い出されたことについては、上注 227 を参照。

姉である御方をヤロスラフ [K4] の手から身請けして、そなたの父 [ミハイル [G41]] に引き渡したのではないか³²²⁾。他にも多くの賢明な言葉をかれ [ミハイル [G41]] に対して語ったではないか」。

〔キリルは〕自分の言葉が聞き入れられないのを見て取ると、歩兵³²³⁾ を率いてかれ [ロスチスラフ] を討つべく [バコタの城内から] 出撃した。かれ [ロスチスラフ] はこれを見て、軍勢を引き始めた。こうしてかれ [キリル] は知恵と固い [意志] でバコタを守り抜いた。ロスチスラフ [G411] はドニエプル川を渡って [チェルニゴフへと] 撤退した。

【ダニールはロスチスラフの力を削ぐためにポロホフ地方の諸城市を襲撃する：1241 年秋～冬】

ダニール [I111] は、ロスチスラフ [G411] がポロホフの諸公とともにバコタに到来したことを聞くと、すぐさま **【792】**、かれ [ロスチスラフ] を討つべく急行し、かれら [ポロホフ諸公] の [以下のポロホフ地方の] 諸城市に火をかけ、かれらの土塁を掘り返して破壊した。

ヴァシリコ公 [I112] は残って、リトアニア人からの当地の防衛にあたり³²⁴⁾、自分の軍兵を兄 [ダニール [I111]] の指揮下に派遣した。

ダニール [I111] は多くの捕虜を捕獲して帰還し、かれら [ポロホフ諸公] の諸城市³²⁵⁾ を占領した。すなわちそれは、デレヴィチ³²⁶⁾ (Деревичь)、ゲービン³²⁷⁾ (Губин)、コブード³²⁸⁾ (Кобуд)、クーディン³²⁹⁾ (Кудин)、ゴロデツ³³⁰⁾ (Городѣць)、ボジェスキ³³¹⁾ (Божьскый)、デヤディ

322) ここの述べられた一連の出来事については、上注 226 及び 232 を参照。

323) この「歩兵」(пѣшъци) はバコタ城砦周辺からの募兵を指すだろう。ダニールの従士ではないキリルにとって、騎兵よりも歩兵が主体になっていることがわかる。

324) ヴァシリコ [I112] は、ダニールのホルムからの遠征には参加せず、ホルムもしくは周辺の城市に残って、リトアニア人の襲来に備えたということ。

325) 以下に列挙されている 7 つの城砦は、すべてポロホフの地に位置する城砦で、最初の 3 つがヴォルィニ地方との境界のスルチ川水系に位置し、残りの 4 つは南ブグ川の上流域の城砦である。

326) 「デレヴィチ」(Деревичь) は、スルチ川左岸支流現在のデレヴィチカ川 (Деревичка) に上流左岸に位置する城砦で、ポロホフ地方とヴォルィニ地方の境界にあった。現在のジトミル州ヴェリキ・デレヴィチ村 (Великі Деревичі) に相当する。

327) 「ゲービン」(Губин) は、スルーチ川上流右岸の城砦で、現在も同名のフメリニツキ州ゲービン村に相当する。前のデレヴィチからは南南西へ 24km ほど離れている。

328) 「コブード」(Кобуд) はやはりスルーチ川上流の城砦で、前のゲービンから 16km ほど川を遡った現在のスタロコスチャンチニウ市 (Старокостянтинів) 周辺にあったと推定されている。

329) 「クーディン」(Кудин) は、南ブグ川上流左岸の城砦で、現在のクディンカ村 (Кудинка) に相当し、前のコブードから南東に 46km ほどの場所にある。

330) 「ゴロデツ」(Городѣць) はズガルカ川 (Згарка) 最上流左岸の城砦と同定されている。

331) 「ボジェスキ」(Божьскый) は南ブグ川上流左岸の城砦で、現在のスースリヴィツィ村 (Суслівці) に推定されている。その場合、前のクーディンから 7km ほど川を遡った近くにある。

コフ³³²⁾ (Дядьков) である。

ダニール [I111] の印章役キリルは3千の歩兵と3百の騎兵を率いて³³³⁾ [バコタの城市から] 到来すると、かれら [ダニール軍] がデヤディコフの城市を攻略するのを支援した。

そこから、[ダニール軍は] ボロホフの地 [の住民] を捕獲して焼いた。タタール人はかれらに手を下さず、自分たちのために小麦や黍を耕作させていたのである³³⁴⁾。ダニール [I111] はかれら [ボロホフの地の住民] がタタール人に大きな期待をかけていることに対して、大いなる敵意を持っていた。

【ダニールがかつてボレスワフの介入に対してボロホフ諸公を援助したことについての物語：1236年頃】

[ダニールは] マゾフシェ公ボレスワフ³³⁵⁾ の手から、かれら [ボロホフ] の諸公を助け出してやったことがあった。その時、ボレスワフは言った。「なぜかれら [ボロホフの諸公] はわしの地に入ったのか、わしはかれらに許可していないのに」。また [ボレスワフは] こう言った。「かれらはそなた [ダニール] の軍兵ではなく、独立した諸公である」。そして、[ボレスワフ] はかれらから略奪することを望んだ。かれらは [ボレスワフに] 虜囚となることを約束させられた。かれらが [ダニールに援助を] 依頼して、ダニール [I111] とヴァシリコ [I112] はかれらのためにかれ³³⁶⁾ [ボレスワフ] と戦うことも辞さなかった。ヴァシリコ [I112] は馬を駆させて、かれ [ボレスワフ] を説得し、かれに頼み、かれら [ボロホフの諸公] を解放させるためにかれ [ボレスワフ] に多くの贈物を与えたのである³³⁷⁾。

332) 「デヤディコフ」(Дядьков) は、ズガルカ川 (Згарка) 最上流左岸の現在のディヤキツイ村 (Дяківці) に同定されている。

333) キリルの率いる軍編成については上注 323 を参照。

334) この記事によって、タタール人の来襲のときに、ボロホフ諸公は抵抗せずに服従し、黍や麦の補給を約束することによって破壊、殺戮、略奪をまぬかれたことが分かる。

335) 「マゾフシェ公ボレスワフ」(Болеслав, князь Мазовський) については上注 279 を参照。

336) イパーチイ写本は「かれらと」(с ними) となっているが、ここではフレーブニコフ系写本の読みを採用した。

337) この段落に述べられたエピソードはこれまでの記事には記されていない。あえて推測すれば、1236年頃のカメネツの攻防戦で捕虜として捕らえられたボロホフの諸公が、ヴラジミルに連行されており(上注 131)、その直後の、ダニール=ヴァシリコとガーリチ公ミハイル=マゾフシェ公コンラートの同盟軍との戦いにおいては(上注 134～138 参照)、ヴァシリコの同盟軍としておそらくチェルヴェンで戦ったのではないかと(上注 137)。その際、ボロホフ諸公はコンラート軍(息子ボレスワフはその司令官)によって捕虜となったが、ヴァシリコが身代金を支払う(「徳行」добродѣяние) などして身請けを行い、最終的にはボロホフの地への帰郷を許したという経緯があったのではないかと推測される。

【神がボロホフ諸公の忘恩に対して懲罰を与えたこと：1241 年秋～冬】

しかし、かれら〔ボロホフ諸公〕はその〔ダニールとヴァシリコが行った〕徳行 (добродѣяние) のことを憶えていなかった。神はかれら〔ボロホフ諸公〕に報いを与え **【793】**、かれらの城市には〔タタール人の〕捕獲を免れた者たちもひとりも残ることはなかった。こうして〔ダニール〕は神の慈しみとともに弟〔ヴァシリコ〕のもとに帰還し、勝利を得たのである。

【チェルニゴフ公ロスチスラフはガーリチ貴族と結んでガーリチ遠征を行い、城市を占領する：1242 年初め】

ロスチスラフ [G411] はしかし自分の悪行を止めようとはしなかった。かれは軍兵を集め、不忠のヴワディスワフ³³⁸⁾ を引き入れると、ガーリチ討伐の遠征に出発した。かれらはベチェラ・ドマジリヤ³³⁹⁾ (Печера Домамири) に到来して、ヴワディスワフはかれら〔その住民〕を欺して、〔住民たちは〕ロスチスラフ [G411] に降伏した。かれは〔この城市を〕掠奪すると、ガーリチへと進軍し、〔ヴワディスワフはロスチスラフに〕「ガーリチはあなたのものである」と言った。そして、〔ヴワディスワフ〕自身はかれ〔ロスチスラフ〕から千人長の地位を得た³⁴⁰⁾。

【ダニールとヴァシリコはロスチスラフの遠征軍に対抗するためにガーリチを出撃し、ロスチスラフを追撃するが、タタール人到来の報を受けて中止する：1242 年春】

ダニール [I111] とヴァシリコ [I112] はこのことを聞いて、軍兵を集め、すぐさまかれら〔ロスチスラフの遠征軍〕を討つべく出陣した。かれ〔ロスチスラフ〕はこれに耐えられず、ガーリチ近郊を逃げ出して、シチェコトフ³⁴¹⁾ (Щекотов) に逃れた。かれ〔ロスチスラフ〕とともにガーリチ主教アルテミイ³⁴²⁾ (Артемій) および他のガーリチ人〔貴族〕も〔ガーリチから〕逃げ出した。ダニール [I111] とヴァシリコ [I112] が、かれ〔ロスチスラフ〕を追っていたとき、かれ〔ダニール〕のもとに報告がもたらされた。タタール人がハンガリーの地を出て、ガーリチの地へ向かって

338) 「不忠の」(неверный) ガーリチ貴族ヴワディスワフ・ユリエヴィチについては、上注 28, 51 を参照。

339) 「ベチェラ・ドマジリヤ」(Печера Домамиря; Домажиря) はガーリチの有力貴族ドマジル (Домажир) 一族 (上注 304 参照) の所領の城市。現在のリヴィウから北西へ 15km ほど離れたリヴィウ州ドマジル村 (Домажир) に比定されている。

340) 原文は「かれ〔ロスチスラフ〕から千人を受け入れた」、つまり千人の指揮を任されたということで、千人長 (тысяцкий) としての軍司令官の地位を得たということの意味する。

341) 「シチェコトフ」(Щекотов) は、ガーリチからは北北西方向に 122km ほど離れ、現在のリヴィウからは北北西へ約 26km 離れた、ガーリチ領のヴォルィニ地方との境界に近い。現在のリヴィウ州ジョウキウ (Жовківський) 地区フリンスク村 (Глинськ) 近郊のシチェコチンの森 (ліс Щекотин) の遺構に同定されている。

342) ガーリチにおける反ダニール派だった主教アルテミイについては上注 170 を参照。

いるとのことだった。[ロスチスラフは]この報告のおかげで救われた。かれの貴族数人が捕まっただけだった³⁴³⁾。

【ダニールはドニエストル中流域の城市の支配を固める：1242年春】

そのときダニール [I111] は〔支配〕地を治めるために、馬を駆けてバコタ (Бако́та) とカリウス³⁴⁴⁾ (Калиус) に進軍した。ヴァシリコ [I112] はヴラジミル〔・ヴォルィンスキイ〕に駆けて行った³⁴⁵⁾。

【ダニールは高官に命じて遠征軍を派遣してペレムィシェリを制圧。ロスチスラフ配下の勢力を排除する：1242年】

ダニール [I111] は、ロスチスラフ [G411] の手で〔ペレムィシェリに〕派遣されていた³⁴⁶⁾ リャザン人コンスタンチン³⁴⁷⁾ [H44] (Костянти́н) を討伐するために、自分の宮廷官〔アンドレイ〕〔が指揮する遠征隊を〕ペレムィシェリに派遣した。ペレムィシェリの主教はかれ〔ロスチスラフ〕と共謀して〔ダニールから〕離反していた³⁴⁸⁾。

コンスタンチンは、〔宮廷官〕アンドレイ³⁴⁹⁾ が自分を討伐する【794】ため進軍しているこ

343) ロスチスラフ自身はそこからハンガリーへ逃れて、国王ベーラ四世の庇護を得ることになる（下注 356）。

344) 「カリウス」(Калиус) は、ドニエストル川右岸支流カリユス川 (Калюс) 河口に築かれた城砦。バコタから東へ 28km ほど移動した場所にある。

345) ヴァシリコ [I112] がヴラジミルへ急いだ理由は書かれていないが、リトアニア人に対する防備を急いだのだろう。

346) ガーリチ地方の西の境界地帯にあるペレムィシェリは、1238年に当時父のミハイル [G41] によって城市ガーリチへ支配のために派遣されていたロスチスラフ [G411] の手によって、ダニール [I11] から取り上げられ、ロスチスラフ [G411] の支配下に入っていた(上注 163)。それ以来、タタール人の来襲によってミハイルとロスチスラフ父子がハンガリー、ポーランド、ルーシ諸国を遍歴していたときにも、ペレムィシェリにはロスチスラフは自分の代官(次注)を派遣して、この城市の支配権を確保していたと考えられる。ガーリチ城市の支配権を確立したダニール [I11] は、いよいよガーリチ地方の諸城市の中で自分の支配に服さない勢力(貴族たちなど)の掃討に着手し始めたのである。

347) 「リャザン人コンスタンチン」(Костянти́н рязаньский) はチェルニゴフ公ロスチスラフ [G411] に勤務するためにリャザンから移った勤務公と考えられ、リャザン公ウラジミル・グレーボヴィチ(在位 1194-1207年)の息子コンスタンチン・ウラジミロヴィチ [H44] と推定されてる [Котляр 2005: С. 263]。この時には、ロスチスラフがコンスタンチンを代官として派遣したのだろう [Пашуто 1950: С. 139]。

348) 「ペレムィシェリの主教」の名は不明だが、ガーリチ主教アルテミイ(上注 342)と同じ反ダニールの政治的指向を持っていた(影響下にあった)ことは疑いない。ここでも、正教会の勢力はダニールのガーリチ支配に好意的ではなかったことがわかる。上注 170 を参照。

349) 宮廷官(дворечный, дворский)の「アンドレイ」(Андрѣй)は、ダニールの宮廷の家政を管理・運営する高官で、領内の御領地の管理にもあたり、行政のみならず軍事的な権限も有していた(上注 170 も参照)。

とを聞くと、夜半に逃げ出した³⁵⁰⁾。アンドレイはかれ〔コンスタンチン〕を見つけ出すことはできなかったが、主教を見つけ出した。〔アンドレイは〕かれ〔主教〕の傲慢な家来ども〔の財産〕を強奪し、その海狸皮の矢筒を引き裂き、狼と貂の皮の鍔（しころ）が引き裂かれた³⁵¹⁾。

かの名高い歌人ミトゥーサ³⁵²⁾ (Митуса) は、その昔にその傲慢さゆえにダニール公に仕えることを望まなかったのだが、〔かれも〕〈引き裂かれ〉て、縄で縛られて連行された。これは、「お前の愚かさの家は崩れ、海狸、狼、貂は食い尽くされる」³⁵³⁾ という格言集にあるが如きであった。こうして格言に語られている通りになった。

6750 [1242] 年

何も起こらなかった³⁵⁴⁾。

350) コンスタンチンはペレムィシェリからハンガリーへ逃げ、自分の息子エフスタフイイ (Остафий; Евстафий) をリトアニアに派遣している [Пашуто 1950: С. 149]。

351) ここで引き裂かれた (раздраны) ものとして、「矢筒」(тулы) と「鍔 (しころ)」(прибличье) がある。「矢筒」は円筒の筒で矢が容易に落ちないように皮で覆ったもの、「鍔 (しころ)」は兜 (шлем) につなげて顔、首、肩を保護する革製の覆い。いずれも武器であることから、この「家来たちは」(слуги) は主教に仕える一種の衛兵ではなかったか。

352) 「名高い歌人ミトゥーサ」(словутный пѣвец Митуса) の名は、ドミートリイ (Дмитрий) に発する民間的なあだ名。かれもまた、傲慢 (гордость) であるとされているところから、文脈から判断して「〔ペレムィシェリ主教の〕傲慢な家来たち」(слуги его <...> гордые) の一人であり、主教の館で捕まったのだろう。

353) ロシア語訳の注はこの句を『シラ書 (集会の書)』21:21 (邦訳 21:17) の句「愚か者にとって知恵は崩れた家のように役立つない」(якоже дом разорен, тако буюго премудрость) からの引用句としている [БЛДР-5: С. 503] (ウクライナ語訳は『箴言』15:25 を典拠としている)。ただ、この句の前半はこの引用句の改変としても、後半は、「引き裂かれ」た海狸 (бобр), 狼 (волк), 貂 (борсук; язьвіц) に懸けて格言が創り直されている。『マタイ伝』23:14 の「呪われよ (...) お前たちは、やもめたちの家を食い倒し」(горе вам, <...> яко снесаете дома вдовиц,) を、実際の事物と組み合わせてパラフレーズしたものか。いずれにせよ、傲慢な者を批判する内容のリズムと韻を持った創作格言になっており、年代記成立の時代にガーリチの宮廷内などで知られていたのだろう。

全体としては、ミトゥーサの傲慢さ (гордость) と愚かさ (буесть) は同義語として、知恵 (мудрость) の対義語として捉えられており、それに対する神罰はあらかじめ予言されていると言いたいのではないか。

354) この記事は年代も含めフレーブニコフ系の写本にはない。

6751〔1243〕年

【ロスチスラフはタタール人に追われてハンガリーに逃げる：1242年】

タタール人はロスチスラフ [G411] を追撃して松林³⁵⁵⁾ へ追いやった。かれ〔ロスチスラフ〕はハンガリー人のもとへ逃げた³⁵⁶⁾。

【ロスチスラフはベーラ四世の王女と結婚する：1244年】

再び³⁵⁷⁾〔の機会に〕ハンガリー王〔ベーラ四世〕はかれ〔ロスチスラフ〕に自分の娘を娶らせた³⁵⁸⁾。

【ホルムのダニールはタタール人到来を恐れて、ヴァシリコのもとに逃げる：1242年末】

ダニール [I111] がホルムにいたとき、かれのもとにハンガリー人のところからかれのポロヴェツ人が逃げて来た。〔アクタイ³⁵⁹⁾ (Актай) という名で、かれは「バトウはハンガリーから戻って来ました」と言った〕。「かれ〔バトウ〕はマンマン (Маньмань) とバライ (Балай) という二人の勇者³⁶⁰⁾ に遠征を命じてあなたを討とうとしています」。ダニール [I111] はホルムの城門を閉じさせ、自分は弟のヴァシリコ [I112] のもと〔ヴラジミル〕に³⁶¹⁾ 駆けて行った。そのとき、府主教キリル³⁶²⁾ を連れて行った。

355) 「松林」は原文では борк で普通名詞としては「松林」の意。ロシア語訳、英訳は地名と解釈しているが同定される場所を示していない。

356) この記事は、6749(1241)年の項に書かれている、ロスチスラフの遠征軍がガーリチ郊外からシチェコトフへ逃げたところ（上注 341 参照）からの繋がりである。その後、ロスチスラフはガーリチ方面へ進軍して来たタタール勢に追われて、ハンガリーへ逃げたことになる（上注 343）。

357) 1240年にミハイル [G41] は息子のロスチスラフ [G411] とハンガリー王女（今回と同じ王女アンナだろう）との結婚を望んだが、そのときはベーラ四世から断られ、ハンガリーを追放されている（上注 227 参照）。「再び」というのはそのときのことを踏まえている。

358) ハンガリー、チェコ、ポーランドの史料によると、この王女の名はアンナ (Anna) で、モンゴルの来襲から復帰したベーラ四世が、ガーリチ地方への利権拡大を意図して、1243年にロスチスラフ [G411] との結婚が成立した（[Грушевский 2005: С. 325]）。

359) この「アクタイ」(Актай) には「かれ (ダニール) の」の定語が付されていることから、ダニールに仕える従士であったと推定される。ダニール配下の従士の中にポロヴェツ人部隊が含まれていたことは以下の記事からもうかがうことができる（下注 426 参照）。

360) このマンマン (Маньмань) とバライ (Балай) は「勇者」(богатырь)（上注 250）の称号で呼ばれていることから、有力な軍司令官と考えられるが詳細は不明。

361) このときヴァシリコ [I112] は、ヴラジミル・ヴォルインスキイにいた（上注 345）。

362) これは、上注 318 の印章役のキリルのことで、当時、かれは府主教に任命されたばかりの時期だろう。任に就いていればキエフにいるはずであり、これは後代の称号をこの時点に当てはめたのだろう。

タートル人は掠奪しながらヴォロダヴァ³⁶³⁾ (Володава) まで到達し、湖沼地帯³⁶⁴⁾ で多くの悪事を行った³⁶⁵⁾。

{6752 [1244] 年

何も起こらなかった³⁶⁶⁾。【795】

{6753 [1245] 年}

【ミハイル公はハンガリーへ行くが息子ロスチスラフと決裂してチェルニゴフへ戻る: 1244 年】

ミハイル [G41] は、〔ハンガリー〕王が自分の息子〔ロスチスラフ [G411]〕に娘を娶らせたことを聞いて、ハンガリーへと逃げた³⁶⁷⁾。ハンガリー王とかれ〔ミハイル〕の息子ロスチスラフ [G411] は、かれ〔ミハイル〕に然るべき敬意を示さなかった。かれ〔ミハイル〕は息子に怒りを発して、チェルニゴフに戻った。

363) 「ヴォロダヴァ」(Володава; Влодава) は現在の西ブグ川右岸ブウォダウカ川 (Włodawka) 河口の都市ブウォダバ (Włodawa) に相当し、ホルム (ヘウム (Chełm)) からは近く、この都市から北へ 45km ほど西ブグ川を下ったところにある。

364) 「湖沼地帯」(по озерам) とは、ウクライナ語訳注によれば、ブウォダバ (Włodawa) の東に接する現在のプレメツケ湖 (Пулемецьке) およびスヴィチャズケ湖 (Світязьке) を指すとしている。ただし、バトゥの別働隊が西から来てブウォダバに到達したとするなら、西側のブウォダウカ川 (Włodawka) 上流からルブリン方面に広がる湖沼地帯を指している可能性もある。

365) この記事によれば、1241 年にヴラジミル・ヴォルィンスキイを經由してルブリンに攻め込み、ポーランド (マウォポルスカ) の諸城市を征服して行ったバトゥの分遣隊の一部は、二人の軍司令官 (上注 360) の指揮の下に、この遠征路を引き返してルブリンからヴラジミル方面へ向かったことになる。

366) この記事も年代も含めフレーブニコフ系の写本にはない。

367) ミハイルは、ポーランドからもどって、1241 年春頃にバトゥ軍によって荒廃させられた城市キエフの公座についていた (上注 290 参照) が、1243 年、スーズダリ公ヤロスラフ [K4] はバトゥのもとに伺候して、直接に「ヤロスラフ [K4] よ、そなたはルーシの部族においてすべての諸公の中で最年長になるがよい」(『ラヴレンチイ年代記』 6751 (1243) 年の項 [ПСРЛ Т. 1, 1997: С. 470]) との言葉を受けている。これは、最高位 (最年長) の都市であるキエフ公の地位を安堵されたと解釈できることから、ミハイル [G41] はヤロスラフを恐れてキエフを「逃げ出した」(бъже) のだろう。そして、その亡命先として、丁度、ハンガリー王女と結婚したばかりの息子ロスチスラフ [G411] のいるハンガリーを選んだのではないか ([Пашуто 1950: С. 62] も参照)。

【ミハイル公は貴族フョードルとともにバトゥの手で処刑される：1246年9月20日³⁶⁸⁾】

〔ミハイル〕はそこからバトゥのもとに速駆けして行き、かれに自分の領地を求めた³⁶⁹⁾。バトゥは言った。「われらの父祖の掟に対して拝礼するがよい」。ミハイル[G41]は答えた。「もし、神がわれらの罪ゆえに、われらとわれらの権力をそなたたちの手に引き渡したのなら、われらはそなたに対して拝礼し、そなたに対して敬意を表するだろう。しかし、そなたの父祖の掟に対して、そなたの神を信心せぬ〔掟〕に対してわれらは拝礼しない³⁷⁰⁾」。バトゥはあたかも猛獣のように激怒して、〔ミハイルを〕処刑するよう命じた。〔ミハイルは〕無法で不信心のプチヴリ人ドマン³⁷¹⁾ (Доман Путивлец)の手で処刑された。かれとともに、かれの貴族フョードル

368) ミハイルの死の年代については『ラヴレンチイ年代記』の年記(下注372)を参照した。なお、『ノヴゴロド第一年代記(新輯)』の記事の冒頭では6753(1245)年の9月18日に〔НПЛ: C.298〕、末尾では9月20日〔НПЛ: C.303〕になっている。

369) 文脈から見ると、ミハイルは息子のロスチスラフと決裂してチェルニゴフに戻ってからすぐにバトゥのもとに行ったようだが、ミハイルの死は1246年と推定されており(前注参照)、かなり後のことである。つまり、この段落の公の死にかかわる記事は前後の記事の時系列とは無関係に、ここに挿入されたと思われる。

ミハイルが出かけた場所は、バトゥが西征の後に帰還して、ヴォルガ川下流域河口近くに根拠地(首都)建設したバトゥ＝サライ(旧サライ)である。その伺候の理由としては、自分の「領地を求めた」(прося волости своею)とあることから、チェルニゴフ地方の支配を安堵する勅書(ヤルルィク)を求めたということだろう。あるいは、すでにヤロスラフ[K4]に対して安堵されていたキエフを(上注367)、自分の手に戻すことを狙って請願した可能性もある〔Котляр 2005: C.274〕も参照)。なお、『ノヴゴロド第一年代記(新輯)』のミハイルの死についての長い物語では「ミハイルは当時チェルニゴフにいたが、かれは多くの者〔諸公〕がこの世の栄光に惑わされているのを見ていた。神はかれ〔ミハイル〕に対して恩寵と聖霊の賜物を送り、皇帝バトゥの前に行って、キリスト教徒たちを惑わしているかれを非難することを決意させた」〔НПЛ: C.298-299〕と、伺候した理由についてキリスト教的解釈を行っている。

370) このミハイルの言葉は、プラノ・カルピニがその旅行記に書きとめている次のミハイルの死のエピソードとよく合致している。「ロシアの大公のひとりミハイル(Michael)がやって来てバトゥを訪問したとき、タタル人はかれに、まず火と火とあいだを通らせ、そのあとで、南面してチングス＝カン〔の像〕に礼拝するように言いました。ミカエルは、バトゥとその従者たち(servis)とは喜んで礼拝するが、すでに死んだ者の像には頭を下げない、何とならば、キリスト教信者がそんなことをするのは許されぬことだからだと答えました」〔カルピニ、ルブルク1965:12-13頁〕〔Menestò 1989: p.237〕。

371) この「ドマン」(Доман)については、『ノヴゴロド第一年代記(新輯)』の並行記事では、「かつてキリスト教徒だったが信仰を棄て、異教徒となり、また法を破って異教徒となった男で名をドマンという人物によって」ミハイル公が斬首されたとしている〔НПЛ: C.302〕。しかしここでは、かれがプチヴリ人だという記述はない。

(Федор) も処刑された³⁷²⁾。かれ〔フョードル〕は殉教者のごとく苦しみを受け、神キリストから冠を受けたのである³⁷³⁾。

【ダニールとヴァシリコはボレスワフ五世討伐の遠征を行う：1243/1244 年冬】

ダニール [I111] と弟のヴァシリコ [I112] はポーランドの公ボレスワフ³⁷⁴⁾〔五世〕と戦争を始め、4本の街道を通してポーランドの地へ進攻した。ダニール [I111] 自身はルブリン³⁷⁵⁾ (Люблин) 付近で掠奪を行った。ヴァシリコ [I112] は、イズヴォリャ川³⁷⁶⁾ (Изволя) とラダ川³⁷⁷⁾ (Лада) を通って、ベロエ³⁷⁸⁾ (Бълое) 付近で〔掠奪を行った〕。〔公の〕宮廷官アンドレイ³⁷⁹⁾ は【796】サ

372) このミハイル公 [G41] と家臣の貴族フョードルの死については、1260年代にミハイル公の娘マリアの嫁ぎ先であるロストフで、かれらへの崇敬が始まったときに讃美のための文書が書かれ、その後写本によって広まった。その文献は現在は「チェルニゴフ公ミハイルとその貴族フョードルのオルダ国における殺害の物語」(Сказание об убиении в Орде князя Михаила Черниговского и его боярина Феодора) と名付けられている [БЛДР-5: С. 156-163, 479]。本年代記のこの個所は、ある程度は教会での尊崇に発する資料の影響を受けているのだろう。

なお、『ラヴレンチイ年代記』の6754 (1246)年の記事にはミハイルの死の様子が次のように描かれている。「同じ年、チェルニゴフ公ミハイル [G41] は自分の孫ボリス [K111:N] とともにタートル人のもとに出かけた。かれらが〔バトゥの〕宿営地にいたとき、バトゥはミハイル公 [G41] に使者を遣って、火とかれらの偶像に拝礼することをかれに命じた。ミハイル公 [G41] はかれらの命令に従わなかった。しかして、かれ〔バトゥ〕を非難し、かれのでくの坊の偶像を〔非難した〕こうして、かれ〔ミハイルは〕不信心者どもの手で無慈悲に殺され、生命の終わりを受け入れた。9月20日殉教者聖エフスタフィの日のことだった。バトゥはボリス公 [K111:N] を自分の息子サルタクのもとへ行かせた。サルタクはボリス公 [K111:N] に敬意を表して帰郷させた」[ПСРЛ Т. 1, 1997: С. 471]。

373) ミハイルがバトゥの手で処刑された政治的な理由については、[延広 1997] が主な諸説の検討を行っている。

374) この「ポーランドの公」(князь Ляльский) と称されている「ボレスワフ」(Болеслав) は、ボレスワフ五世純潔公 (Bolesław Wstydlivy) のこと。かれは、マウオボルスカ地方のサンドミェシュ公 (在位：1232年～1279年) とクラクフ公 (在位：1243年～1279年) として、隣接するヴォルィニ地方と紛争を抱えていた。

375) 現在のポーランドの都市ルブリン (Lublin) に相当する。当時のダニールの拠点城市ホルム (現在のヘウム) から西へ64kmほどしか離れていない。

376) 「イズヴォリャ川」(Изволя) は、ブコヴァ川 (Букова) の右岸支流の川と推定される。現在のポーランドのラコヴァ川 (Rakowa) か。

377) 「ラダ川」(Лада) は、現在のポーランドルブリン県のワダ村 (Łada) に相当する。ホルムからだと南西へ73kmほど移動することになる。

378) 「ベロエ」(Бълое) は、現在のルブリン県ヤノウ・リュベルスキイ (Janów Lubelski) 区のビャラ村 (Biała) に相当する。

379) 「宮廷官アンドレイ」については上注 349 を参照。

ン川(Сян)を通った。ヴィシャタ³⁸⁰⁾(Вышата)はポドゴリエ地方³⁸¹⁾を掠奪した。〔遠征軍は〕捕虜を獲得し帰還した³⁸²⁾。

【ダニールとヴァシリコはルブリン地方を掠奪して帰還する：1244年冬～春】

そして、再び〔ダニールとヴァシリコは〕出陣して、ルブリンの地を掠奪し、ヴィスワ川とサン川まで到達した。そして、ザヴィフホスト³⁸³⁾(Завихвост)に到達すると、ヴァシリコ公〔I112〕はヴィスワ川を越えて矢を放ったが、〔その軍は〕川を渡河することはできなかった。なぜなら、増水していたからである。〔ヴァシリコ軍は〕多くの捕虜を獲って帰還した。

【ダニールとヴァシリコはルブリンの城市を攻撃して降伏させる：1244年春】

暫く時を経て、ポーランド人³⁸⁴⁾が到来し、アンドレエフ³⁸⁵⁾(Андрѣев)付近で掠奪を行った。ダニール公〔I111〕はこのことを聞くと、弟のヴァシリコ〔I112〕とともに自分たちの軍勢を集合させて、投石機³⁸⁶⁾や城市を攻略するための武器を準備するよう命じた。そして二人はルブリンの城市へと到来した。二人は全ての軍兵と投石機とともに、ホルムから一日で〔ルブリンの〕城下へと到達した³⁸⁷⁾。投石機と矢³⁸⁸⁾が放たれ、かれら〔ルブリンの住民の〕城内に雨の如く注がれた。ポーランド人はルーシの強力な軍隊が襲ってくるのを知って、憐れみを乞い始めた。ダニール〔I111〕とヴァシリコ〔I112〕は協議をして、かれら〔住民〕に提案を行って言っ

380) 「ヴィシャタ」(Вышата)はダニール陣営の軍司令官と考えられる。

381) ドニエストル川、サン川最上流域のカルパチア山脈山麓一帯の地方名であるポドゴリエ地方については上注140も参照。

382) このダニールとヴァシリコによる組織的なマウォポルスカ地方(ルブリン方面)への掠奪遠征は、パシュートによれば、同盟を結んでいたマゾフシェ公コンラート一世との連携によってなされたもので、コンラートも同時にクラクフを攻撃していた〔Пашуто 1950: C. 230〕。

383) 「ザヴィフホスト」(Завихвост)は、現在のポーランドのザヴィホスト(Zawichost)に相当し、サンドミエシュからヴィスワ川を15kmほど北へ下ったところにある。ここはダニールの父親ロマンが戦没した場所でもある〔イバーチイ年代記(10):231頁,注5]参照)。

384) この「ポーランド人」はボレスワフ五世(上注374)陣営に属するポーランド人軍兵のこと。

385) 「アンドレエフ」(Андрѣев)は、西ブグ川支流プロダフカ川(Włodawka)上流域にある城砦で、現在のヘウム県のアンドジェウフ村(Andrzejów)に相当する。プロダフカ川河口のプロダフカ城市から南西に30kmほど離れたところにある。ルブリンからも、東へ48kmほどと近く、ポーランドとヴォルィニ地方の境界に位置していた。

386) この「投石機」(праша)はカタパルト式の据え置き武器のこと。

387) ホルムからルブリンは直線距離で64kmほどで、急行すれば一日行程で距離である(上注375参照)。ただし、投石機や弩砲を輸送したとすれば、分解して運んだにしてもかなりの人や馬を動員して急いだことになる。

388) この「矢」(стрѣлы)は攻城用の強力な弩砲から放たれる矢のこと。

た。「自分たちの公に力を貸してはならない」。かれら〔住民〕はそうすることを約束した。ダニール [I111] は **[797]** 弟〔ヴァシリコ〕とともに、この地方を掠奪して、帰還した。

【ロスチスラフはペレムィシェリ地方を攻撃、ダニール陣営が反撃する：1244 年初頭 (?)】

ロスチスラフ [G411] はハンガリー人に懇願して、岳父〔ベーラ四世〕に多くの依頼をなし、どうかペレムィシェリを討伐してくれるようにと説いた³⁸⁹⁾。かれ〔ロスチスラフ〕は〔ペレムィシェリ地方に〕入ると、多くの平民の歩兵を集め、かれらをペレムィシェリへと振り向けた。

ダニール [I111] とヴァシリコ [I112] はこのことを聞いて、まだ若年のレフ³⁹⁰⁾ [S2] を派遣した。かれ〔レフ〕は若年のため戦闘はさせず、自分の従兄弟の息子フセヴォロド³⁹¹⁾ [I1212]、および〔宮廷官〕アンドレイ、〔大膳職〕ヤコフ³⁹²⁾ と他の貴族たちを派遣した。かれらはセチニツァ川³⁹³⁾ (рѣка Сѣчница) で戦い、ロスチスラフ [G411] を制圧した。かれら〔ダニールとヴァシリコ〕のところには多くの歩兵がいたからである。アンドレイとヤコフも戦い、激しく斬り合った。フセヴォロド [I121] はかれらを助けようとせず、自分の馬をかえして逃走した。かれらは激しく戦ったが、損傷なしでその場を去った。

ダニール [I111] のもとに報告がもたらされたとき、〔ダニールは〕多くの軍兵、歩兵を集め

389) このロスチスラフ [G411] の岳父ベーラ四世への懇願の書き出しは、6757(1249)年の項の冒頭の文言と類似している（下注 415 参照）。また以下の記述も両方の場合ともども、ペレムィシェリへの討伐遠征を願ひ、実際に河岸で戦闘が行われ、ダニールの息子レフ（下注 390）が参加し、ダニール陣営は同じ貴族（アンドレイとヤコフ）が指揮を執り、フセヴォロド [I1212] が参加している。チェレブニンは以上のように類似点がきわめて多いことから、この記事に描かれた遠征と戦いは、のちの記事のプロットを使ってここに挿入した架空のものと推察しており [Черепнин 1940: С. 250]、コトリヤールもこれに賛同して、この挿入は、6757(1249)年の項の「ヤロスラフ郊外の戦い」（1245年8月）および最終的なチェルニゴフ諸公に対する勝利への過程となるダニール陣営の様々な遠征と戦闘（対ポーランド、リトアニア、ヤトヴァグ人との戦いも含めて）の叙述の一つとして、年代記記者が加えたのではないかと考えている [Котляр 2005: С. 264]。

390) ダニール [I111] の息子レフ [S2] は、1225年～1229年の間の生年と推定され [Домбровский 2015: С. 367]、この時は15～19歳だった。

391) ダニール [I111] の従兄弟（ベルズ公アレクサンドル・フセヴォロドヴィチ [I121]）の息子に当たる（原文の сыновец は従兄弟やその息子の意味を含む）のフセヴォロド・アレクサンドロヴィチ [I1212] は本年代記ではここが初出。この同定は、並行的な 6757(1249)年の項の記事（下注 433）に「フセヴォロド・アレクサンドロヴィチ」と父称が記されていることによっており、ほとんどの研究者によって支持されている。このとき、かれは20代前半と推定されるが、父親の公座ベルズを引き継いで、ガーリチとヴォルィニを支配していたダニール＝ヴァシリコ兄弟に仕える立場にあったのだろう（[Домбровский 2015: С. 410] を参照）。

392) この「ヤコフ」（Яков）はダニールの側近の大膳職（стольник）を務めていた人物（上注 299 参照）。

393) 「セチニツァ川」（рѣка Сѣчница）は、現在のシチニャ川（Січня）（サン川支流のヴィシニャ川（Вишня）左岸支流）に相当し、その河口はペレムィシェリから東へ27kmほどの場所に位置している。

て出陣し、〔自分の〕土地〔ペレムィシェリ地方〕から〔敵を〕追い出して、それからハンガリーへと進軍した³⁹⁴⁾。

6754〔1246〕年

【リトアニア人が襲来し、ダニールとヴァシリコはピンスク近郊で撃退する：1244年初頭】

{その年}リトアニア人が到来して、ルシコフ族の〔リトアニア侯〕アイシヴノ³⁹⁵⁾ (Аишьвно Рушькович) はベレソプニツァ³⁹⁶⁾ 近郊で掠奪を行った。

ダニール [I111] とヴァシリコ [I112] はピンスク (Пинескъ) へ馬を走らせ、かれ〔アイシヴノ〕が到来することを警告した。かれら〔二人は〕ピンスクの平地 (поле) を進み、ピンスク城市から出陣して³⁹⁷⁾、かれら〔リトアニア人〕に対抗した。

異教徒どもは**[798]**その心に傲慢さを持っていたため、かれら〔ダニールとヴァシリコの軍兵〕を追いかけてきた。〔しかし、〕この者たち〔リトアニア人〕は耐えることができず逃げ出した。かれらは逃げるときに落馬した³⁹⁸⁾。

ヴァシリコ [I112] は最初に戦利品の分け前を³⁹⁹⁾ 最初に兄〔ダニール [I111]〕のところに連れて来た。かれ〔アイシヴノ〕の軍兵はすべて撃ち殺された。〔アイシヴノ・〕ルシコヴィチ自身は危うく逃げのびた。ダニール [I111] とヴァシリコ [I112] の勝利でピンスクの城市では大いなる喜びに湧いた。自分たちに対する神の助けを得て、多くの捕虜を獲得したからである。

394) かりに、直前のペレムィシェリ地方での戦いの叙述が架空の戦闘の挿入であるにしても（上注 389）、この段落のダニールの出陣は史料として信頼できるだろう [Котляр 2005: С. 264-265]。

395) 「ルシコフ族のアイシヴノ」(Аишьвно Рушькович) については、6723(1215)年の項に、リトアニア諸侯がダニールのもとに使節団を派遣したという記事があり、その中にルシコフ一族(Рушковичи)の諸侯の名が記されている（[イパーチイ年代記(10): 277頁, 注 286]）。アイシヴノもまた、その一族の当時の首長の一人だろう。

396) 「ベレソプニツァ」(Пересопница) は、ゴルィニ川中流左岸支流のストゥーブラ川(Стубла)右岸に位置する城市。現在はウクライナの都市リヴネ(Рівне)に近い村に遺構がある。ヴォルィニ地方の中程に位置している。おそらく、リトアニア人は、略奪の帰路にピンスク地方を經由することが想定されたのだろう。

397) ダニールとヴァシリコは、ピンスクに駐留しているかれらの家来たちと地元から徴集した軍兵を組織して、リトアニア人を迎え撃とうとしたということ。

398) リトアニア人の「落馬」(падаху с коний) についてことさら書いているのは、次注の戦利品が馬と捕虜という価値あるものであることを示すためだろう。

399) この「戦利品の分け前」は原文では сагагт という語が使われており、チュルク語系の語彙と推定される。実態としては、捕虜(плен)として捕まえたリトアニア人と馬のことである。

6755 [1247] 年

【リトアニア侯レングヴェニスによるヴォルィニ地方北西境界への掠奪遠征とダニール=ヴァシニコによる撃退：1244 年～ 1245 年初め⁴⁰⁰⁾】

リトアニア人がレコヴニ⁴⁰¹⁾ (Лековнии) [レングヴェニス] [とともに] メルニツァ⁴⁰²⁾ (Мѣлница) 付近で掠奪を行い、多数の捕虜を捕獲した。ダニール [I111] とヴァシニコ [I112] はこれを追撃し、かれら [リトアニア人] をピンスクまで追った。ピンスクではミハイル⁴⁰³⁾ [B321322] がかれら [リトアニア人] に [追撃についての] 報をもたらししていた。かれら [リトアニア人] は森の中に鹿砦を築いて守りを固めた。ピンスクにいるミハイルが報をもたらししていたからである⁴⁰⁴⁾。

ダニール [I111] とヴァシニコ [I112] はかれら [リトアニア人] を追い、宮廷官ヤコフ⁴⁰⁵⁾ は自分の軍兵を [引き連れて進軍した]。リトアニア人はミハイル [B321233] を信頼せず、自分たちの陣営から出た。神の慈悲によって、リトアニア人は逃げ出し、撃ち殺され、すべてが捕虜に獲られた。レングヴェニス⁴⁰⁶⁾ (Лонькогвени) 自身は傷を負って逃れた。ダニール [I111] と

400) このリトアニア人の掠奪遠征の時期は不明だが、コトリヤールは 1244 年もしくは 1245 年初めと推定している [Котляр 2005: С. 265]。

401) 「レコヴニ」(Лековнии) の語はフレーブニコフ写本にはなく、文脈から見て不自然であり後代の写字生(編集者)がすぐ下にある(下注 406) の人名をここに不正確に挿入した可能性が高い。この人物については下注 406 を参照。なお、コトリヤールは「レコヴニ」をメルニツァ(次注) 近くの掠奪を行った地名と推定している [Котляр 2005: С. 265]。

402) 「メルニツァ」(Мѣлница) は、ストホド川(Стоход)の中流域左岸に建てられた城砦で、現在のヴォルィニ州コヴェリ区のメリニツヤ村(Мельница)に相当する。ここから、南西へ 65km ほど進むとヴラジミルに到達する近さである。ウクライナ語訳索引は、これを西ブグ河岸の現在のポーランドのポドラシェ県ミェルニク村(Mielnik)に同定しているが、方向的に整合性がない。

403) このミハイル・ロスチスラヴィチ [B321322] は、当時ダニール=ヴァシニコに対立していたピンスク公(同定については、[Літопис руський, 1989: С. 402, Прим. 2] も参照)。6736(1228)年の記事には、ピンスク公でかれの父親ロスチスラフ [B32132] についての言及がある ([イパーチイ年代記 (10) : 308 頁, 注 445] 参照)。この記事のとき息子のミハイルはダニール [I111] の手で捕虜になっており、それ以来、敵対的な関係は続いており、それがミハイルのリトアニア人への通報という支援につながっていたと思われる。ここでは、ミハイルとリトアニアの侯(部族)が一定の同盟関係を持っていたことが推定される。なお、ミハイル自身については 6768(1260)年の記事でも再度言及されている。

404) 編集者の不注意により、ミハイルの通報についてまったく同じ文言が繰り返されている。

405) この「宮廷官ヤコフ」(Дворський Яковъ) は「大膳職」(стольник)として先に言及されていたダニールの側近ヤコフと同一人物(上注 299)。側近貴族ということで、「宮廷官」と「大膳職」には実質的な違いはなかったということだろう。なお、ヤコフの名前の表記はイパーチイ写本では乱れているため、フレーブニコフ系写本の読みを採用した。

406) 「レングヴェニス」(Лонькогвени) は、リトアニアの侯(князь)の一人で、当時最も力を持っていたミンダウガス(上注 153 参照)の甥とも推定されている。

ヴァシリコ [I112]のもとに〔これについて〕報告がもたらされた。ピンスクの城市では大いなる喜びに湧いた⁴⁰⁷⁾。

【ダニールとヴァシリコの公座の配置について】

ダニール [I111]のチェルニゴフとの戦争より前に【799】、かれ〔ダニール〕はガーリチ〔の公座に〕座しており、ヴァシリコ [I112]はヴラジミル〔の公座に座していた〕⁴⁰⁸⁾。

6756〔1248〕年

【ヤトヴァグ人のホルム周辺地への掠奪遠征をヴァシリコが撃退する：1234年秋頃】

ヤトヴァグ人がオホジェ⁴⁰⁹⁾ (Охоже)とブーソヴノ⁴¹⁰⁾ (Бусовено)付近で掠奪を行い、そのすべての地方で〔住民を〕捕虜に獲った。ダニール [I111]はまだホルム (Холм)に〔公座を〕据えていなかった⁴¹¹⁾。

ヴァシリコ [I112]がヴラジミルから、かれら〔ヤトヴァグ人〕を追撃して、かれを追い詰め、かれ〔ヴァシリコ〕は三日目にはヴラジミルからドロギチン⁴¹²⁾ (Дорогычин)に到達した。かれら〔ヤトヴァグ人〕はドロギチンの城門で戦い、ヴァシリコはこれを討つべくやって来た。

407) このピンスク城内での「喜び」の文章は、直前のリトアニア侯アイシヴノとの戦いの描写の文章とまったく同じであり、年代記記者による前の文章の再使用だろう。

408) この「ダニールのチェルニゴフとの戦争」(война Данилова черниговское)を次に叙述されるロスチスラフ [G411]との戦いと解釈すれば、当時ダニールとヴァシリコはガーリチとヴォルィニ地方において公支配を固めていたことを確認した文言になる(コトリャールの説 [Котляр 2005: С. 265])。他方、1235年の前半にダニール [I111]がキエフ公ヴラジミル [J22]と同盟して、ミハイル公 [G41]支配下のチェルニゴフ地方へ遠征を行った「戦争」と解することも可能であり(上注99及び106参照)。この頃は確かにダニールは第4次のガーリチ公座復位を果たした直後であり、ヴァシリコもヴラジミルの公座を維持していた(ウクライナ語訳の説)。ただし、前後の記事と時系列的な整合性を欠いていることから、この説はやや不自然である。

409) 「オホジェ」(Охоже)はポーランド、ヘウム県ヘウム郡オホジャ村(Ochoża)に相当する。ホルムから北西に10kmほどしか離れていない。

410) 「ブーソヴノ」(Бусовено)は現在のヘウム県ブスブノ村(Busówno)に相当し、前のオホジャ村からさらに北西へ8kmほど行ったところにある。二つともポーランド(マウォポルスカ地方)との境界に位置している。

411) ホルム(現在のポーランド、ヘウム県の都市ヘウム)は1236～1238年にダニールの手で城市が建設された(上注165参照)。

412) 西ブグ川河岸の城砦でベレスチエより北西15kmほどに位置する「ドロギチン」については、上注151を参照。この時点(1234年頃)では、ヤトヴァグ人が築いた城砦があったということだろう。先のブーソヴノからドロギチンまでは北北西方向に133kmほど離れており、ヴァシリコ [I112]にとっては長路の追撃戦だったことがわかる。

かれら〔ヤトヴァグ人〕はこれに対抗すべく馬の方向を変えたが、神の助けを得たヴァシリコの正面攻撃に耐えきれず、この悪しき異教徒どもは逃げ出した。かれらに対する斬り合いは苛烈で、かれらを数露里（ヴェルスタ）も追撃した。〔ヤトヴァグ人〕の 40 人の諸侯が殺され、他の多くが殺され、かれらは回復することができなかった。

〔ヴァシリコは〕ガーリチの兄〔ダニール〕のもとに使者を派遣した。この日、ガーリチ城市では大いなる喜びに湧いた。

【ヴァシリコへの称賛、かれのヤトヴァグ人討伐について】

ヴァシリコ [I111] は中背で、知恵は豊かで勇敢だった。かれは何度も異教徒⁴¹³⁾に勝利したこともあれば、何度も二人〔ダニールとヴァシリコ〕で異教徒討伐の遠征をしたこともあった。たとえば、スコモンド (Скомонд) とボルーチ (Боруть) という邪悪な戦士が〔ダニールとヴァシリコの〕遠征軍に殺されたことがあった。スコモンドは有名な呪術師であり魔術師で、歩行しているのに獣のように素早く駆けた。【800】〔かれは〕ピンスクの地や他の地方を掠奪した。この不信心者は殺されて、その首は木杭に突き刺された⁴¹⁴⁾。

また別の時にも、神の慈しみにより異教徒どもが撃ち殺されたが、これについてはあまりに数が多いのでわれらは書かないことにしよう。

6757 [1249] 年

【ロスチスラフはポーランドの援軍を得て、ダニール討伐遠征を準備する：1245 年夏頃】

ロスチスラフ [G411] は自分の岳父である〔ハンガリー〕王に依頼をなし、ダニール討伐のために軍兵を派遣するよう説いた⁴¹⁵⁾。かれ〔ロスチスラフ〕は軍兵を得ると、ポーランドの地〔クラクフ〕へ行った。そして、レシエクの妃⁴¹⁶⁾〔グジミスワヴァ〕に懇願し、かれ〔ロスチスラフ〕に同行するポーランド人を派遣するようかの女を説得した。こうして、〔グジミスワヴァ〕は

413) ここの異教徒 (поганые) は文脈から見てヤトヴァグ人を指している。

414) コトリヤールによれば、この段落のヴァシリコ [I112] の性格と、かれによるヤトヴァグ侯スコモンド討伐のエピソードはその描写や文体からみて、当時の宮廷（従士たちの間の）フォークロアを典拠に書かれたものだろう [Котляр 2005: С. 266]。

415) この文言の最使用については上注 389 を参照。

416) 「レシエクの妃」(Льстькова) のサンドミェシュ公レシエク一世 (白公) は 1227 年に没していたが、その妃グジミスワヴァ (Grzymisława) は当時健在で、息子のボレスワフ五世 (純潔公) の執政として、クラクフの王宮で権限を振るっていた。ロスチスラフ [G411] の妃でハンガリー王ベーラ四世の娘アンナの姉キング (クニクンデ) は、1238 年にボレスワフ五世に嫁いでおり、ロスチスラフはそのような姻戚関係をたどって援軍を要請したと思われる。

かれ〔ロスチスラフ〕とともに〔ポーランド人〕軍兵を派遣した。

【ポーランド貴族たちもロスチスラフを援助する】

その頃〔ポーランドの〕有力貴族たちと他のポーランド人たちは、この地を逃れて、ダニールのところに〔陣営に〕移ろうとしていた。〔しかし、かれらは〕ロスチスラフ[G411]が進軍していることを知って、レシエクの息子〔ボレスワフ五世〕とその母〔グジミスワヴァ〕の慈愛を受けることを望んだのである。そして、かれらはかれ〔ロスチスラフ〕のところに援軍として行った。〔しかし、〕しばらくの後に、かれらの中の長老のフロリアン⁴¹⁷⁾(Творьянь)がダニール[I111]によって捕獲されることになった⁴¹⁸⁾。

【ロスチスラフはヤロスラフおよびペレムィシェリへの遠征を開始する：1245年夏頃】

ロスチスラフ[G411]はヤロスラフ⁴¹⁹⁾(Ярославль)の城市を討つべく急行した。この城市にはダニール[I111]とヴァシリコ[I112]の家来たち、多くの貴族たちがいた。

〔ロスチスラフは〕この城市が堅固であることを見ると、軍をペレムィシェリへと転じた。〔ロスチスラフは〕この地の者を多数徴集し、攻撃や防衛の武器、攻城機を集め、自分の部隊を編成して、再びヤロスラヴリへ向けて進軍した。ペレムィシェリの城市はそのままにしておいた。かれ〔ロスチスラフ〕は「かりにわしはこの城市〔ペレムィシェリ〕を攻略できなくとも、これを支配することはできるだろう」と考えていた。【801】

【ロスチスラフは城市ヤロスラフの包囲攻撃を準備する：1245年夏頃】

かれ〔ロスチスラフ〕は〔ヤロスラフの〕城下に布陣し、攻城機を据え付けて、城市の攻略に取りかかった。城市の前で大規模な戦闘が起こった。かれ〔ロスチスラフ〕は自分の〔軍兵に〕身を隠すよう命じた。攻城機が据え付けられる間に、住民からの攻撃で軍兵が負傷しないようにするためである。

かれ〔ロスチスラフ〕は自分の軍兵を前に自慢してこう言った。「もしわしがダニール[I111]

417) 「フロリアン」(Творьянь)については、レシエク配下のポーランド人軍司令官(貴族)の「フロリアン・ヴォイツェホヴィチ」(Творьян Вгтихович; Флорин Войцехович)として、6729(1221)年の項に言及されている([イパーチイ年代記(10):282頁,注318])。

418) パシュートによれば、フロリアンは最初はボレスワフ五世の反ガーリチ(ダニール)の政策に反対していたが、結局ボレスワフ公と和解した。そして、自らガーリチ地方への遠征に参加したが、皮肉にも捕虜になったという[Пашуто 1950: С. 231]。

419) 城市「ヤロスラフ」(Ярослав, Ярославль)は12世紀後半に当時のガーリチ公ヤロスラフ・ウラジーミロヴィチ八智公が、ガーリチ地方サン川(Сан)左岸に建てた城市で、かれの名が冠されている。現在のヤロスラウ市(Jarosław)に相当する。

とヴァシリコ [I112] のいる場所を知っていたら、わしはかれらを討つべく馬で進軍しただろう。10 人の戦士がいさえすれば、かれらを討伐するために馬を飛ばしただろう」。かれはこう言いながら、〔ヤロスラフ〕 城市の前で騎馬試合を行った。そしてかれ〔ロスチスラフ〕 はヴォルシ⁴²⁰⁾ (Воршь) と〔試合で〕 戦った。〔そのとき〕 かれ〔ロスチスラフ〕 の馬が倒れ、かれは肩を脱臼した。これはかれにとって好いしるし〔前兆〕ではなかった。

【ダニールとヴァシリコは、ポーランドのコンラートとリトアニアのミンダウガスに援軍を要請して、自らはヤロスラフへの遠征に出発する：1245 年夏】

ダニール [I111] とヴァシリコ [I112] はかれ〔ロスチスラフ〕 来襲の報を聞いて、神に祈り、軍兵を集め始めた。そして、コンラートのところに使者を派遣してこう言った⁴²¹⁾。「そなたのために、ポーランド人がわれらを討ちにやってくる。われらがそなたの支援者だという〔理由で〕⁴²²⁾」。かれ〔コンラート〕は援軍を派遣した。

ダニール [I111] とヴァシリコ [I112] はリトアニアに使者を派遣して援軍を要請した。ミンダウガスから援軍が派遣されてきた⁴²³⁾。二人〔ダニールとヴァシリコ〕が〔防衛の準備を〕し終わらないうちに、神からかれらにその助けがもたらされたのである。まことに、勝ちを得るのは人間の助けによるのではなく、神によるのである。

二人〔ダニールとヴァシリコ〕はまもなく軍兵を集めて、遠征に出発した。二人は〔宮廷官〕アンドレイ⁴²⁴⁾を〔城市ヤロスラフへ偵察のために〕派遣した。かれが城市を見聞して、かれら〔包囲されている城市ヤロスラフの籠城防衛軍〕の救出は近いとして、〔防衛軍の士気を〕強めるためだった。

〔本隊の〕軍兵がサン (Сян) 川に到達する前に、〔戦士たちは〕武装するために平原で馬を降

420) ヴォルシ (Воршь; Worzh) は、ダニール陣営にいたポーランド人軍司令官の名。このときヤロスラフの防衛部隊の指揮をとっていた。かれについて、6776(1268)年の記事でも言及されている。

421) ここでは「使者を派遣して」とあるが、1245 ~ 1247年に教皇使節としてリヨンからカラコルムまで旅行したプラノ＝カルピニのフランチェスコ会修道士ヨハネスの『モンゴル人の歴史』(Historia Mongalorum)によれば、かれ1245年夏頃にポーランド、ウェンチツァのコンラート一世のもとで、ヴァシリコ [I112] と会見して、タタール人についての情報を得ている〔カルピニ、ルブルク 1965: 64 頁〕。時期的に合致することから、ヴァシリコは自らコンラートのもとに援軍を要請するために出向いた可能性もある。

422) マゾフシェ公コンラート一世は、当時クラクフのボレスワフ五世とその母グジミスワヴァと対立をしていた。そのため、ダニールは、ロスチスラフの軍勢にポーランド人 (マウォボルスカ人) がいることを伝えて、コンラートの援軍を引き出すことに成功したのである。

423) 以下の戦闘の記述の最後に援軍が到来してすぐに帰郷したとの記事があることから (下注 446 参照)、派遣された援軍はかなり遅れて到着したと思われる。

424) ダニールの宮廷官 (дворский) アンドレイについては、上注 349 を参照。

りた⁴²⁵⁾。【802】かれらの部隊には次のようなしるし〔前兆〕があった。一羽の鷺と多数のカラスがやって来た。それは巨大な雲のようだった。鳥どもは戯れ飛び、鷺は鳴き声を立てて、その羽根で滑空した。空中を舞う様はこれまでいつ何時にもなかった。このしるしは吉兆だった。

【ダニールの遠征軍はホルムから進軍して、ヤロスラフ城市近郊でサン川を渡河する：1245年8月17日】

ダニール [I111] は武装を整えると、自分の軍兵を連れてサン川に向けて進軍した。〔渡河の〕浅瀬は深くなっていた。〔渡河の〕先頭をポロヴェツ人が馬で渡った⁴²⁶⁾。かれら〔ポロヴェツ人〕は〔対岸へ〕渡ると、かれら〔敵方〕の〔家畜の〕群れを認めた。〔敵方は〕川岸に見張りを置いていなかった⁴²⁷⁾。ポロヴェツ人は公〔ダニール〕の命令なしで、敢えて〔家畜の〕強奪をすることはなかった⁴²⁸⁾。〔敵方は〕これを見て、自分たちの家畜の群れを連れて自分たちの陣営に引き返した。ダニール [I111] とヴァシリコ [I112] も後れを取らずに、たちまち川を渡河した。〔それから〕二人は騎兵と歩兵の部隊を編成すると、戦い〔の場所〕へ落ち着いて進み、二人の戦いへの心意気は高く、戦いに集中していた。

レフ [S2] は子供だったので⁴²⁹⁾、ヴァシリコ⁴³⁰⁾ という勇敢で強壮な貴族の手にその身を委ねられた。戦いのときには〔レフを〕庇護するためであった。

【ロスチスラフ陣営もダニール軍に対する戦闘準備を始める】

ロスチスラフ [G411] は〔敵の〕戦士たちが到来したのを見て、自分の軍兵たち、すなわちルー

425) 遠征部隊の騎馬兵や歩兵は、行軍中は甲冑や剣などは身に付けず、重い装具や武具は別に荷車で輸送されていた。そして、戦闘が近づいたときになって、装具・武具を身につけて武装する (вооружиться) のである。

426) ここで、ダニールの遠征軍の中にポロヴェツ人部隊がいて、ダニールへ臣従していた (危険な渡河を先行して行わされた) ことが分かる。ダニールは配下の従士の中に、ポロヴェツ人 (の部隊) を有していたことについては上注 359 を参照。なお、コトリヤールはこれをハンガリーから呼び寄せた傭兵と見なしている [Котлярь 2005: С. 268-269]。

427) 通常、長途の遠征の際に遠征軍が伴って行く荷役用や食用の馬、牛、羊の家畜のこと。ロスチスラフの遠征軍は、攻城戦に備えて多数の家畜を連れて来ており、河岸に放牧していたのだろう。これに見張りを付けていなかったことは、ロスチスラフがこのような迅速なダニール軍の到来を予測していなかったことを意味している。

428) ダニールとポロヴェツ人が同盟したこれまでの戦闘のように、ポロヴェツ人が目の前の獲物の掠奪に走らず、ダニールの指揮に従っていることを述べて、遠征軍の統制がとれていたことを強調している。

429) レフ [S2] はおよそ 1228 年の生まれと推定されることから、当時は 17 歳ほどだった。

430) 「ヴァシリコ」(Васильк) はヴァシーリイの愛称であり、これは、下に記されているヴァシーリイ・グレーボヴィチ (Васильї же Гльбович) と同一人物とみることができる (下注 432)。

シ人⁴³¹⁾、ハンガリー人、ポーランド人を部隊編成させた。そして、かれら〔ダニール軍〕に向かって進軍させた。歩兵は門を見張らせるために城門の前に残しておいた。〔城市の住民が〕ダニールの援軍として〔城市から〕出撃しないため、攻城機が破壊されないためであった。ロスチスラフ [G411] は **[803]** 部隊を編成すると、深い谷を越えて進んだ。

【ロスチスラフ軍とダニールの宮廷官アンドレイ指揮下の先遣隊との戦闘】

かれ〔ロスチスラフ〕がダニール [I111] の部隊を迎え討つべく軍を進めたとき、宮廷官のアンドレイは急ぎ行動した。それは〔ロスチスラフ軍と〕ダニール [I111] の部隊との戦闘を起こさせないためだった。〔アンドレイは〕急いでロスチスラフ [G411] の部隊と戦闘を始めた。槍が強く打ち付けられて折れた。それは、あたかも雷鳴が轟くようだった。双方の〔部隊は〕多数に及び、落馬したり、戦死したり、他の者は槍の強い打撃によって傷を負ったりした。

ダニール [I111] は選りすぐった 20 人の家臣をかれ〔アンドレイ〕への援軍として派遣した。〔それは〕ヴァシーリイ・グレーボヴィチ⁴³²⁾ (Васильй же Глѣбович), フセヴォロド・アレクサンドロヴィチ⁴³³⁾ [I1212] (Всеволод Александрович), ムスチスラフ⁴³⁴⁾ (Мъстиславъ)〔等だった〕。〔ダニールは〕アンドレイを助けることができず、〔ダニールとヴァシリコは〕サン川方面へと退却した。アンドレイは小勢の従士たちとその場に残され、駆け巡りながら、かれら〔敵軍〕とより激しく戦った。

【ポーランド人はヴァシリコの部隊を攻撃する】

ダニール [I111] は、〔敵方の〕ポーランド人がヴァシリコ [I112] を討つべく一糸乱れず進軍して来るのを見た。かれら〔ポーランド人〕は自分たちの部隊の中で、ケリレシ⁴³⁵⁾ を唱い、大声で怒鳴り立てていた。

431) 「ルーシ人」(русь)はロスチスラフ [G411] の従士や兵士など、かれ自身の配下の部隊のことを指している。

432) これは、上注 430 のダニールの側近貴族ヴァシリコのことだろう。

433) ダニールの従兄弟の息子にあたり、このときダニールの遠征軍に参加していたベルズ公フセヴォロド・アレクサンドロヴィチ [I1212] については、上注 391 を参照。

434) この「ムスチスラフ」については出自は不明。ウクライナ語訳は「公のムスチスラフ・グレーボヴィチ」と注しているが根拠が明確にされていない。

435) 「ケリレシ」(керльшь)とは、教会の奉事の際に反復して唱えられるギリシア語の祈禱句 Κύριε ἐλέησον (主よ憐れみ給え) を音写した語で、フレブニコフ写本の表記は корельсь となっており、さらに写本の欄外に κύριε ἐλέησον の後代の書き込みがある。ポーランド軍はこの祈禱句を士気を鼓舞するための一種の喊声として使ったのである。

【ダニールの部隊とハンガリー人軍司令官フィリヤ指揮下の部隊との戦闘】

ダニール [I111] は、近くでロスチスラフ [G411] が戦っているのを見た。フィリヤ⁴³⁶⁾ (Филя) は後衛の部隊⁴³⁷⁾ において軍旗を手立に立って、こう言った。「ルーシ人はいま戦闘に力を込めている。かれらの集中攻撃を耐えようではないか。〔ルーシ人は〕 斬り合いが長引けば、耐えることができなくなるだろうから」。

しかし、神はかれ〔フィリヤ〕の自慢を聞き届けることはなかった。ダニール [I111] は、ヤコフ・マルコヴィチ⁴³⁸⁾ (Яков Маркович) とシェルフ⁴³⁹⁾ (Шельв) とともに、かれ〔フィリヤ〕を討つべく到来した。シェルフは刺されて負傷し、ダニール [I111] はいったん捕獲されたが、かれ〔フィリヤ〕の手から馬で逃れて、〔フィリヤの〕部隊から駆け離れた。〔しかしダニールは〕フィリヤを助けにやってきた一人のハンガリー人を見ると、これを槍で突き刺した。**[804]**〔槍は〕かれ〔ハンガリー人〕の〔体内〕に刺さって折れ、かれは落馬して息絶えた。

若年のレフ [S2] はこの傲慢なフィリヤとの〔撃ち合いで〕、自分の槍を折った。ダニール [I111] は、たちまち再びかれ〔フィリヤ〕を討つべくやって来ると、かれの部隊を粉碎し、かれの軍旗を〔半分に〕折った。ロスチスラフ [G411] はこれを見て逃げ出し、ハンガリー人たちも敗走に転じた。

【ヴァシリコはポーランド人を、ダニールはハンガリー人、ルーシ人を撃ち破る】

ヴァシリコ [I112] はポーランド人と戦っていた。〔ポーランド人は〕方向を変えて、〔ヴァシリコのところに〕向かってきて、両軍はお互いを認めた。ポーランド人たちは犬が吠えるような声で「大髭野郎⁴⁴⁰⁾を追い詰めろ」と言った。ヴァシリコ [I112] は言った。「お前たちの言っていることは嘘である。神はわれらをお助けになるのだ」。そして、〔ヴァシリコは〕自分の馬をひと打ちすると、〔敵中に〕駆け込んだ。ポーランド人はこれに耐えきれず、かれ〔ヴァシリコ〕の面前から逃げ出した。

436) ハンガリー人部隊の熟練した軍司令官である「フィリヤ」(Филя)については、6725(1217)年の記事で、「傲慢なフィリヤ」として言及されており、このヤロスラフ郊外の戦いで殺されたことについても触れている。〔イパーチイ年代記(10): 278頁, 注291]を参照。

437) 「後衛の部隊」(задний полк)とは、主力部隊が戦闘をしている間は待機して、敵が戦力を消耗した頃合いを見計らって攻撃するための伏兵部隊のこと。

438) 「ヤコフ・マルコヴィチ」は先に言及されているダニール公の側近で、大膳職(上注299)もしくは宮廷官(上注405)のヤコフと呼ばれている人物と同じだろう。

439) 「シェルフ」(Шельв; Шелв)については、6739(1231)年の記事に、ペレムィシェリ近郊の戦いで「大いなる名誉のなかで死んだ」(注27)とされる同名のダニール家臣の貴族がいる。別の人物である可能性が高いが、6739(1231)年記事の死亡が誤っており、同一人物である可能性もある。

440) 「大髭野郎」(на великыи бороды)はヴァシリコ [I112] を誹った呼び名であり、これによってかれの容貌の特徴が分かる。

ダニール [I111] は、深い谷を通過して、ハンガリー人、ルーシ人を追撃し、かれらを撃ち破った。〔ダニールは〕弟〔ヴァシリコ〕の消息が分からず、悲しんでいたが、ポーランド人を追撃しているかれ〔ヴァシリコ〕の軍旗を見つけて大いに喜んだ。

【ロスチスラフ軍は敗走に転じる】

かれ〔ダニール〕が城市〔ヤロスラフ〕の向かいにある丘陵の上に布陣していたとき、ヴァシリコ [I112] がかれ〔ダニール〕のところに馬でやって来た。ダニール [I111] はかれら〔敵軍〕を追いかけようとしたが、ヴァシリコ [I112] はこれを止めさせた。ロスチスラフ [G411] は〔状況が不利なことを〕知って、自分の馬を逃げるために駆り立てた〔からである〕。多数のハンガリー人とポーランド人は撃ち殺されたり、捕虜に獲られたりした。捕虜になった者がなによりも多かった⁴⁴¹⁾。

【捕虜となったハンガリー人司令官フィリャとガーリチ貴族ヴワディスワフはダニールの手で処刑される】

そのとき、傲慢なフィリャも宮廷官アンドレイによって捕獲され、ダニール [I111] のところに連行され、ダニール [I111] の手で殺された⁴⁴²⁾。ジロスラフ⁴⁴³⁾ (Жирослав) はこの地における悪しき騒乱者ヴワディスワフ⁴⁴⁴⁾ (Володислав) を連行してきた。かれはその日のうちに殺された。【805】他の多くのハンガリー人も怒りにまかせて撃ち殺された。

【ヤロスラフ城市郊外の戦いはダニールとヴァシリコの軍の勝利に終わる：1245年8月17日】

ダニール [I111] とヴァシリコ [I112] は〔ヤロスラフの〕城内には入らなかった。レフ [S2] は戦場の死体の中に陣を張った。自分の勝利を宣言したのである。追撃に出ていた戦士たちが夜半になって戻って来た。かれらは多くの戦利品を持参し、お互いを〔探して〕呼び合う声が

441) このときに、ポーランド人の軍司令官で長老のフロリアン (Творьянь) も捕虜となったのだろう (上注 417)。ただし、これに続く記事でかれが殺されたとは書かれていないことから、ダニールによって赦免された可能性が高い。

442) フィリャの死については、先の 6725(1217) 年の記事に言及がある (上注 436 を参照)。

443) 6734(1226年)の項に親ハンガリー派のガーリチ貴族での「欺瞞的な」ジロスラフという人物が否定的な文脈で登場するが [イパーチイ年代記 (10) : 296 頁, 注 385], 時期的に離れ過ぎており、別の人物のダニールの側近 (軍司令官) と考えるべきだろう。なお、ウクライナ語訳は、これを同一人物と推定して、かれが後に転向してダニールに勤務したとしている [Літопис руський, 1989: С. 404, Прим. 7]。

444) 「ヴワディスワフ」 (Володислав) は、これまでの記事で「不忠の」 (неверный) と称されていたガーリチ貴族ヴワディスワフ・ユリエヴィチのこと。かれについては、上注 28, 51, 338 を参照。このとき、ヴワディスワフはロスチスラフ [G41] の軍司令官 (千人長, 上注 340 参照) として戦いに参加していた。

夜中じゅう止むことはなかった。

神はご自身の慈愛を示し、大殉教者フロールとラウルの日の前夜に勝利を賜った⁴⁴⁵⁾。ダニール [I111] はロスチスラフ [G411] が造った〔攻城用の〕砦を焼き払った。そして、多数の拘束捕虜を連れて、自らが創建したホルムへと向かった。

【ミンダウガスが派遣したリトアニア人とコンラートが派遣したポーランド人の援軍が到来したが、戦闘に間に合わずすぐに帰郷する】

リトアニア人とコンラート配下のポーランド人も急ぎかれ〔ダニール〕のところへ、戦いのためにやって来たが、帰郷した⁴⁴⁶⁾。

【ロスチスラフは敗走してポーランドからハンガリーへ逃げ、再度のガーリチ攻略を狙う：1245年後半】

ロスチスラフ [G411] はポーランドへ逃げ⁴⁴⁷⁾、〔そこから〕自分の妻を連れて⁴⁴⁸⁾ ハンガリーへと向かった。

その後、〔ロスチスラフ [G411] は〕ハンガリーから妻と一緒にポーランドの地へ行った。かれ〔ロスチスラフ〕は思慮して、ガーリチを攻略して領有しようと考えたのである⁴⁴⁹⁾。神はその高慢な思慮ゆえに、かれが考えたことを実現させなかった。

445) 「大殉教者フロールとラウルの日」(великая мученика Флора (Флора) и Лавра) は 8 月 18 日であり、その前日は 1245 年 8 月 17 日に相当する。

446) ダニールがリトアニア人侯ミンダウガスとポーランドのマゾフシェ公コンラートに援軍を要請したことについては上注 422 を参照。文脈から見ると、この二箇所からの援軍はヤロスラフ郊外の戦闘には間に合わなかったようである。

447) ロスチスラフ [G411] は敗走してクラクフへ逃げたのである ([Пашуто 1950: C. 234])。

448) ロスチスラフ [G411] の妃でハンガリー王ベーラ四世の娘アンナ (上注 358) は、ロスチスラフが援軍要請のためクラクフのグジミスワヴァのもとを訪れたとき (上注 416) 一緒に連れて行かれ、援軍を得てペレムィシェリ、ヤロスラフへの遠征に向かうときに、ロスチスラフはクラクフにかの女を残したのである。

449) ロスチスラフ [G411] はヤロスラフ郊外の戦いの敗戦ののち、再度、マウォポルスカのボレスワフ五世＝グジミスワヴァと同盟して、再度のガーリチ攻略を計画した。しかし、この遠征も行われることはなかった。1246 年に入ると、ベーラ四世の対ダニール政策の方針転換 (下注 479 参照) によって、1247 年からロスチスラフはマチヴァ地方 (セルビア北部およびスラヴォニア (クロアチア東部) 地方長官 (パン) に任命されて赴任し、もはやガーリチへの野心を示すことはできなくなった [Котлярь 2005: C. 270-271]。本年代記でもかれについての言及は実質的にここが最後になっている。

6758 [1250] 年

【バトウの総督モウツィがガーリチ地方の半分を要求し、ダニールはバトウのもとへの伺候を決心する：1245 年秋】

モウツィ⁴⁵⁰⁾ (Могучей) が、ドロゴフスキイ⁴⁵¹⁾ (Дороговъскыи) にいたダニール [I111] とヴァシリコ [I112] に使者を派遣して「ガーリチを与えよ⁴⁵²⁾」と言った。〔ダニールは〕大いに悲しんでいた。なぜなら、**【806】**〔ダニールは〕〔ガーリチの〕地の諸城市〔の防衛を〕固めることができないでいたからである。〔ダニールは〕自分の弟〔ヴァシリコ〕と相談して、〔ダニールは〕バトウのところに行った⁴⁵³⁾。〔ダニールはモウツィの使者に対しては〕こう言った。「自分の父の地の半分でも与えるつもりはない。しかし、わしは自分でバトウのもとに行くつもりだ」。

450) 「モウツィ」(Могучей) は、カルピニの修道僧ヨハネスの旅行記『モンゴル人の歴史』(Historia Mongalorum) で「モウツィ」(Mouci) と表記されている人物に相当している。カルピニによれば、かれは、バトウの代官クレムシ (下注 458) よりも「有力 (maior) な人物」であり、ドニエプル左岸のドン川にいたるステップ地帯 (キプチャク平原) を移動している支配者としている [カルピニ, ルブルク 1967 : 69 頁]。

「モウツィ」は、ドニエプル川とドン川の間に拠点を持ち、当時の、ドニエプル左岸のキエフ及びガーリチ公領に対しても命令できる強い権力を持った実質的な支配者だった。ただ、ロシア語研究文献で Мауци, Моуци と表記されるこの人物の出自については研究者の間で諸説があり、チャガタイの息子モチ・イエベ (Мöçi Yebe, Мужи Яя) (バトウの又従兄弟にあたる) とする説 (ウクライナ語訳)、ジョチの息子でバトウの兄弟にあたるボアル (Boal, Бувал, Мувал) とする説などがある [Войтович 2004: С. 100]。またロシア語訳の注やコトリヤール [Котляр 2005: С. 271] のようにバトウの手で派遣された単なる軍司令官 (総督) とする説もあるが、その権力の強さから見てチンギス=ハン一族に属する人物と見るべきではないか。

451) ドロゴフスキイ (Дороговъскыи) は、西ブグ川中流左岸の城砦で、現在のポーランド、ヘウム県のドロフスク村 (Dorohusk) に相当する。ダニールの拠点城市ホルムから東へ 23km ほどの距離と近く、拠点の範囲内である。

452) このガーリチ地方の支配権引き渡しの要求の裏には、モンゴル側がガーリチの支配者を、この地に基盤を持たず抵抗の可能性の低い支配者 (公) と交代させようとの意図があったと考える研究者が多い。その公が誰かについては諸説あるが、コトリヤールは、スーズダリ公ヤロスラフ [K4] を考えており、ヤロスラフがキエフ支配を許された (下注 455) のも、ダニールがキエフを支配して、勢力を増大させるのを予防する意図があったのではないかと推定している。ただし、この要求は、単にダニールにバトウへの参内を促す意図からきた可能性もあるとしている [Котляр 2005: С. 272]。

453) バトウはハンガリーから西征軍を引き上げたあと、ヴォルガ川河口に陣営 (オルダ) を築いてそこを拠点としていた。いわゆるバトウ=サライである (上注 369, 下注 462)。ダニールとヴァシリコ兄弟がサライに使者を派遣して、バトウのもとへ行くための安全通行証 (securitas) を受けていたことについては、カルピニのヨハネスもその旅行記で記している [カルピニ, ルブルク 1965 : 64 頁] [Карпини и Рубрук 1957: С. 66]。

【ダニールはサライへの旅に出発し、キエフに滞在してヴィドゥビチのミハイル修道院を訪問する：1245年10月26日～12月】

聖ドミトリオスの祭日⁴⁵⁴⁾に〔ダニールは〕神に祈って、〔ドロゴスキイもしくはホルムを〕出発すると、キエフにやって来た。そこはヤロスラフ [K4] が自分の貴族ドミトル・エイコヴィチ (Ейковичь Дмитро) 〔を派遣すること〕によって支配していた⁴⁵⁵⁾。

〔ダニールは〕ヴィドビチ (Выдобичь) にある大天使ミハイルの家〔修道院〕⁴⁵⁶⁾ に到着すると長老、修道士たちを呼んだ。そして、典院とすべての修道士に向かって、自分のために祈禱を行うように言った。神の慈悲を受けられるようにとの〔祈禱が〕なされた。そのようにしてから、大天使ミハイルの〔聖像の〕前に跪拝した。そして、修道院を出ると〔水路でペレヤスラヴリへ行く〕小舟に乗った。忌まわしく恐るべき災厄を予感していた。

【ダニールはペレヤスラヴリからタタール人使者の案内で総督クレムシのもとに向かう：1245年12月～1246年1月】

〔ダニールは〕ペレヤスラヴリに到着し、タタール人の出迎えを受けた⁴⁵⁷⁾。そこから騎馬でクレムシ⁴⁵⁸⁾ (Куремса) のもとへと向かった。かれら〔タタール人〕のもとには善き事はなにもなかった。

その時から、〔ダニールは〕ひどく魂を悲しませ始めた。悪魔による征服を目撃したからで

454) テサロニケの殉教聖人ドミトリオスの祝祭日である10月26日(1245年)に当たる。

455) キエフは、1244年にミハイル [G41] が逃げ出して以降は、バトゥによる公座の認証(ヤルルク)を受けたヤロスラフ [K4] が支配権を握っていた(上注367)。しかし、モンゴル権力との関係で、北東ルーシの支配の確立に専念していたヤロスラフは、荒廃したキエフには、代官を派遣して統治していたと思われる。この「ドミトロ・エイコヴィチ」(Ейковичь Дмитро) はそのような代官である。

456) ダニールがキエフのヴィドゥビチ聖ミハイル修道院に立ち寄った理由として、キエフの辺地にありバトゥ軍の破壊を比較的まぬかれていたということと、修道院の場所に対岸への渡し場があったこと、最後にこの修道院がムスチスラフ・ウラジーミロヴィチ [D11] の一族にゆかりが深かった(1199年にリュウリク [J2] が修道院の壁を建設している)ことを挙げることができるだろう。

457) 当時、ペレヤスラヴリにはタタール支配の前哨地として派出所が設けられており、ここから東がタタール人の直接の支配地であったことが分かる。

458) 「クレムシ」(Куремса) は、バトゥの実兄オルダ (Ūrda, Hurdū) の息子で、ヴォルガ川河口のサライに拠点を置いたバトゥ(かれの叔父にあたる)の代官として、ドニエプル右岸地方一帯の監督を担っていた人物。カルピニの旅行記ではコレンザ (Corenza, Curoniza, Choranza) と表記されている。カルピニによれば「この首長 (dux) は西方の全民族がタタール人に急襲をかけ、不意打ちを喰らわぬよう、駐屯してその警戒にあたるものすべての支配者 (dominus) です。わたしどもの聞いたところでは、かれのもとには6000人の武装兵士がいるとのことです」[カルピニ, ルブルク1967:68頁][Menesto 1989: p. 307]と、キエフとガーリチ公領に監督権を及ぼしていたことがわかる。かれの拠点地は、ドニエプル川下流域にあったと考えられる。

ある。かれら〔タタール人〕の穢らわしい呪文、チンギスハンのお告げ⁴⁵⁹⁾、血を食する穢らわしい〔風習〕、多くの魔術などである。〔タタール人の地に〕やって来た諸皇帝、諸侯、貴顕たちは偶像の周りを導かれていた⁴⁶⁰⁾。これは、太陽、月、大地、悪魔や地獄にいるかれらの死んだ父、父祖、母たちに拝礼するためであった⁴⁶¹⁾。おお、【807】かれらの魔力のなんと穢らわしいことか。

〔ダニールは〕これらのことを聞くと、ひどく悲しんだ。

【ダニールはサライのバトゥのもとに到着する：1246年1月頃】

そこから、〔ダニールは〕ヴォルガ川〔河口のサライへ〕バトゥのもとへやって来た⁴⁶²⁾。かれ〔ダニール〕が〔バトゥのところへ〕伺候〔拝礼〕しようと⁴⁶³⁾していたとき、ヤロスラフ [K4] 配

459) この「かれらの穢らわしい呪文」(скверна их кудьшьская бляденья) や「チンギス=ハンのお告げ」(Чигизаконова мечтанья) については、カルピニの旅行記でも「(タタール人は) 占い、前兆、予言、妖術、呪文を非常に重視し、悪魔どもから答えを得ると、神が自分たちに語りかけているのだと信じます」「かれら〔タタール人〕は初代の皇帝〔チンギス=ハン〕をかたどった偶像をつくり、(...) 尊い場所に安置する」[カルピニ、ルブルク 1967: 12, 15 頁]と同様の観察を述べている。

460) この「偶像(куст)の周りを導かれる」の「偶像」と訳した куст (кост) は、タタール人の呪具(崇拝の対象物)であり、火による浄めの儀礼のために用いられるものを指しているのではないか。これについて、カルピニは、「この浄めは、火を二個所に燃やし、それらの近くに槍を一本ずつ立て、この槍の先端に縄を一本張り渡して、これにバックラム布の薄片を結びつけます。この縄とそれに付いた布片との下、二つの火の間を通らせる〔のです〕」[カルピニ、ルブルク 1967: 18 頁]とあり、この呪具が木の枝(槍)からなっていることから「叢」を意味する куст の語が用いられたと考えられる。

461) 月や太陽への拝礼の習慣について、カルピニは「タタール人は月を大皇帝と呼び、跪いてそれに祈ります。月はその光を太陽から受けるので、太陽は月の母であると申します。さらに一口で言うと、何でも火によって浄められると信じています。ですから、使節、諸侯、そのほかの誰であろうと、タタール人のもとに来た者はその持参した贈物ともども、火と火の間を通して浄めをしてもらわなければなりません」[カルピニ、ルブルク 1967: 15 頁]と、この部分とほぼ同様の観察を述べている。

462) このヴォルガ河口に建てられたバトゥの拠点地はサライ=バトゥ(Сарай-Бару) (後のベルケが建てたサライと区別するため) と呼ばれ、現在のアストラハンから北北西へ 100km ほどヴォルガ川を遡ったセリトレンノエ村(Селитренное)にその遺構がある。

463) 「伺候(拝礼)する」の原語は прийти поклонити ся で、貢ぎ物などをもって主君(ここではバトゥ)のもとに表敬に伺い、臣下としての拝礼の儀礼を行う(下注 466 参照)ことを意味している。

下のソングル⁴⁶⁴⁾ (Сънгуp) という男がかれ〔ダニール〕にこう言った。「あなたの兄弟のヤロスラフ [K4] は偶像に拝礼した。あなたも拝礼すべきである」。〔ダニールは〕かれ〔ソングル〕に言った。「〔その言葉は〕悪魔がお前たちの口をとおしてが語っているのだ。どうか神がお前の口を閉ざし、お前の言葉が聞き入れられることがないように⁴⁶⁵⁾」。

【ダニールはバトゥに自らの意志で拝謁し、バトゥに評価される】

ちょうどそのとき〔ダニールは〕バトゥに呼び出された。〔ダニールは〕神によってかれら〔タタール人〕の悪しき悪霊の業と魔術を免れることができた。〔ダニールは〕かれら〔タタール人〕の慣習による拝礼をなすと⁴⁶⁶⁾、かれ〔バトゥ〕の天幕に入った。

464) この「ソングル」(Сънгуp)については、カルピニがその旅行記の中で「バトゥの本営では、ヤロスラフ公 (dux Ierozlai)[K4] の息子〔コンスタンチン [K44]〕にでくわしました。かれには、ロシアからきたサンゴル (Sangor) という騎士〔貴族〕(miles) が随行していました。このサンゴルは生まれはポロヴェツ人 (comanus) ですが、いまはキリスト教徒です」〔カルピニ、ルブルク 1967: 88 頁〕[Menesto 1989: p. 331] とある「サンゴル」(Sangor) と同一人物であることは疑いない (Горский 2014: С. 119)。カルピニはカラコルム方面へ向かう往路の、1246 年 4 月 6 日にサライでバトゥの接見を受けており〔カルピニ、ルブルク 1967: 71 頁〕、また、『ラヴレンチイ年代記』6751 (1243) 年の記事によると。ヤロスラフ [K4] は息子のコンスタンチン [K44] を自らの訪問に先行してカラコルムに派遣しており [ПСРЛ Т. 1, 1997: Стб. 471]、おそらくコンスタンチンが帰路にサライに立ち寄ったときに [Насонов 1940: С. 31]、ダニールはソングルと言葉を交わしたのだろう。これは 1246 年の 4 月初めだったと考えられる。

ここでソングルを「ヤロスラフの家来」(Ярославль человек) とあたかも従僕のように呼んでいるのは、年代記記者のヤロスラフ [K4] への対抗意識 (さらには相手がポロヴェツ人であることの蔑視) からくる言葉づかいで、カルピニの目にとまったほどだから、実際のソングルは地位の高い貴族 (боярин) だったと考えられる。

465) これは、ソングルの悪しき忠告に対するダニールの反論のエピソードで、「お前たちの口から」(из уст ваших) はヤロスラフ [K4] の一行が語る言葉を意味しているだろう。ここでは、当時のダニール陣営とヤロスラフ陣営の政治的な対立が、バトゥの本営の中でも展開していたことを見て取ることができる。コトリャールは、ソングルの言葉に、自分の主人も拝礼したのだからあなたも拝礼せざるを得ないという、ダニールの反発を買うような言い回しによって偶像拝礼を拒否させ、タタール人の手で殺させようという、ヤロスラフ [K4] 陣営の巧妙な詐術を読み取っている [Котляр 2005: С. 273]。

年代記記者がこのエピソードを挿入したのは、バトゥの宮廷におけるダニールの行動 (拝礼や馬乳酒を飲むこと) が、ヤロスラフ [K4] の場合のような「悪魔の」惑わしによるものではなく、あくまでタタール人の「慣習」(次注 466) を不本意ながら自分の意志で受け入れたものであることを、対比的に強調するための構成的な手法と見なすこともできる。

466) この「かれらの慣習による拝礼」(поклонися по обычаю ихъ)については、『ノヴゴロド第一年代記(新輯)』6753(1245)年の記事に詳しい記述がある。それによると「バトゥはカーンの慣習を保っていた。〔すなわち、〕もし、誰かが自分のもとに拝礼のために来たら、自分のところに連れてくるように命令はしない。呪術師たちに命じて、その者たちを火のあいだを通るよう導かせ、その者たちに偶像〔куст 上注 460〕と火を拝礼させる。〔その者たちが〕皇帝に持参した品々は、呪術師たちがそのすべてからある〔部分を〕取り上げて、それを火中に投ずる。〔そうしてから〕皇帝の前に貢ぎ物とともに参上を許される」[НПЛ: С. 298] としている。

かれ〔バトゥ〕は言った。「ダニールよ、なぜそなたは長い間やって来なかったのか。だが、今、こうして来たのは善いことである。そなたは、黒い乳⁴⁶⁷⁾、すなわちわれらの飲み物である雌馬の馬乳酒(кумуз) 飲むか」。かれ〔ダニール〕は言った。「これまでわたしは〔これを〕飲んだことはないが、今あなたが命じるのであれば飲む」。かれ〔バトゥ〕は言った。「〔それなら〕そなたはすでにわれら〔と同じ〕タタール人だ。われらの飲み物を飲むのならば⁴⁶⁸⁾」。かれ〔ダニール〕は飲み干すと、かれら〔タタール人〕の慣習による拝礼をなし、自分の言葉でこう申し述べた。「わたしは大いなる公妃バラクチナ⁴⁶⁹⁾(Баракъчина)に拝礼しに行きます」。〔バトゥは〕言った。「行くがよい」。〔ダニールは〕行って、〔タタール人の〕慣習による拝礼をした。〔バトゥは〕一腕の酒を〔ダニールに〕贈って、こう言った。「乳を飲むことに慣れていないなら、酒を飲むがよい」。

【ダニールおよびルーシ諸公の境遇についての年代記記者の悲嘆の言葉】

おお、タタール人の敬意の表し方のなんと邪悪で悪しきことか。大いなる公であるダニール・ロマノヴィチ [I111], ルーシの地を, **[808]** キエフ, ヴラジミルを領有し, ガーリチを弟〔ヴァシリコ〕とともに, また他の地方を領有しているかれが, 今膝を屈して座り, 僕(しもべ)⁴⁷⁰⁾と呼ばれているのだ。〔タタール人は〕貢税を要求し, 〔ダニールは〕命が助かることを予期していなかった。雷雲が到来したのである。

おお、タタール人の敬意の表し方のなんと邪悪なことか。かれ〔ダニール〕の父〔ロマン [I11]〕はルーシの地の皇帝(ツァーリ)だった。かれはポロヴェツの地を征服し, 他のすべての地を掠奪した。ところが, かれの息子〔ダニール〕には敬意が表されないのだ。だが, 他の誰がそ

467) 「黒い乳」(черное молоко)について, А・パンチェンコは「異教の, 穢れた」(поганый)の意味と解釈しているが [Панченко 1968: С. 11, Прим. 27], ルブルクのウイリアムの旅行記中の「馬乳酒」の作り方の節に大君主たち (magni domini) のための飲用として「黒い馬乳酒」(cara-cosmos, nigrum cosmos) の製法が解説されている [カルピニ, ルブルク 1967: 145 頁] ことから, おそらくは, ここの「黒い乳」もそのような高級な馬乳酒のことを指しているのだろう。

468) ルブルクのウイリアムがバトゥと会見したときの証言によれば「バトゥ自身の家でかれと一緒に馬乳酒を飲むのは, 誰にとっても大変な名誉とされているのです」 [カルピニ, ルブルク 1967: 187 頁] とあることから, ダニールはバトゥから最高級の待遇を受けたと考えられる ([Пашуто 1950: С. 236] も参照)。

469) 「バラクチナ」(Баракъчина) は, バトゥの正妻のボラクチン(Борагчин, モンゴル語 Вогаqçin, ペルシア語 Būrāqchīn) (1257 年没) と考えられる。ただし, ウクライナ語訳の注(ロシア語訳注も同様)では, 大ハーン, オゴデイの第一皇后もボラクチンという名であり, オゴデイが 1241 年に没したのちは, 別の皇后ドレゲネが権力を握り息子のグユクを皇帝に据えたことから, かの女が身の危険を逃れてバトゥのもとに行ったとして, これはオゴデイの皇妃(寡婦)のことだとしている [Літопис руський, 1989: С. 405, Прим. 5]。

470) 「僕(しもべ)」の原文は холоп で, 領主に仕え, 屋敷などで労働する隷属民を指す言葉。

のような敬意を受けられようか。かれらの悪意と奸計には限りはない。

スーズダリの大いなる公ヤロスラフ [K4] は毒殺された⁴⁷¹⁾。チェルニゴフ公ミハイル [G41] は、偶像 (куст) に拝礼しなかったばかりに、自分の貴族フョードルとともに短剣で斬り殺された。かれらの拝礼の話は先にわれらが述べた通りであり、これにより二人〔ミハイルとフョードル〕は殉教者の冠を受けたのだった⁴⁷²⁾。他の多くの諸公や貴族たちが撃ち殺された。

【ダニールは帰国を許され、サライを発って帰郷する：1246年1月末～4月頃】

公〔ダニール〕はかれら〔タートル人〕のもとに25日滞在し、帰国を許され、それまでかれ〔ダニール〕のもとにあった地がかれに安堵された⁴⁷³⁾。

〔ダニールは〕自分の地へやって来ると、かれの弟〔ヴァシリコ〕とかれの息子たちが出迎えた。かれの受けた侮辱については嘆きが、かれが健勝であったことについては大いなる喜びがあった。

【マゾフシェ公コンラートはヴァシリコにヤトヴァグ人討伐遠征を提案するが寒気のために止める：1245/1246年冬】

その年の冬、コンラートはヴァシリコ [I112] に使者を派遣して「われらはヤトヴァグ人討伐の遠征しよう」と言った。しかし、雪が降り寒気が襲った。かれら〔コンラートとヴァシリコ〕

471) この、ヤロスラフ [K4] が毒殺された (зелиемь умориша) ことについて、カルピニはその旅行記の中で、「ロシアのスズダルという地方の大公ヤロスラフ (Ierozlaus dex magnus) が死ぬと言う事件が起きました。この公は皇帝の母の招待を受けたのですが、かの女はあたかも公に敬意を表するかのようになり、手ずから公に飲み食いさせました。公は自分の宿舎に戻った途端に病気にかかり、7日して亡くなりましたが、その全身はおかしな風に青ずんだ灰色に変わったのです。そのため誰もかも、タートル人が公の領土を自由に、または完全に占領しようとして、公をそこで毒殺したのだと考えました」〔カルピニ、ルブルク 1967：81頁〕[Menesto 1989: p. 323] と詳細にその様子が描かれている。なお、『ラヴレンチイ年代記』6754 (1246) 年の記事によれば「その年〔1246年〕の秋、ヤロスラフ公 [K4]、フセヴォロドの息子が異族の地で逝去した。カーンの息子のところから〔戻って来た〕9月30日聖グリゴリーの日のことだった」〔ПСРЛ Т. 1, 1997: Стб. 471〕と死亡した日が示されている。

472) バトゥによるチェルニゴフ公ミハイル [G41] の処刑については、上注 369～372 を参照。

473) 「それまでかれのもとにあった地がかれに安堵された」 (поручена бысть земля его ему, иже бѣаху с нимь) とは、ガーリチの地支配についてのバトゥの勅令〔ヤルリク (yarliq, ярлык)〕を受けたと解釈することができ、総督モウツィが要求したガーリチの支配地の提供 (上注 450, 452) については、バトゥとの直接交渉で撤回させることができたと考えられる。

は遠征を続けられず、ヌール川⁴⁷⁴⁾ (Hyp) に戻った⁴⁷⁵⁾。【809】

【ダニールの帰郷についての民衆の反応：1246年3月末～5月⁴⁷⁶⁾】

全ての国々にかれ〔ダニール〕がタタール人のもとから帰還し、これは神がかれを救ったのだという報せが広まった⁴⁷⁷⁾。

【ハンガリー王ベーラ四世は娘とレフとの結婚を申し入れるが、ダニールは断る：1246年夏～秋】

この年〔の夏〕ハンガリー王〔ベーラ四世〕が使者⁴⁷⁸⁾を派遣して言った。「わしの娘をそなたの息子レフ [S2] に嫁がせよう⁴⁷⁹⁾」。かれ〔ハンガリー王〕は〔ダニール〕がタタール人のもとに行き、また〔ダニールが〕ロスチスラフ [G411] とかれのハンガリー人に勝利したこと⁴⁸⁰⁾で、かれ〔ダニール〕を恐れていたのである。

〔ダニールは〕弟〔ヴァシリコ〕と一緒に考えて、かれ〔ハンガリー王〕の言ったことに信

474) 「ヌール川」 (Hyp) は、西ブグ川支流のヌジェツ川 (Nurzec) に相当する。ヴァシリコの根拠地の一つベレスチエからだ北西へ70kmほど、マゾフシェの中心地プウォツクからだ西へ230kmほどの地点になる。

475) この段落のヤトヴァグ人討伐は、ダニールがバトゥ参内の旅行に出て不在の1245/1246年冬の出来事と考えられるが、前後の記事と時系列的に整合しないことから、編集の際に誤って挿入された可能性が高い。

476) フルシェフスキはダニールのホルム帰還の時を1246年5月の半ば以降と考えているのに対して、マイオーロフは3月末～4月初めにはすでに帰郷していたと推定している [Майоров 2012в: С. 57, 64]。

477) 年代記記者は、ダニールのバトゥ訪問によってかれの対外的な権威が高まったことを評価しており、そのことは次に述べられる対ハンガリー政策やキリルの府主教叙任のための派遣にもあらわれている ([Котляр 2005: С. 275] を参照)。

478) 「使者」の原語は вицький (原文では対格形 вицького, вицького) で、ここがこの語の唯一の用例であり、主な中世ロシア語辞典は意味不明として語義を与えていない。古ポーランド語の witeczny (勝利の), witez (騎士、英雄) に対応する語として、ハンガリーの廷吏を意味するとする説もあるが根拠は薄い [Котляр 2005: С. 275]。マイオーロフが提唱しているように、これをラテン語 vice (代理) からの造語と解釈して、ハンガリー王の委任を受けた (代理の) 高級使節と理解するのが可能性が高いだろう [Майоров 2012в: С. 75, Прим. 47]。

479) この提案は、1246年の前半に、ベーラ四世は娘婿ロスチスラフをガーリチの公座に据える目論見を放棄し、ダニールと融和する方針に転換したにかかわっている。この方針転換の理由として、ダニールの目を見張る威信と実力の高まり (上注477) を前に、モンゴルに対する対策において、ダニールと対立するより、共同で対処したほうが有利と判断したことがあるだろう。同時に、ベーラ四世は1246年春にオーストリアと戦争を始めており、二方面で戦争する余裕がなくなったことも理由の一つと考えられる [Грушевський ІУР-3: С. 66-67, 74] [Котляр 2005: С. 276]。

480) このダニールの勝利は、1245年8月17日のヤロスラフ郊外の戦いの勝利を指している (上注441参照)。

頼を置かなかった。以前にも、自分の娘を嫁がせると言って、考えを変えたことがあったからである⁴⁸¹⁾。

【ベーラ四世は叙任のためにニカイアへ向かう途上の府主教キリルを説得して、ダニールとの婚姻同盟を図る：1245年晩秋～1246年冬】

府主教キリル⁴⁸²⁾は、ダニール [I111] とヴァシリコ [I112] によって、ルーシの府主教として叙任されるために〔ニカイアへ〕派遣された⁴⁸³⁾。

かれ〔キリル〕が〔ハンガリー〕王〔ベーラ四世〕のもとに滞在したとき、王はかれに説いて、多くの贈物を与えて、こう言った。「もし、わしと和平〔同盟〕を結ぶなら、わしは大いなる敬意をもってそなたをギリシア人のもと〔ニカイア〕へ連れて行こう」。かれ〔キリル〕は言った。「どうか誓約〔の儀式を行って〕誓って下さい。あなたが自分の言葉を翻さないのなら、わたしは行って、かれ〔ダニール〕を連れて来ましょう」。

【帰国した府主教キリルとヴァシリコは、ダニールにハンガリー王との婚姻同盟を勧める：1247年】

府主教〔キリル〕は〔ニカイアでの府主教叙任式から〕戻ってくると、かれ〔ダニール〕に言った。「あなたの要望はかなえられました。かれ〔ハンガリー王〕の娘を自分の息子〔レフ [S2]〕の嫁に取りなさい」。ヴァシリコ [I112] は〔ダニールに〕言った。「かれ〔ハンガリー王〕のもとに、キリスト教徒として行きなさい」。

【ダニールは息子レフと府主教キリルとともにベーラ四世を訪問して婚約をまとめ、ハンガリーとの婚姻同盟を結ぶ：1247年】

それによって、ダニール [I111] は、自分の息子レフ [S2] と府主教を伴って〔ホルムを〕出発し、

481) 1240年の後半（つまりこのときの5年ほど前）にダニールが対モンゴル、対ミハイルの対策として、自らハンガリーへ行き、ベーラ王に婚姻同盟（おそらくは息子のレフとベーラ四世の娘との）を提案したが成立しなかったことを指している（上注272, 273を参照）。

482) 府主教キリルについては上注318を参照。

483) 1204年にビザンツ帝国の首都コンスタンティノポリスは第4回十字軍によって陥落したため、宮廷はニカイア(Níkaiα)（現在のトルコ共和国の都市イズニク(İzник)）に亡命政権を建て、東方教会の総主教もここに座を移していた（1240-1244年は空位）。キリルが府主教の正式な叙任のために向かったのもニカイアであり、総主教はマヌエル二世だった。

イズヴォリン⁴⁸⁴⁾ (Изволин) の〔ハンガリー〕王のところに行った。そして、その娘⁴⁸⁵⁾ をかれの息子〔レフ〕の嫁としてもらい受け、かれ〔ダニール〕が弟〔ヴァシリコ [I112]〕とともにヤロスラフ〔の城市を〕征服したとき、神がかれ〔ダニール〕の手に引き渡して、捕虜となっていた〔ハンガリー〕貴族たちを、かれ〔王〕に引き渡した。こうして、〔ダニールは〕かれ〔ハンガリー王〕と和平を結び、自分の地へ戻った。

484) 「イズヴォリン」 (Изволин) は、当時のハンガリー王国領の北国境沿いにあり、1230年代にベーラ四世はこれに都市特権を与えている。現在のスロヴァキア (モラヴィア地方) のズボレン (Zvolen) 市に相当する。この都市は首都ブダとポーランドの王都クラクフを結ぶ交易路の要所であり、両当事者にとって婚約の交渉や捕虜交換のためには都合の良い立地だった。

485) ベーラ四世の娘である王女コンスタンツァ (Boldog Konstancia) (没年 1288年以降) のこと。

参考文献

- Войтович 2004 — Войтович Л. В. Нашадки Чингіз-Хана: вступ до генеалогії Чингізидів-Джучидів. Львів, 2004.
- Войтович 2006 — Войтович Л. В. Княжа доба: Портрели еліти. Біла Церква, 2006.
- Генсьорський 1961 — Генсьорський А. І. Галицько-Волинський літопис (лексичні, фразеологічні та стилістичні особливості). К., 1961.
- Горский 2014 — Горский А. А. Свидетели путешествия Плана Карпини уникальная информация и ошибки прочтения / Древняя Русь. Вопросы медиевистики. 2014. № 3 (57).
- Грушевський 2005 — Грушевський М. С. Хронологія подій Галицько-Волинської літописі // Грушевський, Михайло Сергійович. Твори: у 50 т. Львів, 2005. Т. 7., С. 327 - 387.
- Грушевський ІУР-3 — Грушевський М. С. Історія України-Руси: Т. 3. до року 1340. К., 1993.
- Дашкевич 1873 — Княжение Даниила галицкого по русским и иностранным известиям. Киев, 1873.
- Древняя Русь-Хрестоматія Т. 4 — Древняя Русь в свете зарубежных источников: Хрестоматия. Т. 4: Западноевропейские источники. М., 2010.
- Каприни и Рубрук 1957 — Путешествия в восточные страны Плана Карпини и Рубрука. М., 1957.
- Карпов 2011 — Карпов А. Ю. Батый. М., 2011 (Жизнь замечательных людей).
- Котляр 2002 — Котляр М. Данило Галицький: Біографічний нарис К., 2002.
- Летописец Еллинский и Римский. Т. 1 — Летописец Еллинский и Римский. Т. 1. Текст. СПб., 1999.
- Майоров 2001 — Майоров А. В. Галицко-Волынская Русь: Очерки социально-политических отношений в Домонгольский период: Князь, бояре и городская община. СПб., 2001.
- Майоров 2009 — Майоров А. В. Летописные известия об обороне Чернигова от монголо-татар в 1239 г. (Из комментария к Галицко-Волынской летописи) // Труды отдела древнерусской литературы. Т. 60, 2009.
- Майоров 2012a — Майоров А. В. Повесть о нашествии Батые в Ипатьевской летописи. Часть первая // ROSSICA ANTIQUA. 2012. № 1.
- Майоров 2012б — Майоров А. В. Повесть о нашествии Батые в Ипатьевской летописи. Часть вторая // ROSSICA ANTIQUA. 2012. № 2.
- Майоров 2012в — Майоров А. «Король Руси» в битве на Лейте // Русин. 2012, №3 (29) С. 54-77.
- Насонов 1940 — Насонов А. Н. Монголы и Русь (История татарской политики на Руси). М., 1940.
- Панченко 1968 — Панченко А. М. О цвете в древней литературе восточных и южных славян // Труды отдела древнерусской литературы. Т. 23. Л. 1968.
- Пашуто 1950 — Пашуто В. Т. Очерки по истории Галицко-Волынской Руси. М., 1950.
- ПСРЛ Т. 4, Ч. 1, 2000 — Новгородская четвертая летопись (Полное собрание русских летописей. Т. 4, Ч.1). М., 2000.
- ПСРЛ Т.7, 2001 — Летопись по Воскресенскому списку. (Полное собрание русских летописей. Том VII) М., 2001.
- ПСРЛ Т.10, 2000 — Летописный сборник, именуемый Патриаршей или Никоновской летописью (Полное собрание русских летописей. Т. 10). М., 2000.
- Раппопорт 1982 — Раппопорт П. А. Русская архитектура X-XIII вв. М., 1982.
- Рашид-ад-дин Т. 2 — Рашид-ад-дин. Сборник летописей Т. 2. М., 1960.
- Романова 2017 — Романова Г. Я. Объяснительный словарь старинных русских мер. М., 2017.
- Рудаков 2009 — Рудаков В. Н. Монголо-татары глазами древнерусских книжников середины XII-

- XV 世紀. М., 2009.
- СККДР Вып.1 — Словарь книжников и книжности Древней Руси Вып.1 (XI - первая половина XIV в.). Л., 1987.
- Тизенгаузен Т. 2 — Сборник материалов, относящихся к истории Золотой Орды / Пер. В. Г. Тизенгаузена. М., 1941. Т. 2. (С. 20-24 Из «Истории завоевателя мира» Джувейни).
- Фасмер Т. 1 - 4 — Фасмер, Макс Этимологический словарь русского языка. Том 1 - 4. М., 1987.
- Храпачевский 2005 — Храпачевский Р. П. Военная держава Чингисхана. М., 2005.
- Черепнин 1940 — Черепнин Л. В. Летописец Даниила Галицкого // Исторические записки. М., 1941. № 12.
- Черкас 2014 — Черкас Б.В. Західні володіння Улусу Джучи політична історія, територіально-адміністративний устрій, економіка, міста. (XIII–XIV ст.). К. Інститут історії України НАН України, 2014.
- Шараневич 1863 — Шараневич И. История Галицко-Володимирской Руси от найдавейших времён до року 1453. Львов, 1863.
- Янин 2013 — Янин В. Л. Очерки истории средневекового Новгорода. М., 2013.
- Dimnik 1979 — Martin Dimnik The siege of Chernigov in 1235 // Medieval Studies / Ponivical Institute of Medieval Studies. Vol. 41(1), 1979.
- Menestò 1989 — Enrico Menestò u. a. (Hrsg.): Giovanni di Pian di Carpine: Storia dei Mongoli. Centro italiano di studi sull'alto medioevo, Spoleto 1989.
- Rady 1991 — Martyn Rady The Mongol Invasion of Hungary // Medieval World Nov./Dec. 1991.
- イパーチイ年代記 (3) — 中沢敦夫, 吉田俊則, 藤田英実香 「『イパーチイ年代記』 翻訳と注釈 (3) — 『キエフ年代記集成』 (1146 ~ 1149 年)」 『富山大学人文学部紀要』 (63 号, 2015 年 8 月)
- イパーチイ年代記 (4) — 中沢敦夫, 吉田俊則, 藤田英実香 「『イパーチイ年代記』 翻訳と注釈 (4) — 『キエフ年代記集成』 (1149 ~ 1151 年)」 『富山大学人文学部紀要』 (64 号, 2016 年 2 月)
- イパーチイ年代記 (5) — 中沢敦夫, 吉田俊則, 藤田英実香 「『イパーチイ年代記』 翻訳と注釈 (5) 『キエフ年代記集成』 (1151 ~ 1158 年)」 『富山大学人文学部紀要』 (65 号, 2016 年 8 月)
- イパーチイ年代記 (6) — 中沢敦夫, 吉田俊則, 藤田英実香 「『イパーチイ年代記』 翻訳と注釈 (6) 『キエフ年代記集成』 (1159 ~ 1172 年)」 『富山大学人文学部紀要』 (66 号, 2017 年 2 月)
- イパーチイ年代記 (7) — 中沢敦夫, 吉田俊則, 藤田英実香 「『イパーチイ年代記』 翻訳と注釈 (7) 『キエフ年代記集成』 (1172 ~ 1180 年)」 『富山大学人文学部紀要』 (67 号, 2017 年 8 月)
- イパーチイ年代記 (8) — 中沢敦夫, 吉田俊則, 藤田英実香 「『イパーチイ年代記』 翻訳と注釈 (8) 『キエフ年代記集成』 (1181 ~ 1195 年)」 『富山大学人文学部紀要』 (68 号, 2018 年 2 月)
- イパーチイ年代記 (9) — 中沢敦夫 「『イパーチイ年代記』 翻訳と注釈 (9) — 『キエフ年代記集成』 (1196 ~ 1199 年)」 『富山大学人文学部紀要』 (69 号, 2018 年 8 月)
- イパーチイ年代記 (10) — 中沢敦夫, 今村栄一 「『イパーチイ年代記』 翻訳と注釈 (10) — 『ガーリチ・ヴォルイニ年代記』 (1201 ~ 1229 年)」 『富山大学人文学部紀要』 (70 号, 2019 年 2 月)
- カルピニ, ルブルク 1965 — カルピニ, ルブルク著, 護雅夫訳 『中央アジア・蒙古旅行記 東西交渉旅行記全集』 (桃源社, 1965 年)
- 元朝秘史下 — 『元朝秘史 下巻』 (岩波文庫, 1997 年)
- 延広 1997 — 延広知見 「一二四六年のミハイル = フセヴォロドヴィチの処刑をめぐる — 史料と諸説」 『吉田寅先生古稀記念 アジア史論集』 (立正大学文学部史学科東洋史研究室, 1997 年)
- モンゴル帝国史 2 — ドーソン著 『モンゴル帝国史 2』 (東洋文庫 128, 1968 年)

リトアニアの歴史 — アルフォンサス・エイディンタス他著『リトアニアの歴史』（明石書店：世界歴史叢書，2018年）

〔後記〕

本稿は共同研究「初期ロシア年代記の史料学的研究」の成果である。共同執筆者の宮野裕は岐阜聖徳学園大学教育学部准教授であり、今村栄一は名古屋大学アジアサテライトキャンパス学院ウズベキスタンサテライトキャンパスのプロジェクト調整員である。

本稿は、2019年度 JSPS 科研費、基盤研究（C）「キエフ・ルーシ時代の諸年代記の比較対照法による編集過程の研究」（19K00469，研究代表者：中澤敦夫）の助成を受けて行われた研究に基づいている。